

川柳塔

平成五年一月十五日印刷
平成五年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七八九号

日川協加盟



No. 789

二月号

川柳たましま35周年記念大会

とき 5月23日(日)午前9時半開場

ところ 玉島信用金庫本店大ホール

(倉敷市玉島1438)

交通 JR新倉敷駅から市内バス5分

午前9時半送迎バス準備

兼題と選者

「揃う」 橋 高 薫 風 選

「磨く」 田 中 好 啓 選

「無口」 八 島 白 龍 選

「内助」 八 木 千 代 選

「祈る」 浜 野 奇 童 選

「仲よし」 河 内 天 笑 選

(当日発表) 西 川 けんじ 選

席 題 特別課題 (同日発表) 田 辺 灸 六 謝 選

投 句 各題2句 欠席投句拝辞

会 費 2000円(昼食・発表誌・記念品呈)

表 彰 総合20位まで呈賞

連絡先 〒713 倉敷市玉島乙島4385

川柳たましま社代表 田辺灸六

☎(086) 523-1325

主 催 川柳たましま社

賃貸住宅の建築・設計・仲介・管理

売買貸借大きな家から小さな家まで
住居の事なら何でも相談できる店



豊津住宅株式会社

本 社 豊津住宅KKビル

〒564 吹田市泉町5丁目28-27 TEL (06) 330-0102

豊 津 店

〒564 吹田市泉町5丁目11-14
TEL (06) 330-0006(代)
FAX (06) 388-6102

関大正門前店

〒564 吹田市千里山東1丁目9-21
TEL (06) 388-6166(代)
FAX (06) 388-6886

鬼の涙

西尾 栗

あつというまに正月もすぎて、二月に入りました。今年の節分は二月の三日である。昔は四季の終り目を節分というたが、今は立春の前日が節分と呼ばれている。この夜、寺社では「追儺」が行われる。民間でも豆をまいたり、鰯の頭や柊の枝を戸口にさして悪魔を払う。

欧米に「節分」の豆まきがあつたら、何と唱えるか知らないが、日本では「福は内 鬼は外」という。まことに素朴で率直である。

この豆まき行事が盛んになって、麻痺を着た年男が豆をまく。政界、財界、文化人、タレント、野球選手、相撲の力士など駆り出されて、只管、社寺の宣伝効果をねらう傾向が強くなっている。西年の私は七回り目の年男である。

西洋の悪霊や妖怪に比べると、日本の鬼はどことなく憎めない。柊や鰯の頭で閉口するのだから可愛いものだ。

江戸の小咄に、年男に森の石松のような言語障害の者があつた。「福は内、オオオオニは……」と言って、しばらく言

いよんでいると、玄関まで逃げかかっていた鬼が戻ってきて「出るのか入るのか早く決めてくれ」と催促したそう。

伊豆地方の民話に昔、日照りで困っている百姓の所へ鬼がやってきて「娘をよこせば雨を降らせてやってもよい」という。ワラにもすがりたい百姓は思わず承知すると、その晩から大雨が降り出した。鬼は約束通り娘をつれていったが、母親は一計を案じ、娘の袂に一握りの豆をいれた。娘は道々豆をこぼしながら鬼の住家へ行き、春芽を出した豆を頼りににげて戻ってきた。むろん鬼は怒って彼女をとり戻しにきた。その夜は節分で、母親は鬼に炒り豆を渡して、「この豆に花が咲いたら娘を渡す」と言つた。

豆を手には春を待ちつづける鬼の律儀さは、むしろ哀れを誘う。情感豊かな祖先をもつ日本は「鬼さえいいらしい」と児童文学者は言う。

このいじらしい鬼の名をもつ柳人がおられる。高杉鬼遊（本名久）さんだ。曾て雀踊子さんは鬼丸。時の川柳の創始者三条東洋鬼さん（間もなく東洋樹と改名）、番傘の長宗百鬼さん（一匹ではたよりないので、百匹つれてこられた）、元本社の同人で高橋鬼焼さん等々。

鬼遊さんの話によると、鬼の会というのが毎年、定期的に奈良文化会館であるという。集まる人は詩人、俳人、書家、画家の文化人を始め鬼瓦専門家はスナックのママまで、あらゆる分野の人が一堂に集まるとき。そこへ追儺の鬼が遅くればせに現われるかどうかききもらしたが、委しくは鬼遊さんにきいて下さい。

老夫婦鬼にもいけない声でまき、栗
年の豆食べて女の齢が知れ
豆まきは孫にまかせて炬燵に居

座右の句

栄光の日も一日は二十四時

(薫風)

私の句

良い水が出るまで自分の井戸を掘る 井上森生

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 鬼の涙

酉歳に因んで その一

川柳塔(同人吟)

自選集

川柳の群像 戸田古方

■古川柳 柳籠裏三篇研究(十六丁)

水煙抄

路郎賞・川柳塔賞中間発表

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

銀河系

茴香の花

西尾 栞……(1)

西田柳宏子……(2)

西尾 栞選……(4)

東野 大八……(38)

黒川紫香選……(42)

黒川紫香選……(44)

新家 完司……(46)

青枝 鉄治……(68)

河内天笑選……(71)

小出智子選……(72)

小出智子選……(76)

酉年に因んで その一

西田 柳宏子



これが掲載される頃は、既に平成五年癸酉の歳になつてゐるが、私はまだ平成四年壬申の歳も押しつまつた十二月二十五日、クリスマス

マスの賑いを他所に、新生岸和田川柳会の句会から戻り、慌しい中でこれを書いていきます。

酉歳に因んで、鳥の話をしてみたいと思います。大分、古い思い出になるが、雛から育てた鶏が十年を超える長寿で、卵も年間二七〇余個産み、私達家族との愉快な交流の話です(かつて柳話で喋ったと思います)。

当時、戦後の苦しい時代でしたが、僅かな借地自家菜園の片隅に納屋(スコップや鍬や鎌などの物入れ)に隣接して一坪弱の鶏小屋を作り、六羽の雛を飼いました。大分大きくなり産卵もぼつぼつ始まり出した頃から、日曜日などに私が菜つ葉作りの畑いじりをする時、鶏小屋を開けてやると、最初は物怖じしていたが、回が重なるにつれて喜んで外に出て、虫をついばんだり、菜つ葉をついたりして遊ぶようになり、私が土を掘ると出てくるミミズを我先にと奪い合つたり、走り回る

大空のころろ (26)

「綿」

一路集「納豆」

「投げる」

初歩教室「評判」

一月本社句会

柳界展望

■句集紹介 合同句集『たなばた』

各地柳壇(佳句地十選/浅野房子)

松永すすむさんを悼む

■句会だより いずも川柳会

二月各地句会案内

■編集後記

橘高薫風 (89)

春城年代選 (78)

田辺灸六選 (78)

神保拓生選 (79)

吉岡美房 (80)

奥田みつ子 (86)

米田恭昌 (90)

久家代仕男 (101)

久家代仕男 (102)

久家代仕男 (103)

久家代仕男 (104)

座右の句

近寄れば近寄ってくる島の牛

私の句

突き破る壁は私を拒まない

(紫香)

小倉アサ

ようになってきました。

面白いことに、その中に何時からかりーダ
ー的な一羽が出てきたーいちばん卵もよく産
み、体も一番太っていたー一時間ほどたつて
「さあ入れ」と声をかけて小屋の戸を開ける
と、「クック」と声を出してリーダーが小屋に
入ると、残りの五羽も慌てて小屋に入ってし
まうのである。ところが驚いたことに日曜日
祝日等、私が居る時には早朝から一斉に「ク
ックコックコック」と呼び、早く外に出せと
催促です。未だ雨戸も開けていないのに……。

微苦笑しながら外に出ると、小屋の中は大
騒ぎ、「待て待て」と声かけながら戸を開ける
と我先に飛び出す、面白いのはリーダーが
私の顔を見ながら案内するように隣の納屋の
入口へ行き、「クッククッククック」と催促、戸
を開けてスコップを持つと、さつさと畑の中
へ行き、ここ掘れとばかり土を掻きたてる。
スコップを入れると土を起すより早く、スコ
ップの下へ首を差入れ、ミミズや昆虫をつい
ばむ。一時間ほどたつまでは、いくら入れと
追い立てても逃げ回るが、大体一時間位で腹
も出来、砂浴びもすむと、「さあ入れ」の一言
でさつさと帰るのです。何が鶏達に休日を教
えるのか、平素の反復から納屋でスコップを
取れと催促するのか、馴れると可愛いものだ
なと思つて、見ていた人が驚いていたようです。
次回は「その二、小鳥との交流」を。



西尾 葉選

父母の写真を抱いて古都の秋
和歌山市 木本朱夏

さよならを先に言わせる憎いひと

木枯しに仄かに思うひとの距離

ぬるま湯のようなおとこに焦れてくる

ほどの良い男にその気誘われる

寝てひとり食べて独りの冬籠り

竹原市 小島蘭幸

ネクタイを締めると笑わない羅漢

校内放送ときどき次女の声がする

黙っているとき良いほうにとっている

追突したのは 神様だった

一番悪いところを鬼に見せておく

缶珈琲の温さを二つポケットに

藤井寺市 吉岡美房

新春の風の中なる人となり

新年の風一杯に入れる窓

新年の夜も独りの灯を点す

お目出度う十日も言えばだるくなる

禁煙をしたらと思うしてもと思う

正義感ひとりになって酔いつぶれ

体温計 今日の設定を狂わせる
京都市 松川芳子

ハードルの高さへ助走くり返す

持ち駒を無くした母の黙秘権

人間のゆとりロボットから貰う

情けには弱い余生の影法師

木守り柿 母は元気と言う便り

唐津市 久保正敏

証言の嘘を手直ししてる嘘

試着した下着を戻すのも勇氣

ホップステップ終って喜寿へするジャンプ

戦列に加わる朝の定期券

ネクタイをいつも締めてる抜け出せる

老け込まぬために妻には言えぬこと

和歌山市 福本英子

冬彦さんと共に年号改まる
逢うてきてうちの神様騙しよい
軽いいのち重い生命と医者通い
診察へ足重くなるある予感
万歩計おいしいお店見付かった
濡れ落葉悔った日の事故多発

和歌山市 西山幸

横糸をしめてゆるめて妥協せず
罪の償いに一病賜わりぬ
年の瀬を越す競争のいきれ
友情を失う自我と浅知恵よ
十人十色の中で眩暈をくりかえす
勇退という悲と哀に甘んじる

大阪市 西出楓楽

ルージュ濃くひいて逃がたいことがある
三高の娘が縁がまとまらず
笑い袋小出しに冬を乗り切ろう
中途半端な答出してる五十代
冬ごもり電気ガス代電話代
JISマークついたお方でつまらない

豊中市 吉田あずき

造反の拳の中は何も無し

握手した時からライバルだと思っ

コースからはずれて海が見たくなる

一度だけでも一度だけ深い淵

かずら橋一步一步にある度胸

冬の実が幸せそうに赤うなる

下関市 石川侃流洞

新世紀宇宙もゴミに悩むだら

川の字の温みに愛が育てられ

リゾート開発みみずの嘆き聞きもらす

スナップへ見知らぬ女いてもめる

暖房が蚊の残党を蜂起させ

倉吉市 奥谷弘朗

他人の子育てただけの人生で

気取り屋で野心少々強すぎる

はじめから逃げる気にいる利口者

来る春を忍んで花の芽が育ち

高飛車な彼に取られる主導権

伊丹市 樫谷寿馬

懐かしきだけは遺せよ十二月

一着の背広に喜びも悲しみも

小春日にクリムソーグ遅々と溶け

リエという名を探してるチャンコ鍋

ひんやりと宅配便のふぐが着く

松江市 柳 樂 鶴 丸

晴耕雨読タイムスリップしています

美人にはとっても弱い弱い僕

スカートめくりの元祖は風でした

妻の皺は僕が彫りました

六十五は六十五の青春がある

松江市 舟 木 与根一

銘々が線引きをする世界地図

左遷地の地酒が口に合うてくる

週休二日疲れを溜めている師走

来年の手帳へ妻が笑い出す

気を楽に楽にし除夜の鐘を聞く

島根県 堀 江 正 朗

妻の手は温い 荒波どんと来い

窓鳴らす風は雪を連れてきた

てのひらの記憶誰にも負けまいぞ

眼の奥に日の丸小さく温める

後を押す師走の風も騒音も

島根県 堀 江 芳 子

きのうのような速さを想う夫婦箸

わがまを済まぬすまぬと酔ったふり

戦盲の昔ばなしは戦友と

竹を踏む竹に笑われまいとして

ふたり居るからやれる事ばかり

倉敷市 小 野 克 枝

縄の端握り合ってる生きている

小さい灯が小さく揺れる吹き溜り

お互いに財布の軽さ探り合う

戦争に負けたページを探す老い

さようならばかり見ている駅舎の灯

笠岡市 松 本 忠 三

女房へ借金 婦唱夫随なり

百姓はさせぬと言ったにお父さん

関係がない話です距離をおく

いろはでもあいうえおでも下のほう

男前上げ下げがありご用心

名古屋市 越 村 枯 梢

三枚目に徹しきってる下り眉

自虐かな鯛より鯛に箸が伸び

どん底の暮しに縁なき不況風

生れた家は薬屋根だった秋祭り

黄泉のみにちにコーヒー店もあるだろう

岡山県 嘉 数 兆 代 賀

ひとすじの痛みに耐えた冬帽子

許す気になったら碧い空が見え

ピンチには強いおんなの細い腕

木洩れ陽が昔ばなしをしてくれる

老樹しずかに風の言葉を聞いている

米子市 林 瑞 枝

光の海のなかイブの夜が更ける

繙帯の少し足りない疵を負い

裸木に陽炎の立つよもぎ摘む

惹かれては好んで歩く古い街

追い縋るものをコートの下に抱く

京都市 都 倉 求 芽

句読点打つことばかり六十路坂

連綿と健在 田沼 柳沢

ほめ殺しもう会社にも流行り出し

腑に落ちぬものに呑屋の駐車場

財布から金が出たがって困る

寝屋川市 江 口 度

イエス・ノー迫る老妻あきもせず

しばらくは泣かしておけと嫁の目が

振り向くと寝たきりの祖母手を合わせ

下駄箱の菊がぺちや靴揃えさせ

ホームごたつの上のみかんはようしゃべる

豊中市 田 中 正 坊

きさらぎや廟行鎮の敵の陣

文豪という語がありき漱石忌

雨の中 分列行進するシーン

等身大の人形と居る寒い部屋

米寿には米寿の演技 笠智衆

堺市 高 橋 千万子

赤だしのオコゼ朝からにらまれる

倅せな友 余白なき老夫婦

欠点か美点か老いの金遣い

ポケットにみかんを入れて下戸中座

美しく枯れて行きたく祈る日日

松原市 玉 置 重 人

差別など決してしない自動ドア

窓窓に灯りがともる物語

自分にはいつでも甘くしています

子が来る孫が来る冷蔵庫が溢れ

百歳の望み持ってもいいですか

豊中市 安 藤 寿美子

スマイルを忘れぬ婆さんになろう

水墨に浮かび上がった白椿

討ち入りの日やなとひとりごとを言う

顔見世に着て行くもんがないやんか

膝がまた謀反おこした十二月

堺市 楊 井 二 南

病床の妻の小言を聞く安堵

迷信の通りに事が運ばない

妻君の名前初めて知る賀状

同情はするが許さぬ付け上がり

特産の土産が誘う里心

岡山市 川端 柳子

初日への一步まぶしく和と語る

冬木立 熱い想いの充電中

知らぬふりしているわたしの冬帽子

人間に戻ると世間がせまくなる

夢にもないお言葉 箸をとり落し

奈良県 田中 紀美代

愛情もときどき換気して育て

もう何べんおだてに乗った宝くじ

緊縮になって家計簿らしくなり

町会へ出す提案は並が良い

ししがしら咲いて奥様病んでいる

西宮市 奥田 みつ子

お金では買えぬ安らぎ老夫婦

菜根譚 争いごとに遠くいる

花つけてサボテンさえも恩返し

貼り替えた障子にひとり座ってる

紫式部の鉢植えもあり古書の店

今治市 矢野 佳雲

手品師が主義主張ない旗を出し

やる気ない時計三時に二つ打ち

檜山はいいとこですと嫁が言う

リハビリの明日を信じて紙を折り

それが罪なれば二人で受けましょう

今治市 越智 一水

荒波の能登の女はやさしいよ (奥能登一周の旅)

能登の海未練すてよと波の華

朝市で母に似た老婆のものを買い

「父^{とと}樂の町」と朝市女の座

お土産はテレフォンカードで軽く旅

奈良県 宮口 笛生

暴飲暴食楽しい正月だ

正月の酒 妻が優しく酌いでくれ

一番の極楽にいる寝正月

腹空かしがてらに近い初詣

一キロほど妻も太った三ヶ日

西条市 片上 明水

商店のチラシが春の字に替わる

母さんの派閥が父をややリード

風船屋紐の長さを試す春

本堂の畳の冷えが消えて春

境内に尾を引く春の線香立

鳥取県 土橋 螢

初春の慈悲の光にうろたえる

目を閉じた女の指に触れてやる

ひとつ終りひとつ始まる花の芽よ

もうひとつ若くなりたい賀春かな

幸せの小さな春の音がする

美禰市 安平次 弘道

鳥取県 新家 完司

耳欠けた地藏が知っていた噂
しがらみよさらば片道切符買う

傍觀者ばかり正義は葬られ

ある喜劇ひとりよがりかけつまずき

卯酒 夫婦は風邪を移し合い

高槻市 川島 諷云児

遅刻する心配もなし我無職

寅さんのように余生を過ごしたい

花好きへ花好きが来て花談義

遮断機が上がると走る癖がある

飛べそうで跳べない老いの水たまり

東大阪市 森下 愛論

閑散期狙ってママと飲むお酒

もの足らぬこの一本で潮時か

米になり酒になりして揺れる稲

ご覧候え冷凍庫満タンの我が暮らし

己が金出すのに銀行のせまい窓

廿日市 林野 甦光

安らぎのひとつとき朝の梅匂う

老いを楯に定職持っていない惰眠

地球から洩れた男のはにかみか

相槌を打ってる人が傍にいる

齒車が時どき狂う資金繰り

大都会鉄の触れ合う音がする

気まぐれなブリキ屋きようは休みだな

気にしないようにしている敵の数

あしたはあした今はお酒を飲む時間

雨が止んでお借りした傘じやまになる

大田市 藤田 軒太楼

ゆとり出来とばけるほうも板に付き

三三に狙い定めた勝負どこ

白髪に見る年輪の洪い艶

ささやかな楽しみへそくりの隠し場所

誰知らぬ近道を行く孤独感

奈良市 天正 千梢

怖いなあ「わがまま運びます」の旗がゆれ

ミッシェンスクールに通いキリスト教に反発し

ただれた心を一片の雲に癒されて

いろはの知らない男が多すぎる

鳥口いたずらに引く設計図

松原市 小池 しげお

髭みても昔の人は偉かった

敗者復活自分の足で歩かねば

うわさでは蓼喰う虫になつてゐる

兄嫁のさしがねだとは気が付かず

逆らえば妻の白髪が目立つなり

尼崎市 春城 武庫坊

軽い嘘とがめるように寒の雷

寒雷にパールハーバー思い出す

自分史を繰ると昭和の流行歌

湯豆腐で京都の冬をたしかめる

ポスターにさそい出されて冬の山

尼崎市 春城 年代

一年の悔いを集めて実南天

わたくしをたやすく許す十二月

看病疲れを引きずっている冬の底

無駄にした二月ままと逃げられる

北窓の露は書齋のあたたかさ

寝屋川市 柴田 英千子

鬼は外 五枚コハゼの足袋を履く

要職につくと余白がせまくなる

妻の晴着を敬っている叙勲

ピリオドは打てぬ桜の幹の艶

ストレスが減ると体重増えてくる

熊本市 永田 俊子

かみ合わぬ世代へ明治のひとり言

一本道歩くあなたは絵にならぬ

母の居ぬふるさと他人の顔をする

それからは甘い言葉の裏を読む

生きざまの正解他人が出してくれ

仙台市 川村 映輝

北の国 春一番が待ち遠し

ボーナス月年金受給者ひとそと居る

生活保護うけてベットと遊んでる

集まるところ女に圧倒されている

水の無い川に民話は生まれない

柳井市 弘津 柳慶

南無阿弥陀せめて今夜は夢に出よ

喜寿過ぎてまだ駄句をひねっている

いじめっ子の彼が僕より先に逝き

議員の手当を上げる議事進行

祝詞をこまった顔で引き受ける

八尾市 内海 幸生

今年こそ懲りず今年も今年こそ

酒豪の名返して知った酒の味

後始末承知で孫に兎買う

同文につきとは知れどウナで打つ

名句あり以後壁になり糧になり

八尾市 宮西 弥生

だんまりになると淋しい冬になる

梅に来て桜の出会いして別れ

一寸先闇の向うにバラも咲く

楽な道選んだ迂闊遠まわり

血縁の絆もつれた足の冷え

寝屋川市 稲葉冬葉

和歌山市 若宮武雄

初寅に美食家として木の芽漬
よく笑うおんなを騙す福袋
悪たれをついた昔を美化しない
寄り添うて寂しいなどと贅沢な
終章に入るさびしさを認める

羽曳野市 榎本吐来

借景じゃない天辺の庭の柿
古里の蜜柑の味に亡母が棲む
旧交を温める名は鬼ころし
血糖値頭の隅に屠蘇を汲む
書くほどの遺言はないコップ酒

今治市 野村京子

生い立ちを泣くしぐれ雨きつね雨
この章をピンクの彩にしたい恋
火の絵風の絵 抜けた女の束ね髪
出来すぎた嫁を肴のクラス会
無位無冠父に似ている雪羅漢

大阪市 津守柳伸

しあわせな居職女の鼻柱
嬌声は満艦飾のツアー客
不況風感極れり冬銀河
満中陰きつちり届く都市砂漠
実年の恋水臭いテリトリ

雑草の遠慮知らずも生れつき
ひょいと出た鬼が仏を輝かす
独りではどうも弾まぬ鍋の湯気
申どしのやはり流行った猿芝居
新聞もテレビも霞んできた齡

和歌山市 堀端三男

オリオンが湧えてますわと見送られ
結び目で老母だとわかる荷が届く
昔むかし彫ったイニシャルある鎮守
段取りを変えたら先が見えて来た
差し水の好きな男で嫌われる

和歌山市 内芝登志代

怒らずに賞めて自分も救われる
炬燵にみかん昔話がしたくなる
幼子を抱えた喪主のきれいすぎ
病み果てて見舞の客を遠ざける
沢庵をおいしく漬けて歯がない祖母

和歌山市 垂井千寿子

実力の無い七光の予約席
束の間の夢を見ていた株の欄
ローン払い終えて茶の間の灯が明かい
青い海 白帆が目立つ日の平和
天国の予約信じてボランティア

和歌山市 松原寿子

樹の傍にいたいと思う掌のぬくみ

わたくしの心を縛る紐を選ぶ

おんなへん影を宿した日の余韻

展望の死角で夢をあたためる

意に添えぬひとこと重くのしかかる

和歌山市 内田結実

人間が煩わしくて煩かむり

一本の藁にもなれぬ腑甲斐なさ

老いらくの女の演技艶を増し

皺かくしですのよ冬のサングラス

孫あやす顔で恋文綴れない

和歌山市 桜井千秀

外套で包み込んでる冬の鬱

独走の毬は弾まぬまま転ぶ

上首尾の喜劇へピエロ忙しい

テレビドラマ佳境へ鳴ってくる電話

矢面で偽りごとは通じない

和歌山市 細川稚代

嫁ぐ娘に母が持たせる知恵袋

ボケ咲いて冗談だよといなされる

やさしさが過ぎて花が枯れました

女三人そつと古疵ふれたがり

浪花っ子本音で勝負する男

和歌山市 福井桂香

りんご二個あれば立派な絵が描ける

友達がいっぱい欲しい冬苺

友情の冠で舞う紅孔雀

ひたむきな亀のずるさを持て難す

沢山のヒントをもらう樹をゆする

有田市 松井かなめ

何をしに来たのかはてな考える

箒持ち亡父に追われた日と思う

構えず力まず新春をむかえよう

お地藏さんどんな願いもきき上手

新築のマンション鳩が先ず入る

和歌山市 田中輝子

思い出し笑いが続く去年のこと

歳かくす積りはないがメイキャップ

あんなことこんなことあり梅香る

庭を掃くそれから続く黙秘権

本物と出会ってからの失語症

海南市 三宅保州

白旗は揚げぬ男の風車

鉛筆を持つと訂正したくなる

オクターブ下げると楽になれるのに

ご予算に合致しますとは失礼な

ロボットに目鼻つけると僕になる

和歌山市 青枝鉄治

働く手じつと見つめる十二月
日銭追う父の帰りを待つ柚子湯
政治への不信残して除夜の鐘
火も水も抱いて女を演じ切る
職退いて人間の顔とり戻す

和歌山県 小倉アサ

沈黙がわたしの椅子に相応しい
通せんぼされて善意というドラマ
投げられた石と対話の出来る位置
内心はとうに許している冬芽
正月の音こぼれだす三ページ

十和田市 斉藤 荔

今日よりは雪と付き合う甘酒よ
好き嫌いやわす落ち葉は重なつて
芸人の藝の一字も芸たるや
積もる気はまだない雪です冬牡丹
雪吊りの縄と芸術しています

弘前市 真喜内 實

三十年以前と同じ瞳で見詰め
かけだしにあるのは今の一步だけ
耳鳴りと思ひこむ雪積る音
たてまえの議論まるめろ喋らない
二年短大 五年大学 村役員

弘前市 村田善保

終着の駅と余生を重ね見る
潮騒が四島返還の子守歌
いい汗をかいて男の貌となる
肩書がとれて気楽な赤いシャツ
アングルを変えて人生模索する

黒石市 相馬一花

お隣の女房誉めて減る銚子
褒められて飲むより高いマイク料
コーヒーを飲んだ振りして出るホテル
子を産むと妻は大事な資産です
窓際に座りストレス見てるだけ

弘前市 小寺花峯

二次会は畳に飲ます酒もあり
片減りの靴を無口で磨く妻
妻に主権渡したテレビの腕枕
良く吠える犬です今日は風邪をひく
巣立つ気配なくてこの子誰の子カラスの子

十和田市 阿部 進

むきになり弁解するから誤解され
良い知恵がことすんでから湧いてくる
のんびりと焦らずほぐす縄れ糸
倅せを掴む手だから大事にし
下請がまともにかぶる不況風

弘前市 佐 治 千加子

偏差値のない余命です元氣です
限りなく続くものとは思わねど
女偏 波をかぶって生きている
ゴーサイン平行線上歩き出す
変り身の身体髪膚お大事に

大和高田市 岸 本 豊平次

孫の写真茶の間に立てて老い二人
単刀直入言い訳などは言わさない
有給が今日もパジャマでごろごろし
ドッグ入りまた千年を立つ仁王
白と黒力引き合い水墨画

西宮市 門 谷 たず子

善悪の切取線に亡母がいる
気が付くと亡母とおんなじ独り言
金婚というタイトルにある浮き沈み
吊し柿故郷の軒を恋しがり
射程距離へ夫と子を置き満ちている

姫路市 人 見 翠 記

冬の雨読書三昧の炬燵かな
初霜に水仙の葉は凜として
かりんの実落ち始めたり十二月
富有柿の色紙の主より柿届く
思い出は銀座四丁目のティールーム

箕面市 坪 田 紅葉

足腰は弱いが口は達者すぎ
若者を勝手気ままにした世の流れ
次々と喪中挨拶暮れ近し
国際線ジュニアカップルの多いこと
一人でもあれこれ用事落ちつかず

高石市 浅 野 房子

フィクションの世界で遊ぶ私小説
易者の灯ゆらゆら信じられますか
易学を学び災い避けられず
する事はするが文句も多い妻
過ぎ去った話に尾鰭ついてくる

寝屋川市 岸 野 あやめ

松飾り老後の初春は穏やかに
西の年サンズイ偏も要りますな
来た道の点景にある子の情け
病院へ八坂神社が近道で
百様の病気に百の家族あり

宝塚市 丸 山 よし津

労働に喜びのあるミレーの絵
一粒の種が抱いている未来
郵便のバイクの音を待つ三時
山坂を越えて迷わぬ道に出る
鏡台へきような自信を聞いてみる

米子市 小西雄々

恵まれた日本に気付く渡り鳥
久し振り会えば墓相の話など
喪にいそぐ心せない里帰り
コマーシャルしてもわが家が嫁が来ぬ
天の声 地の声 読書聞きわけ

米子市 石垣花子

真つすぐな道を行かせた二尺ざし
臍曲りの父はこの街よう抜けぬ
信じてもないお守りはなせない
金の成る木を今挿木しています
宝物殿の笛や太鼓は失語症

米子市 田中亜弥

神も仏も不在わたしは病んでいる
気のめいる話の続き聞かされる
Aランクに私の度胸つけてある
音の鳴る方に大きな罌がある
短い首を笑ったやつが先に逝く

米子市 野坂なみ

神さまと指切りをして対になる
どっこいしょ 齢がわたしに声かける
いきいきと歩きその駅遠ざける
少しづつ短くなって行く影よ
もう立てぬ予感へ象は抜けてゆく

米子市 青戸田鶴

そこそこの幸せ祈る春の膳
故里に包まれコーヒーのんでいる
公孫樹黄に亡父の五十回忌終え
足腰を痛めた秋の傷深い
横断歩道渡ると友が待っている

米子市 菅井とも子

鶯が見ていて窓があげられぬ
にんにく灸今日もすえてる足三里
平凡に暮せますよう年女
幸せを受けて両手を遊ばせぬ
バブルはじけて舵取りなおす台所

米子市 寺沢みどり

落書きの好きな右手がおちつかぬ
ポストまで歩ける距離に住んでいる
手のとどく位置にポットがおいである
親の立場でいつも物差しあてている
思ひ出をスパイスにして皿満たす

米子市 政岡日枝子

はんなりとジョークで人を刺している
網の目にかかるは肥満体の母
ものさしに主張させるとややこしい
仕度完了あとは優しくするだけだ
ものさしを持たずに逢える友がいる

米子市 澤田千春

舵とれぬ私に友の肩がある
相棒がいなくなっても空がある
包み紙にまどわされない歳になり
何事もなかったように自動ドア
のみこんだ言葉が不意に騒ぎ出す

米子市 新正子

週休二日 仮面がひとつあくびする
箸を置く音さえ腹が立って来る
許す気で回すミンクの請求書
混浴の湯気に天女を期待する
狼と今は言えないうちの人

米子市 金山夕子

振り向いて下さい白いスーツです
今も手に父の方程式がある
住みついた猫の名前は冬彦と
どこに立っても目立つわたしはライン
叱られたわたしを包む寒ぼたん

米子市 光井玲子

青い空師走の風を和らげる
生きている一つの傘を繕うて
浅知恵を叱ってくれる友がいる
一言をぐっと呑みこみ独楽回る
半びらきの心で熟す冬苺

香川県 松村迷観子

甲子園広さの尺度に使われる
旬の味ハウス先取りした値段
宇宙から帰り祖国の秋を吸う
交叉点越えると他人の顔になり
四世代生きた証の写真帳

香川県 木村明人

鉛筆を尖らせ狭き門攻める（入学試験）
適当に曲って屏風立っている
申告を済ますと春はもう近い
露のトウ春を先取りして青い
集団自決の島が観光地に化ける

香川県 成重放任

暴走の車にやられた水しぶき
ポケットの夢をあなたと咲かせよう
日陰でも力の限り咲く野菊
生涯を○と×とで決められず
皮算用したばかりに丸裸

香川県 川崎ひかり

長生きをしてもたかだか百年余
胸にまだ燃ゆるものあり紅を引く
日々精勤今日はうれしい月給日
校門を出ると風になる子供
肝心なところばかりしている話

香川県 永峰 伽名子

鳥取県 両川 洋々

口紅を引くと若やぎ口ずさむ
自分流に彩り添えて自画自賛

目の鱗落して来ました嵯峨の竹林

下駄履いて去来やアーと出て来そう(落柿舎にて)

井戸端の会議に習う一つ二つ

香川県 池内 かおり

お友達中に意中の人も入れ

ご亭主のコタツの席は空けて置く

悲しみを強さに変えて女生き

上役はオダテ上手でコキ使う

思い切り羽根を伸ばした後のツケ

香川県 新川 マサエ

肩書きに押され挨拶四角ばる

期待した切符の座席気にかかる

手相見の確信にあい乗ってみる

顔立てて一度は渡る丸木橋

立て替えたお金が溝を深くする

鳥取県 土橋 はるお

祭りにはワラビゼンマイ蒔料理

定年の首を質屋に入れにゆく

ひよっとこがチューインガムを噛んでいる

網の目を替えて一等米にする

父の好きな唄が魚を売りにくる

枕木よ貨車よお前も病んでるか
飢餓の子へ神も無口になりたまう

一コマの漫画で足りる人生よ

国会の賄賂伝説もう飽きた

一度だけ神よ不倫へ目をつむれ

鳥取県 江原 とみお

お手本に隣の主人だしてくる

髭の長い易者の方にみてもらう

ビニールの傘は健忘症らしい

旗じるし外してただの棒になる

咲いたら散るなんの理屈もありません

鳥取県 林 露杖

何方もコケケッコーといかぬ初春

地球病む飽食の国飢餓の国

王室の不倫を憂う鶴の首

喚問に地元もそっぽ向く師走

長生きもなにか不安に喜寿の春

鳥取県 松下 たつみ

トンネルを抜けて凜凜しい顔になり

自転車に歩かれ義理の歩を合せ

消化不良だろうか人疑うことが多くなる

ふる里はここで死にたい人ばかり

気まぐれな登山冬山ねむられぬ

鳥取県 羽津川 公乃

鳥取県 春木 圭一郎

老い二人しつかり灯油買つておく
マル優の梓戴いた誕生日

美容院でますます自信喪失症

宝くじ無欲で買えと言われても

気を抜いたばかりに闇が深くなる

鳥取県 津村 八重子

子も孫もそろつて温い置きごたつ

愛の輪を広げあしたのじげおこし

喜寿すぎてこの田を守る幸せよ

面食いの男美人に縁がない

春うらら心みどりにぬりかえる

鳥取県 西原 艶子

偏差値のストレス ママへ子へ溜り

ストレスを捨てゐる大きな窓がない

可愛いと好きの違ひは知っている

地下茎を伸ばして思い探りたし

まっすぐを言うてけむたい者にされ

鳥取県 森山 盛桜

分別の狭間に鬼も蛇も見える

車座の真ん中あたりから揉める

都会から微熱を抱いたまま帰り

常夜灯さえも眩しい影法師

冠が落ちる頭を下げれない

私の選んだ道だふり向かぬ

ボーナスも妻の手に乗り生かされる

高年者大事にしてゐる社は榮え

びくびくと五億位でしなさんな

裏口も金額順に混んできた

鳥取県 武田 帆雀

意は尽くしませんがそのない祝辞

妻が押すりモコン偉くならずとも

カットパン剥がして女に逢う日なり

哲学と美学 無学に難しい

世を憂う初冠雪を見てご覧

鳥根県 西村 早苗

戦傷の自慢 湯の宿雪となる

指一本見せてのれんに腰を掛け

別れとや手袋の白目にのこり

春の雨姑居眠りばかりする

蛇口全開悔し涙をながすまで

鳥根県 小砂 白汀

潮充ちてくるぞと思う蟹の穴

砂山の砂に足をとられそうになる

隙ちよつと見せるとユダが仮面ぬぎ

北風の中でもビーナスふくよかな

秘書いくつ命あつても足りません

島根県 榎原 秀子

久しぶり筆を持つ手がぎこちない
大売出しのビラで重たくなる新聞
後悔をためて降ってくる氷雨
愚痴きいて貰えて好きなお月さん
横断歩道渡る背筋をよく伸ばす

出雲市 金村 青湖

木枯しへ繞みし柚子も木を離れ
わくら葉の愚痴ばかり聞く吹き溜り
積読書増やして暮れの灯に稼ぐ
人を恋い人を憎んで歳暮抄
千の罪千の情けに諭される

出雲市 園山 多賀子

露天風呂驕りを月に覺られる
としよりの自負捨て切れぬ鯨尺
シクラメン公にする愛育つ
物忘れ吹聴するとは哀し過ぎ
頼杖に迷路を脱ける策がある

出雲市 吉岡 きみえ

田舎にはいろいろあって足袋を履く
いい夢をいっぱい詰めて枕縫う
コスモスを理想にしている拒食症
かつぼう着一番よく合ううちの母
ふるさとの炬燵と母の灯が恋し

島根県 松本文子

人魚見た日から船舵狂いだす
芋版に彫れば優しくなる賀状
のし袋しがらみだとは思うまじ
過剰包装 娘も銘菓なみにして
ドライフラワーまだ生かされるのでしょうか

島根県 藤原 鈴江

淋しいねテレビが友だなんていや
口げんか出来ぬ独りよ昼の月
遍歴の果てにもらったこの心
しんしんと心乱れる雪が舞う
いつの日か幸せ来ると信じこみ

出雲市 久谷 まこと

環境に素直に染まり風まかせ
物わかり良くて返事情がない
後一步想い届かぬ隠し文字
春遠く花芽を持たぬ涸れた愛
究極の色も野望で混ぜ合わせ

出雲市 板垣 草丘

選挙区の民度を問えば雪が降る
要不要聞くから掃除抄らず
自発的 仕舞仕事に庖丁とぐ
もう一度うしろ向かせて送り出し
潮時に帰るにこころ乗ってこず

島根県 高野律子
糖と塩 釘をさされた医者通い

古傷を撫でて昔をこいしがり
古希の坂ころばぬ杖の花作り
悲喜共に多く語らぬ父の背
世の移り瘦せたい苦勞一つ増え

堺市 藤井 一二三

和を以て貴しと為すさりながら
世を地味に生きて走ったことがない
猿まねて反省六十六の暮
酒仕込む杜氏の唄あり蔵小春（伏見散策）
寺田屋の襖のしみに冬日差す

堺市 黒田真砂

孫の事故命の氷る二三日
リハビリの散歩が語る松の青
ときめきが未だ少しあり秋を着る
罪あまた重ねた末の萩の露
酉年の友のやさしさ寒椿

姫路市 大原葉香

落葉にも序列あるらし散ってゆく
赤い羽根つけ善人らしい顔
表彰を受ける素顔の輝きよ
物置を整理昔につき当る
ラクダの背 月の砂漠はもう知らぬ

姫路市 丁坪サワ子
競り市を思わすドラフト野球界

億々に麻痺した耳が謀反する
茶番劇うんざりしてる庶民の目
会食へ氣勢上げてる熟女達
死花を咲かす季節を見失う

姫路市 中塚遊峰

身に余る倅せ父母がくれました
逆境も亡父あってこそ今日の日が
赤紙で父知らぬ息子と古希迎え
一番の味方 机上の辞書二冊
脳死では三途の川も渡りかね

唐津市 田口虹汀

普段着の中で見付けた倅よ
苦中在樂などと気取った若き日よ
掘り火燵 孫と親父の意気があい
沢山な柚子に揉まれて誕生日
昔公を一番鶏がせきたてる

唐津市 仁部四郎

還暦へ合わせ鏡の合理性
還暦の頃から賞が欲しくなり
還暦を満で数える日へ預け
還暦と定年秤微動せず
好物はめし還暦を祝う膳

唐津市 筒井 朴 竜

見晴しの佳境へ植樹納骨堂

余命表貰えば禁煙禁酒かな

鯉五郎を追う濁機釣り天狗

菜畑の遺跡に実る赤い米

古唐津で妻と粗茶酌む琴の春

岸和田市 福浦 勝 晴

憶測を逞しうして浅い思慮

三次会財布に相談して逃げる

満腹のあとの頭脳は真つ白で

円満な人ですいつも酔うてはる

舶来のペットを細君鼻にかけ

岸和田市 芳地 狸 村

晩秋を楽しく歩く八千人(加吉川ツデーマーチ)

秋晴れに歩け歩けと家族連れ(「」)

出迎えの案山子の顔が僕に似る(権現ダム)

言い訳を冷たく聞いている他人

コーヒー飲むだけの懸意疑われ

岸和田市 島崎 富志子

福寿草松から離され小正月

五分五分の夫婦で仲好く年が明け

耳少うし遠くなっても夫元氣

タコやきをおいしく食べたは二日前(故植山武助さん)

口癖のもうあかんあかんが聞かれない

岸和田市 原 さよ子

冬の陽を拾って私の一万歩

片付かぬわけの一つに長話

今年こそと思つた今年も十二月

頼りにする人ばかりが先に逝き

やりくりは口に出さな主婦の意地

岸和田市 古野 ひで

一枚の賀状で守る義理と縁

二の足を踏む背へ風が押しに来る

肩書きがとれて気楽なベレー帽

逢う事はもう無いだろうちぎれ雲

人恋し流れる雲を追っている

岸和田市 高須 賀金 太

暖冬が七年続きそうな気配

練炭の臭いなつかしおせち炊く

新年やウルトラCはないかいな

ええ加減にしいや動かへんテレビ

すらすらと君は日本語しゃべれるか

岸和田市 岩佐 ダン吉

昭和史の風化許さぬ孤児来日

絆だらう死んだ子猿を抱いている

無言劇妻の威圧に押されてる

肩書きが多くて男軽く見え

旅日記気楽な僕が住んでいた

竹原市 三宅 不朽

晩学のこれしきの書架悔いの書架
無位無冠いざ鎌倉はきつとある
健忘症こしき置かぬ物が増え
ライバルが私の好きな絵を見つめ
山茶花の咲きつぎ冬へたじろがず

竹原市 森井 菁居

俺に似た多弁の彼を娘が選ぶ
その内に尻に敷かれる男たち
妻も私もおのろけを聴く役まわり
婚約期未来図ピンクに塗るも良し
婚約成る迷信だった丙午

竹原市 時 広 一路

露天風呂 工事中とは聞いてない
これもまた冬の海です風いけます
どうしよう棘の見えない薔薇一輪
原色で冬を咲くとは素敵だね
衣替え山がするから僕もしよ

竹原市 岡本 清水

露見する噂を期待する野心
努力した過去ほど太い根に育ち
好きな花摘みたい心背が足らぬ
朝の挨拶今日一日が生きて来る
永らえて水の流れに教えられ

竹原市 岩本 笑子

ちぎれ雲急がなくてもいいのんよ
耐えて耐えて女一人の紅を引く
三猿になり切れなくて長電話
三人の受験おろおろおろと母
また二人切りですねえと四十路坂

八尾市 宮崎 シマ子

正月もジャンパーが好き気が軽い
差出人の名のない年賀当りくじ
重箱の重みに因習詰めてある
犬の首輪新調にしてお正月
間違ったのは母に似ていた人だから

八尾市 高杉 千歩

節分の豆を鬼と数えてる
フルムーン二人で行くには高くつき
メルヘンの街で見つけた魔女の杖
幸せを確かめたくて雪の街
一波乱あったらしいな冬炬燵

八尾市 山下 美津留

新しい家族の絵馬と初詣
年の暮れ女性上位の宴に出る
大不況神農さんも効めなし
大仏の鼻しつかりと見て帰る
腹減っているなと思う小言聞く

八尾市 片上英一

占いに溺れあすは東今日は西
生きてきた過去をお酒で割る話

深情けほしいとおもう夜の雨

真っ赤だナちよつと気にして明太子

浮き世とは非情無情か すがた鯨

八尾市 吉村一風

雪降ると旅が誘いにやってくる

愚痴言わぬことにしてから若くなり

口だけと言われたくない金も出す

証無くても澄んでいる眼を信じたい

紅葉を惜しむ疎水についてゆく

岡山県 矢内寿恵子

文才に遠く真心書いてます

ソマリアの飢餓に重たい飯茶碗

カタカナで学びカタカナ辞書を引く

あさき夢秋の深さにいる枕

原点を忘れてしまう進化論

岡山県 二宗吟平

生涯学習NHKに席を置く

日の丸を出して私の寝正月

何をしたかいな昨日をみな忘れ

日がな一日句想を練っている私

迫り来る卒寿へこぶし握りしめ

岡山県 池田半仙

暖房もストーブになる囲炉裏跡

鯛焼きの尻尾に餌のある魅力

落城をさせる切札持つ余裕

劣勢の時は余計に湧くフアイト

初詣ジャンパー姿となる時世

岡山県 荻野 鮫虎狼

真実が少し判った地獄道

木枯しへ挑戦無職の独り言

韓国の河豚を食わせて下関

独居して鼻毛の伸びる日が続き

切腹も出来ず主人の十二月

岡山市 井上 柳五郎

いい話暫く伏せる頼まれる

逞しい女にさせた不幸せ

自他ともに営業用と見る笑顔

泥棒の狙う家留守番電話

メモ帳をどこへ置いたか十二月

岡山県 山本玉恵

思いつとまためぐり合う愛その他

知恵の輪をむすび直してからの運

回り舞台の中程に置く花の章

飯の世の未練に今日もさいなまれ

一番好きな帽子に旅を急かされて

高知県 赤川菊野

ふところ手男の美学 竜馬像
借りものの知事で可もなく不可もなく

も一人の自分がとても愛しゅうて

終点が見えて牛歩に切り変える

プロポーズ六十二円で物足らず

高知県 小澤幸泉

キリストの生命に生きる遠い道

雪チラリ戦敗れた兄の影

一服が旨いあの日がよみがえり

病名がうれしい程についてくる

もう止めにしたらと妻は飲んでいる

高知県 北川竹萌

福の神怒った顔はまだ見ない

銀行のタオルばかりが干してある

右左五億の金に病む政治

春の種買うて八十路へ年を越す

免許更新八十誕生の前の日に

大阪市 河井庸佑

良いときは今日の占い信じ込む

我ながら強引過ぎて勇み足

捨てられたわたしを拾う神もある

これ以上押しても駄目と引いてみる

肩書きが鼻にかかって嫌な人

大阪市 本間満津子

小屋の外なら飛べるかと鶏の夢

大丈夫淋しかったらそう言うよ

一筋の毛糸で夢を編んで居る

こんな夜飲めたら友を誘うのに

ソマリアを思えば切れぬパンの耳

大阪市 神夏磯典子

まだ白い真があつて負けられぬ

化粧品の広告皺がとれそうだ

お天氣に触れて本筋言いそびれ

地平線迫る煩惱ふつきれぬ

呆け封じ机にいつも本を置く

大阪市 藤田頂留子

する事もないのにゆとりだと見られ

買い上手になろ二ん月の値下げピラ

正札に引き立てられて居る特価

戦争はないけど増える内輪もめ

寝て起きて早や締切の二日前

大阪市 北勝美

倅せの限界知つてる老夫婦

老いの足ままだにならない神詣

皆出席出来て褒めらる弱い足

癸酉元旦朝日へ拝む深呼吸

年金に感謝 無理を言えないお正月

大阪市 井上白峰

対岸の火事と見ていた肩叩き

一寸の虫に妥協を迫られる

巻き戻し出来ぬ手足にある焦り

ダイエット去年の服に的しぼる

脇役に徹して誇れ紅生姜

大阪市 北山悟郎

底抜けの笑い笑いのお正月

初日の出金波銀波の寄せる海

火の玉に燃えた魂今も抱き

アデランス余生忘れた若返り

太陽に励まされ義肢血が通う

大阪市 坂本仙吉郎

玄海の孤島に壱岐の一の宮(北九州の旅)

壱岐の島芭蕉の句碑や曾良の墓

白秋生家造り酒屋のたたずまい

筑後平野 高良の山に一の宮

秋深し湖東三山旅の人

大阪市 榊本路児

河豚の身が透けてる嘘もすけている

善男善女とてもじゃないが付合えぬ

氣いつけや熟年離婚はやってる

雨の旅女の箸を割ってやる

グラタンの熱さ女を思い出す

大阪市 稲本凡子

洋簞笥満杯捨てる服が無い

翔びたくて足をリハビリしています

一日の無理一ヶ月を無駄にする

体調を心得ている万歩計

温い輪に忍の一字が埋めてある

大阪府 榎山隆

予定より二倍歩いた紅葉狩り

ライバルもやがては慕うお人柄

ケーキ入刀冬彦の指ふるえてる

止まり木で哲学語るものでなし

立て板に水を流した無駄話

羽曳野市 田中透太

抜け道を知っているから判を押す

母の手を通ると風もあたたかい

二人三脚余生の歩幅整える

年金の暮らしに馴れた初春の酒

むつかしい話はしないお正月

羽曳野市 吉川寿美

千円の軽さ身に染む不況風

妻の眼尻の皺とハッピーバースデー

背伸びとは気付いていない土踏まず

妥協ぐせついて小さく老いた父

一人芝居に疲れた影と春を待つ

大きくて寡黙の愛を男傘

西宮市 西口 いわゑ

鏡にはうつしたくない今日の顔
柿にまで種の無いのをのぞみ出し
ノッポビル土の匂いを知ってるか
しあわせな帽子お妃さまに被られる

西宮市 秋元 てる

そそくさと思ある家を暇する
話す事溜り溜ってバスに乗る
賞め殺し広辞苑には無い言葉
筋金を入れ損なつた子もはたち
咎めだてばかりの母に子は優し

茨木市 堀 良江

信じてもやつぱり娘出せぬ旅
今会つた人の名前が浮かばない
まわりからその気にさせた二人です
臭いのも味とぶつてゐる無理して
ちよつと聞いてがコーヒー冷めるほど

茨木市 井上 森生

湯につかる仕事なかまの浜の夜
いかめざし梅にみかんの旅南紀
百万弗ネオン水上レストラン（香港の旅）
ゆつたりと飲茶タイムのお国柄
聖誕のネオンの海でグルメ船

尼崎市 奥山 美智子
冬景色メガネの曇り拭いてくれ
錠剤のきれいな彩に騙される

したたかに生きたと思う亡父の靴
汚れないまたたき星に憧れる
くだらない話はよそう傘たたむ

尼崎市 田中 薫

さんざめく灯影小春の寝れよう
蜷川小春を縛る女文字
門行燈恋の闇路に暗からず
かなしいとうれしい涙おなじ色
舞台では一人で歩く文化財

静岡県 藺田 猿沓

五十年線路と生きた人も老い
蒸しタオル蒸されて男出来上る
妻の味うまいとひと口ほめてやる
工事場の規制の旗に道を聞く
丸金の腹掛け残し子は巣立ち

静岡市 安本 晃授

生真面目な亭主にもある土踏まず
二杯目はなんでも話すコップ酒
押して引く粗忽男の生きる道
老いて父自由自在の舟を漕ぐ
後編を飾るシナリオ派手に描く

富山市 舟渡杏花

倉敷市 田辺灸六

その時々噂にのぼる倅せか
緞帳が上がるわたしはエキストラ
二足目のわらじの紐が解けてくる
パーフェクト足の裏まで燃えつきる
人さまのミンクを撫でて充ち足りる

宇部市 平田実男

妻よりも嫁へ素直に出る返事
反対は僕だけ脳が白くなる
万歩計へ叱られてゐる無料パス
秘書の手を借りて拭わすつまみ食い
土地までも四角四面にさせる杭

広島県 藤解静風

心変りを風は気付いたかも知れぬ
ふくよかな胸に見惚れるすれ違い
憎まれて生き惜しまれて逝く仏
ころろし捨てると二重顎になる
好きだから歩幅合わせてみたくなる

広島県 田村新造

兵隊で馴染み黒河の町うれし(興安鎮述じ記)
アムールの氷動いて春近し
ピラで知る毛沢東の顔写真
イーアルサン パロの訓練見る黒河
攻めて来たゲリラに元の日本兵

振り返るばかりで前に進めない
残されて想い出ばかり夢枕
泥舟に行方を決める舵がない
欲捨てて作務衣に包む禅の道
花子太郎昔ばなしが好きな仲

神戸市 山口美穂

残菊の紅 健気にも霜の朝
要ることが多くてボーナス落ち着かず
土に帰るを喜ぶように落葉舞う
まだら惚けつまらんことだけしつかりと
結論は急がないのに落ち着かぬ

呉市 榎田英詩

鰯雲明日は京都の梅を見に
昼の月ムードがないと言われても
思うまい恩ある老母を足枷と
ウインクの上手な鬼の鴨になり
羽根布団干して余裕をお見せする

和泉市 西岡洛醉

お隣の噂夕餉の湯気に出る
ころろと笑って孫もお年頃
サングラス女ひとりに成り切って
もう一枚着込んで歳を一つ取り
働ける背筋伸ばした倅よ

吹田市 山本 希久子

減びゆくものの旋律枯葉舞う

一つしか言えぬが十のころ持つ

満足な答え出ぬまま五十路坂

魂の底で絆が手を結ぶ

キッチンの一隅母の守備範囲

豊中市 三宅 つえ子

父の瞳も空も寂しい冬の色

ひたむきに目ぐすりを挿す父哀れ

父の老いを追いつめていく冬の音

東大寺古都を呼び込む鐘の音

好きという言葉とあゆむ春の道

阪南市 坂口 公子

二の足を踏んで逃がした青い鳥

空くじを狙うわけではない予約

はりはりとし干しの効いた夜具の俤

夜具だけで寝ているような老夫の嵩

満員車ポケットラジオが笑わせる

松山市 谷 真風

越中を病室に干し雨寒し

お神輿の掛け声違ふ西東

お城山 紅一点のはぜ紅葉

おばあさんの腰巾着が役にたち

シルバーファッションまあまあとどうもお元気で

箕面市 椎江 清芳

うどん屋の湯気には嘘はないだろう

晩酌がうまくまだまだ書けぬ遺書

敵の子がうちの娘に目をつける

やつと父越えたは靴のサイズだけ

ネックレス母の秘密が心地よい

東大阪市 崎山 美子

妻と娘の内緒話が気にかかる

内緒事 連帯感が強くなる

落ちていく財布へ心の善と悪

ああしんど口癖となる五十路

しんどい事してますストレスたまります

奈良県 長谷川 春蘭

穂芒の身軽さに似て独り居は

思索ふと空白となり冬の天

花八ツ手無為のひと日の冬日向

残り菊 墓は朱の文字墨の文字

唄声も酔歩も乱れる年の暮れ

和泉市 岡井 やすお

満足の審議要らぬと多数決

闇金に何時もどこかで絡む秘書

閉門しか打つ手ないかと仏泣く

富士登頂東横綱白寿翁

もう幾つ起きねば来ぬかお正月

町田市 竹内紫鏑

吹田市 茂見よ志子

結晶模型 華麗 教授も代替わり

見学会冷めぬスリッパ嫌う人

喪の葉書その方なら戦時逢い

万歩から千歩に下がる十二月

仏壇の声 胃カメラはどうだった

堺市 一瀬福一

こめかみの君の短気を治さねば

北風は人を斜めに歩かせる

ふる里に原籍残しカブラ汁

夜にまぎれ月の雫が城に落ち

レディーファースト女は先に嘘をつく

倉吉市 野中御前

再職の弁当の味うすくなり

読めないが恐い病気がいるカルテ

伝説に餅を食べない村がある

廃校の泡立草がよく繁る

一円が足らずとハガキ舞い戻り

吹田市 栗谷春子

心にはかわりもなく一つ年を越す

とりとめのないようでいて奥がある

宿命と思えば軽くなるいたみ

耳鳴りにまじって暮れの音がする

教護連盟 今に思えばたのもしき

肝腎な話になって時間切れ
夜目遠目もう効きません腰の線
肩幅の広さ父似で物言わず
きれいごとと並べ垣間に欲が見え

吹田市 井上照子

感謝状身の程知って筒のまま

追い越され前進あるのみ燃えている

ボランティア退いて腑甲斐の無い自分

老いという言葉に十五の春を恋う

吹田市 瀬戸まさよ

とても好き孤高の如き冬木立

障子張り亡母の教えを守るコツ

タクシーは不景気ですと突っ走る

したり顔したい人にはさせておく

伊丹市 山崎君子

衣替え子の成長に泣き笑い

お年玉娘に貰う年齢になり

遠からず娘の恋も曲り角

もみじ見て箸を動かす幸せよ

米子市 白根ふみ

相棒に若しかのことを知らしとく

因幡路に足手まといにならぬ傘

あたたかいものを新聞紙に包む

木枯しにまだ織り足らぬ雛の襟

米子市 茂理高代

手を洗う運命線を変えるため
いい夢が見たくて枕陽に当てる
棘一つ抜いて大人になりました
今ならば悲しい話はなせませす

加賀市 細呂本 魯木

つぶやきの語録が出来る不況風
たかが塩されど塩です嫁姑
片想い心の友と独り決め
お子さまはと聞かれノイローゼ不妊症

富士宮市 渥美 弧秀

詩に曲に揺れにゆれてるヤジロベエ
子等巢立ち無口に慣れた老い二人
竹垣の山茶花炎えて人を待つ
組の妻のハミング春を呼ぶ

大阪市 板東 倫子

嫁くもよし嫁かぬのもよし親心
証言も言語明瞭 意味不明
情報の日埒で自分を見失う
三高で困っています娘です

唐津市 山口 高明

銭の要る政治それでも世襲する
人間の姑息を噛い山峽燃える
我家にも銭食い虫が二匹居る
はかりごとおんなばかりの午前二時

七尾市 松高 秀峰

伸び伸びと育つ子供へ夢を抱く
透析をしている時の眠る真似
元旦の新聞を読む透析中
安売りの列へ大きなサングラス

堺市 柿花 紀美女

妻といふ安らぎ暮れの置こたつ
空も街もみんな光って嫁ぐ孫
割勘で女友達よく喋り
気にかかる電話口の母の咳

岸和田市 三輪 通彦

円満とばかり限らぬ夫婦箸
善い人に思われ羽目をはずせない
期待して期待できない子の育ち
両親が逝って実家も遠くなる

箕面市 岩津 ようじ

禁煙と貼るその時はそのつもり
日本語 食べれる見れる来れますか
怨憎会苦 上役の部屋ノックする
民主主義 司法の沙汰も人次第

守口市 結城 君子

黒を白に変えるマジック見ています
やせている方が大きい字を書いた
はやばやと丹波黒豆子約する
秘書にせずよかった一人息子です

貝塚市 行 天 千 代

億の金偉いお人のお小遣い
内輪揉め国の前途が案じられ
補聴器でスカタン聞いて笑われる
外孫に野球ピッチャー一人居る

和歌山市 宮 口 克 子

テトラポット存在感のあった亡父
そうですね たかがされどの見解で
聖女にも魔女にも化粧次第だな
しなやかな指に魔性が潜んでる

守口市 森 川 まさお

踏切に葬儀の家の矢印が
無縁塚重なり合ってもみじ散る
多くても少なくともよい実千両
寛から流れて元気な水になる

大阪市 神 保 拓 生

妻や子に言えぬ端役でつらいこと
老いてなお元氣は妻の塩加減
電話から指図されてる妻の留守
新婚の出窓にはのか梅匂う

出雲市 伊 藤 寿 美

無人市で買う一山の茄子の艶
じゃじゃ馬を軌道修正して夫随
わたし似だそうな初孫の二重アゴ
蛇口ポタリポタリ漏れている不仲

出雲市 石 倉 美 佐 子

黒白がはつきりしない出雲の女
版画とか憎い一首が添えてある
霜の降る予感がしてる藪柑子
鳥兜の根っ子男は干している

出雲市 小 白 金 房 子

千歳飴無心な頃のいい笑顔
娘に送る老いのしあわせ種を蒔く
米俵積んだ与作のうまい酒
嫁仕度支えた祖母のさた話

出雲市 小 玉 満 江

幸福の鐘とや一打手を合わす
嫉妬心ポインセチアが赤く燃え
母子家庭 人の情けを知っている
木守柿冬がそろそろやって来る

出雲市 竹 治 ちかし

ああ夫婦短い言葉でこと足りる
失ってから知る親の持つ力
今汗をかかねば明日の僕がない
鯨釣る話信じてやるも親

出雲市 島 祥 庵

まかぬ種生えて噂の風に乗り
流行の波に女は乗せられる
ロボットが稲刈っている眩暈
この人が帰ると空気が軽くなり

出雲市 富田 蘭水

毛筆の温さに独り酔っている
はけまいぞ言つたその日に罪一つ
締切りが鬼とも蛇とも眠らせぬ
風化する頃に真実つみなこと

大阪市 町田 達子

十二月の諭吉ちよくちよく首を振る
三猿は無理でも二猿は守れそう
ファンタスティック湯布院包む朝の霧（九州の旅）
山茶花の道小走りに計の報せ（故富岡温子さん）

富田林市 片岡 智恵子

八起き目の決意へ彩を足す夕陽
管制塔近畿の空を監視する
瞑想する桜いち輪くるい咲く
板ばさみ冷えた空氣の真ん中に

羽咋市 三宅 亨

スキヤンダル今度は風化させまいぞ
賀状書き浪士討入り日とするか
手を伸ばす望みは一つくらいにする
自己研磨他人のことにしないこと

八尾市 古川 覚然坊

麓から見れば登りのキツイ山
街はすれ昔の色でない流れ
寡婦通す強氣世間と折合わず
独り旅予定狂わす連れが出来

伊丹市 梅田 宣司

妻と言う日本一の杖を持ち
うちの娘に限ってまさかそのまさか
なるようにならぬくやしさを踏む
もう一度古塔は影を振り向かせ

大阪市 中西 兼治郎

大仏のあぐらが仁王うらやまし
いつの日か仏姿になる運命
妻入院暮しのリズムみな狂い
入歯まで忘れて帰る祖父の旅

川西市 松本 ただし

唯我独尊自分に甘い足の幅
世渡りの百面相も色が褪せ
くやくて勝つたと日記に書いておく
止まらない時計に尻を叩かれる

寝屋川市 平松 かすみ

カレンダー先の先まで趣味多彩
占いを信じたい日のお賽銭
ふる里を思い出させる信貴
通帳は引き算ばかり年金者

藤井寺市 福元 みのる

先ず好きにならねば上達むつかしい
政治家に五年日記を義務づける
帳尻の合わせ上手が秘書の役
平均寿命健康目あてにはならぬ

河内長野市 植村喜代

明日何着よう娘の一日が終り
年金にボーナス預金の電話来る
悪いことしても真顔をして歩き
一人では寂しいだろう母もまた

豊中市 辻川慶子

テキストにのらない母のかくし味
ほろ酔いに魔女の呪文が効いてくる
ルール違反素手で帰れぬ午前さま
燃えるだけ燃えて白磁の白牙える

寝屋川市 堀江光子

飽食の世の米にまで好き嫌い
柳散って昔の残る好きな河岸
好き嫌い言うてはおれぬ義理の席
在るうちは口うるさいと思うたが

米子市 中井ゆき

手のひらに母にもらった知恵が有る
編棒とゆっくりすごす午後がある
いつまでも家にかえれぬ忘れ傘
葉包紙つるに折るからとんで行け

鳥取県 幸家單車

リハビリに紙人形を老妻が折る
腹巻の札束カイロより温い
だれよりも父の人格信じよう
真相に迫ると記憶ばけて来る

河内長野市 井上喜醉

千軍万馬 法に縛られ見苦しい
ご免やで一晩寝たら気が変わり
キャンセルを待つて帰省の夢を見る
へそくりに決心つけて試着室

福岡県 横地正好

お若いの世辞耳にあり義歯磨く
米一粒作れぬ人が都市で群れ
泳がせる壁画へふぐ提灯も売り
小日本時差を新幹線で知り

鳥取市 西村黙光

熱燭で落ちるだろうか眼の鱗
口下手ととても思えぬ縄ノレン
頬被りここが男の見せどころ
一面の記事に血圧乱高下

鳥取県 西川和子

六十年生きた重みがしわにある
満月の鼓の音はよくはずみ
二階からちよつと気になる音がする
ゆとりにはいかにその日暮しです

鳥取県 石谷美恵子

燃えている夢中へ句読点がない
握手する厚い手の皮信じよう
自由にはならぬお金の番をする
土の香へ遠くカイワレ菜のなげき

鳥取県 前田 一枝

鳥取県 乾 喜与志

渋い柿一皮むいて甘くする
アラレ散るボストに喪中はがきあり
口ほどに手足はついて来てくれず
峠茶屋伝説秘めてバスで越す

鳥取県 上田 俊路

鳥取県 谷口 次男

公僕といつても堂々天下り
エリートに五十の肩を叩かれる
付けた名と大分違つた目鼻立ち
入院の切札がある時の人

鳥取県 岩原 喬水

宝塚市 吉田 笑女

アデランスつけて他人の顔になり
万札が暮れの財布をさらばする
死なれては困る妻だが強過ぎる
ストレスを消す酒なのに苦過ぎる

鳥取県 太田 幸枝

西宮市 瀬尾 六郎太

門構えだけで人柄はかれない
迫り来る師走が老いの足すくう
やりとげた汗を木綿のシャツが吸う
繁った木 枝打ちをして視野広げ

鳥取県 美田 旋風

弘前市 須郷 井蛙

持ち味を出せば冷たい風に逢う
生真面目が嫌われいつも蚊張の外
鏡から笑顔が消える日が怖い
遅咲きの鉢を守って冬を越す

意の如く箸の動かぬ齢になり
霧霽れて余生のままに生き延びる
針箱のそばに箱枕の絆
メザシ丸ごと肋になった達者なり
腹いっぱい飯食う国も不満噴く
肝心なことは聞かない長電話
ボーナズ期 白洲のような公務員
ふるさとの川には同じ魚棲む
目が冴えてしまった夜更けの救急車
かけ足で今年も迫る年の暮れ
老いたなとしみじみのぞく朝鏡
好きだった唄も忘れて病氣勝ち
初氷初冠雪と初便り
独楽回し叱咤激励分身か
ミリバール ヘクトパスカル変わるそな
須磨の浦源平ゆかり文学碑
充電はバッチリ次の次の旅
飲み代お土産代持ち旅に出る
句を作る予定もあつた旅カバン
財もなし父に大きな足がある

母さんの苦勞口などでは言えぬ
口車 後には泥の舟に乗る
香川県 工藤吟笑

いろいろの行事終つて春の彩
鉢巻と相性のよい顔でいる

十二月八日戦地を偲ぶ流転の詩
鳥根県 加本義良

冗談をまともに受けたハブニング
冬の蠅悟った顔で叩けない
散る紅葉神經痛が腰に来る

鳥取県 大角正道

元旦のページに野心書き込んだ
少し幸せサイダーを飲んで
子育てに真正面から勝負する
ゆったりと親のリズムになつてゆく

鳥取県 大角幸代

大切な人の名前をてのひらに
見詰め合う確かな今があるばかり
生命ある音がわたしを母にする
ひと日ひと日を気ままな風と生きている

倉吉市 最上和枝

スカーフにこだわつて見る嬉しい日
手提袋にこだわるものが一つある
滑らせた一言役を負わされる
悪玉を握つた右手持ち歩く

恥を知れ政治の裏に金 ヤクザ
諫早市 原田メイシユン

釣った魚だんだん型の太くなり
極楽へ予約できない浄土旅

大阪府 岡田ふみ

男親に育つて花の名を知らず
髪黒く染めて自分を見失い
コーヒーに安定剤が負けている

鳥取県 石尾かつ乃

彼を待つ鼓動を見抜く姫かがみ
もう夢は破れて猫とたわむれる
幸せそうな顔して故郷の駅に佇つ

藤井寺市 中島志洋

返事ばかり良くて娘の重い腰
年の功忘れ上手が板に付き
欠席の訳は着て行く服が無い

池田市 岡本吉太郎

昔なら心別でも共白髪
故郷も隣は何をする人ぞ
気くばりを枕にぶつけて不眠症

和歌山県 岩崎瑞穂

欲のない顔で買つてる宝くじ
平坦な道でつまずく老い始め
あっさりと引受けられて拍子抜け

箕面市 中嶋 田実子

過信して椅子を蹴ったが立ち眩み

ドレスアップしてみじめな待ちぼうけ

風の街広い背中へついて行く

和歌山県 西口 忠雄

背を向けるあなたの心知ってます

すれすれの家計簿閉じて鐘をきく

炎の慕情季節の便りしてかしこ

豊中市 滝北 博史

新聞とのりとハサミで日を送る

碎めが留守番電話つけている

如月の夕陽にむかう受験生

出雲市 板垣 夢酔

跳ねていた魚が皿で出たうまさ

盲導犬の命と共に生き

口下手も酔えば悲しい唄が出る

茨木市 藤井 正雄

誘惑に挑戦する気派手な服

清物と梅ぼし取りに里帰り

鞆から海の匂のする土産

島根県 槻谷 一葉

念には念入れよ出かける鍵が言う

掘ごたつ亡母の温みを思い出す

退院の夫は大事に千羽鶴

倉吉市 野口 節子

嫁がせて白い時間の中に居る

職引いて空虚な僕が置いてある

球根の中の旅情が膨れ出す

倉吉市 米田 幸子

振られたが妻には振ったと言うておく

包めない刺が懐からのぞく

両親とセツトで君を引き受ける

大和郡山市 坊農 柳弘

不況払い鯛の頭と柁と

父と子の願いは違う酉の絵馬

必勝の文字書初めに二浪生

和歌山市 北山 好笑

娘の線路くるわせてまで親の見栄

安っぽいジョークで責める冷たい眼

草取りの指が気になる茶の点前

大阪市 渡部 さと美

約束を守ってくれました夕日

苦笑してここにもあった無駄を知る

ラウス昆布食べては思う北の島

大阪市 松尾 柳右子

つなぎたい手の子等個々に独立し

年賀状書き終えとどく喪のハガキ

カシミヤに自己満足の旅支度

奈良市 米田恭昌

盛り場のこんな所に地藏さん

相槌の誰にも上手い風見鶏

矢張り息子亡父の哀しい轍を踏む

大阪市 清水利武

鳩の恋矢張り雄が雌を追う

年寄りの齒を笑つてゐる歳の豆

アベ地下に浮浪者が寝る不況風

鳥取県 さえきやえ

わたしの涙わかつてくれる冬の海

一月がおとぎの国のようにすぎ

カリンの実おいしいだいて咳ぐすり

鳥取県 佐々木芳正

快く山から降りる土踏ます

対岸になじみの顔が待つ渡し

忘年会以来眼鏡が出て来ない

鳥取県 鈴木公弘

三日ほど天下がほしい風邪をひく

玉子酒いっしょに妻も飲んで寝る

来年の鬼にてのひら未だ見せぬ

島根県 石飛水煙

ユーモアも笑いも忘れ永田町

緑消す噂 村を二分する

冬になる前ぶれ白鳥二羽三羽

豊中市 井上直次

空しきは長い借金済んだ夜

借り貸しも賞罰もなく古希迎へ

盛り場を人にもまれる孤独感

唐津市 浜本義美

親探しまだまだ続く重い過去

鯨見ぬ島へ見張所未だ残り

ふるさとの炉端 対話の火が温い

唐津市 浜本ちよ

今年こそ私の年だ羽搏こう

長談義集金上手の陽やけ顔

作句への情熱だけは続けたい

(前月分) 八尾市 内海幸生

それから半句も詠めぬよ山頭火

居直って前に進める半歩だけ

豪遊の旅のつもりの里心

富士見れば富士 海見れば海がよい

他人様の喧嘩へしたり顔並ぶ

京都市 松川芳子

土壇場のゆとり化粧を忘れない

人間の弱さを思う不眠症

幸せの回覧板を待ち侘びる

高層団地団らんがあるローンの灯

気疲れは母の無口と補聴器と

自選集

野田素身郎

どこか似た人が舞つてゐる絵画展
手に余るほどの土産と妻帰る
持病再発閑職に就いてから
化石燃料いずれは尽きる時がくる
診察券入れに変わった名刺入れ

小出智子

うかつにも齢を忘れてばかりいる
よく我慢してくれてゐるわたしの椅子
掃除機のようになんでも食べている
パン買って毎朝通る女の子
車磨く横で自転車拭いてゐる

遠山可住

人間ドック百も承知で飲んでます
千両箱はないが素敵な父の船
七五三わが家もいつかこんな孫
矢面の笑顔を消せば負けになる
竹とんぼ子らと飛びたい青い空

黒川紫香

立小便して三人が別れたり
笑つてゐる亡妻の写真と添寝する
二ヶ月の風に酔いざめして帰る
知名度があつて肩書ない名刺
一番機飛ぶ頃朝の顔洗う

大矢十郎

視聴者向け国会でした佐川便
四島という人蔘を追ひ疲れ
ベレー帽あれば確かに日本軍
曹長と聞き陽溜りの席ゆずる
均等法ニツカズボンなど如何

松川杜的

風邪三日少うし賢うなりました
風邪三日人生観ちと変り
国会も演歌も聞いて風邪三日
マドンナもりえも関係ない余生
入選のリングゴ殊更味がよい

コーヒーを淹れる香りは詰所から
カリン糖かりつと自信めいたもの
なつかしき見舞い明石の焼あなご
イタイイタイで一日昏るる
烏かあーお前は無責任野党

谷垣史好

野村太茂津

肉声の筈が返るとき燃える
氣に染まぬ仮面外せぬ霧の中
暗転の舞台に点す冬螢
塔を支えて突っかい棒が疲れだす
身を責めてすつくと立てば眩暈する

恒松町紅

小林由多香

故里は世変りうすくなる絆
老い三人寄ると年金孫のこと
人間不信が今年もつづく白南天
几帳面な筆で墨色濃ゆすぎる
わだかまり解けないままに冬の天

正本水客

金井文秋

十二月八日ぬくい雨が降る
敗戦記念日バブルの中に沈みかけ
市場の騒音の中に静かな街の医者
親切なお医者と思う言葉尻
十年来かわらない看護婦さん

波多野五楽庵

月原宵明

端正な鼻梁で耐えることに馴れ
風花や幸子と読める石仏
さらわれたカラスが一羽すねている
親切な笑顔に油断めされるな
まだ生きていたかと書いてくる葉書

還暦 古希 傘寿と若さ遠ざかる
人間も修理のきかぬ日が来そう
心の中の敵がなかなか手強くて
長生きの秘訣ノルマを追わぬこと
冷えることあまり気にせず柿を食う
終電車働き過ぎはみな眠る
いつからか父を異性として眺め
よろこんでよいのか愚息に見おろされ
神さまにお願い十円玉探す
言い負けてからはコップで勝負する

八木千代

久家代仕男

あけがたの枕は残菊の匂い
満潮の枕に椿など植えて

野分のあとにばつんと残る母の枕
風の鳴る枕に冬の首ひとつ
寝返ると水の匂いのする枕

岩本雀踊子

藤村 女

迷い子の親を捜しているマイク
日本が金持ちという飢えがある
長い橋渡った夫婦の箸枕
いつからか妻の鎖につながられる
戦前の地道が恋しい足の裏

藤井明朗

有働芳仙

西年へブランわたしを閑にせず
年一年わが世の春は遠くなる
寒さが重圧となり電話多くなる
カレンダー豊かにくらし合図する
株価低迷冷える景気に遠い春

辻白溪子

児島与呂志

一生を棒にふるほど腹が立ち
ネクタイをゆるめ汗かきよく動く
お土産の思案がつづく懐手
神様に背いて罰が当たらない
薄暗い灯り落ちつくコップ酒

絵馬吊るしおんな同士のおしるこ屋
母さんが笑うと空気を透けてくる
妻にいつも叱られているろくでなし
物臭で貧乏神と仲がよい
地獄までつき合いますと杉菜の根

三回忌 倅はころび灯明が揺れる
泣き顔をうつせば鏡冷たすぎ
墓を去る時もう一度娘と語る
物忘れ指の先から老いてゆく
花一輪ただそれだけの春の部屋

故郷はいいな一番鶏が鳴く
万全の手を打ち明日の靴磨く
家中の返事が軽い芽出度い日
何回も眼鏡を拭いている再会
雪しんしん地のぬくもりや藪柑子

すき焼の残りで朝から他人井
きつちりと三度がうまい腹八分
雑草は耐えるに慣れて春を待ち
ワープロの句の味わいにも慣れさせれ
初午の太鼓が田舎だと思ひ

申告のあと味にがくあたたかく
体験を吐き出し合うて談はずむ
漢文調の案内状におそれ入り
目で叱り心で褒める亡父だった
パパの方がはしゃいでいる動物園

本田恵二朗

工藤甲吉

雪よりも冷たい人が無くは無い
血管が見えなくなつて冬厳し
永らえて日日を何することも無し
栄転も左遷もとうに人の事
久々に人中へ出る髯を剃る

水粉千翁

ちらほらの便りでそうかそうか梅
寒風に梅の本音としてかおり
ほころびたとは歌に練る梅の花
梅咲いて一輪ざしのうわさする
そちらでも咲いた便りの梅をほめ

高杉鬼遊

如月の風にたじろぐなまけ癖
禁煙の哀しき文字と向いけり
喫いすぎぬように煙草屋笑うなり
無頼とてこころ残せし訣れあり
湯豆腐のゆれを見ているわが余命

ホツとした浅瀬に足をすくわれる
新春の夫婦もつれたパズル解く
ハッスルが過ぎたと思うサロンプラス
苦手だと取組む前から負けている
他所の飯食べて耐え抜くことを知り

西田柳宏子

河内天笑

元旦の歯をしつかりと磨きます
人間と言う害虫がいる地球
風を得て鶴ヒマラヤを越えていく
ニワトリの声を長らく聞いてない
ニッポニアニッポンはもう子を生まぬ

西大寺会陽川柳大会

とき 2月28日(日)
兼題11時・席題11時半締切
ところ 岡山市・西大寺市民会館
兼題と選者(各題2句)

「鐘(鉦)」	長谷川紫光選
「焼く」	林荒介選
「椿事」	松岡十四彦選
「ヒント」	情野千里選
「ひたひた」	長町一咲選
「主婦」	前田ひろえ選
「河口」	山口流木選

特別課題 1題・当日発表

会費 出席2000円 投句 500円
投句 2月25日までに岡山市金岡東
町3-4-16 山口流木

川柳太平記 (117)

川柳の群像

戸田古方

東野 大八

「私(古方)が川柳を始めたのは昭和13年、学校の先生になったのが昭和17年、生れてはじめて教壇に立ってみて、これはえらいことになったな、と思いました。こっちのいうことが生徒たちに通じないのです。そこで知恵をしぼったのが川柳で、内容を要約し、見つけた要点をまとめてみたらということでした。ちょうど歴史でフランス革命の話をしていました。

音もなくギロチンもとへ戻したり 古方

(『私の川柳』昭和55年6月刊)

「路郎門下として古方さんは昭和14年来、松坂クラブからの同期生であり、先輩に恒明・耕二・貴山・翠光・香林・文蝶などがいて賑やかでたのしい勉強の道場であった。

当時古方さんは孤蓬と号しておられたが、

京大の経済学部で経済史を専攻されたその学識は広く深く、それに大阪は船場のどまん中で大家の一人息子として育ち、いつも微笑をたたえた温顔は、接する人を魅了せずにはおかなかった。うべなるかな路郎先生も殊のほか愛護せられ、所謂まな弟子中のまな弟子であつた。われわれ門下生が、路郎先生におねだりをしたり、または叱られそう難しい事件の時は、常に古方さんを第一線に押し出し、衝に当って貰うのが常だった」(中島生々庵 悼文)

明治三十八年一月五日大阪市生れ。本名猶治郎。京都帝大経済学部を昭和6年卒業して生家の洋反物問屋を継いだ。父和七郎の死去にともない廃業。私立大谷高女と大谷女子専門学校(のち大谷女子短大)の教諭となり、

昭和45年に退職。好きな川柳を麻生路郎門下として活躍。路郎主宰の川柳誌『川柳雑誌』誌上に、戦後、同誌復刊と同時に寄稿。昭和30年前後に掲載の「絵と川柳で表現する歴史」を長期連載、生来好きな絵画と文筆で堪能するまで書きぬいた。こうしたことから詠史川柳も手がけ、同誌の「川柳第二教室」を担当、この中で「一語一会」という味のある川柳観が印象に残った。

生来自分は全く商人向きではない、商都大阪の船場商人のど根性など、聞いただけでもゾツとする——といった川雑誌上の身辺雑記々事に、永年同誌の常連寄稿家だった筆者も思わず微笑を誘われたものである。

「戦争中の食糧事情が最悪の頃おい、父の友人に、食用油が大量に入手したので、十罐ぐらいなら頒けてあげられるからといわれた。食糧難の当時としては、ノドから手が出る貴重な宝もの。そのため、家族の強い要請のため、よんどころなくある一日、オート三輪を雇い、その友人宅へ出かけ、問題の油を車に積んで帰途についたまではよいが、どう考えてもこれはヤミ物資であり、ヤミ行為に相違ないと、途中あれこれと思い悩んだ末、こんなことをすれば人道にもとり、神仏への顔向けもできんと纔然と一大決心をして、そ

の車をUターンさせ、積荷をすべて友人に返却したので、その友人を大いに呆れさせました」（父の想い出「長男戸田陽一」）

本名猶治郎の名で記された『われらは信仰家系』（昭和39年6月記）の戸田家の年表と家系によると、戸田家は安政元年（一八五四）以来、本願寺の親鸞さまに帰依し、特に祖父母は敬虔な篤信家で、大谷派本山再建や、大谷学園創立への莫大な寄進は、孫の古方に受けつがれてそのまま親鸞への帰依造詣は深く同派系の大谷高女教諭就任もうなずけよう。

「仏教に顕教と密教があるそうですが、顕教より密教の方が深奥だと申します。古方もそろそろ密教の方へまわらねばと思っております。愛妻の句とあらたまれるとなかなかびたりと合った句がみつかりません。作句がうまくいくのは、ほどほどに喜怒哀楽が感じられる時のことで、よろこびすぎたり、悲しすぎたりしては句になりにくいものです。

門口のキッスは頼べたですまされるにつづく句は中々見つかりません。

一日だけきものたとんでみた夫もまちがひなく私の句です。三十年たった今日も、ひとり子の気ままに手こずっているのが見えるようです。

ねころんだら敷きにくる寝ころんだら敷き

にくる

もやっぱり大きな坊やです。夫婦夫婦婦唱夫隨は適当に行われています。

大正十五年十一月二十一日結婚婚約

一日逢わねば千秋の思いがはじまります。

昭和五年三月十九日結婚。昭和六年長女誕生。昭和十年長男誕生。昭和十九年二男誕生。

昭和三十年長女結婚。翌年長女孫誕生。というわけで、今ではよいオジイちゃん、オバアちゃんです。（注・愛妻の名は静子）

老夫婦埃の音をきく如く

とまではいつてませんが、いずれは平凡に空気を吸っているうちにそうなることでしょう。

孫抱いて足は夕月出た方へ

離れていますので、たまたま係をかこむのもうれしいものです。

結婚式の当日仲人さんから餞された「思いやり」が今も私たちの信条です。

その昔、易者が「相性がよい」と申したそうですが、実は正反對な性格です。ですが、それは色紙にかかれた、句と絵がつかず離れず補い合っているように、

妻の意見入れて手紙をかきおえる

この原稿もそうで、素面ではこれくらい。

（『川柳雑誌』昭34・9号、わが愛妻の記「古方」

昭和40年川柳改め『川柳塔』同人、常任理

事、編集長。同47年自筆の『古方句集』を刊行。

同55年『私の川柳』川柳テキストを刊行。

豊中市螢池で川柳教室を開設し、豊中川柳会、豊中川柳木曜会創設。昭和56年2月1日肺ガンのため死去。法名・釋孤蓬。

「私達に一度も大声をあげたことのない、やさしかった父。趣味人で特に川柳を最も愛した父。父が亡くなって遺品の整理をしていると、いつも身近に置いていた手帳の隅に

ぎの句がありました。

極楽のまま極楽に行けそうで

古方

日付は亡くなる二日前、遠慮勝ちに、非常に恥ずかしそうに書いてあったのが印象的

いかにも父らしいと思いました。（長男・戸田陽一追想文）

「最近テレビで『愛は死にますか、山は死にますか』ではないけれど、私達には『愛は決して死なない』と即答してはばからない人として古方先生は多分生きつづけられると思

っている。『他人を変えようとしてはいけない。そう思ったらその前にまず自分を変えて行かなければなりません。そうしてその人と話しあえる場を作らねばならない』と仰った言葉はいかにも先生らしいと思った」（神谷凡九郎・悼文）

▼次号は「脇田 梅子」

柳籠裏三篇研究 (十六丁)

岡田 同。

273 青貝のせいろう餅屋半荷もち

青木 青貝のせいろう」とは螺鈿をちりばめた蒸籠で、絵島生島事件の饅頭をよそおつて、大奥へ潜入した恋の蒸籠の事を言っているのではなからうか。大奥に持込むまでは偽装のため、餅屋も片棒を担がされたに違いない。

佐藤 なるほど、そのようなことが。

八木 礎稿賛。「半荷もち」は、いわゆる企てに片棒担がされた事、文字通り荷の片棒を担がされた事、両方を言っている。

岩田 でも、どうして菓子屋でなく、餅屋なのか。

鈴木 饅頭と化したとあるから、どちらも同じでしょう。礎稿賛。

岡田 同。「餅屋」は「餅菓子屋」の略と考えてよろしかろう。

274 割床で薬種ひひてる三丁目

青木 本町三丁目の薬店、割床よろしく、屏風を立てたりして、部屋を分け作業をしている。小びやうぶのかげで薬種やがたつかせ

271 五六本もつ鎗持ハ無腰なり

青木 王子権現の槍祭の風景句。無腰は参詣の農工商を指している。槍は奉納するもの。

槍持の参詣もある十三日

三二二〇

槍祭稲も穂先の揃ふ頃

一〇九一五

七久保 「統飛鳥川」に「四月末鎗売、台笠建笠本手のやりやり」とあり、端午の節句の鎗売を詠んでいるのです。

岩田 「五六本」とあるから、鎗売りであろう。七久保説賛。

西原 王子権現は槍を一本乃至二本。よって鎗売。

鎗引提た向ふからしやうぶ

二九二

岡田 同。

272 甲の座ハもふせんこハござをしき

青木 何れの場合にも当てはまるようにも思えますが、「もふせん」と「ござ」を甲乙の順序ではつきり言い切っている所から、花見のように思われます。

佐藤 張見世の女郎であることは間違いない。甲の座は上妓、其座の方は新造であろう。

八木 佐藤説賛。絵を見ればその通りです。

岩田 始め花見と思っていたが、やはり張見世間違いないようである。

鈴木 張見世の句。

割床でがたびしとする木葉や 一三一 5

割床で仕事して居る木葉や 二二 20

佐藤 賛。なお三丁目の薬種屋は、一軒の家を半分に仕切つて、二見世で商売しているものが多かった。これといい、屏風といい、割床よろしくの態と江戸っ子は見立てたのであろう。

275 嬬にげた其夜ハしかも星月夜

青木 星月夜は鎌倉の異称。

星月夜は星の明るい夜、鎌倉松が岡東慶寺へ夫と離婚したため、出奔したという事で両方に掛けたのである。夜と考えるより、未だ夜明けには間があるが、早朝と見た方がより實際らしく思われる。

鬼の留守嫁思ひ立つ星月夜 三四 23

三年目嫁晴れ晴れと星月夜 一四八 9

星月夜あきるほど見て縁を切り 安四智 6

八木 賛。「月夜にかまをぬく」にかけてはいないでしょうか。

岩田 八木説賛。うすのろ亭主「月夜に釜」よろしく「月夜」に逃げられたのだが、それが単なる「月夜」でなく、「しかも」「星月夜」（鎌倉にかかる枕詞）であつたという所が、趣向の手のこんだところであらう。

岡田 同。

276 あら縄でしばられて居ルけちな狎

青木 主題句の狎も普通一般の狎と思われ、「荒縄で縛られ」ている所から察すれば、飼主とて裕福とは思われず、そのためけちな狎と言っているであらう。

岩田 狎は座敷へあけて可愛がり、紐でしばるときでも色のついたような綺麗な紐を使うのだらうが、この狎、雑種の大きな犬のように、荒縄でしばつてある。それを「けちな狎」と表現したもの。

西原 吉原や金持ちの狎と比べての話。

岡田 同。

277 馬鹿なつい立テ立ツと天窓がミへる

青木 立てば衝立から頭が出るのは当り前のはず。それを「馬鹿な」と言っている所を見ると、割床に使われている衝立の事を言っているのではなからうか。

佐藤 賛。西河岸あたりの割床の衝立と思う。場所が場所だけに、隣の奴の頭が見えるというのは、馬鹿げているであらう。

岡田 割床なるべし。

寒中お見舞い

Y F C文化センター 川柳セミナー

西	菅	浅	盛	中	岸	大	坪	人
尾	原	野		田	野	塚	田	見
	静	房	ス	悠	あ	節	紅	翠
栞	子	子	ズ	水	やめ	子	葉	記

秀句鑑賞

同人吟

新家完司

11月号から

助ける気ないのに根掘り葉掘り聞き

青枝鉄治

他人の不幸は鴨の味。聞いただけ聞いて骨までしゃぶって「ごちそうさま」とは、そりゃあんさん食い逃げだ。

空港のロビーで今を見詰め合う

寺沢みど里

空港は劇的な空間である。それぞれが名優で主役、自分以外は端役である。舞台の緊張を支えているのは人間が作った最も美しく最も危険な玩具、巨大なジェット機。
何もう事がないので飲んでる

土橋はるお

「人生とはなんぞや」とか、「生きるとは死ぬとは」とか、はたまた「神とは仏とは」等という大命題に教訓的な味つけをした人生訓的な句が現代の川柳界にあふれている。
暦の横に書かれているような人生訓や標語は「川柳」とは正反對の位置にあり、人生訓と同じ位置から人間を眺めていても心を打つ川柳は生まれな。

「オーイ中村くん!」という歌がはやった頃の新婦さんは、まだ可愛げがあったのだが、「新婦」が「妊婦」になってしまった現代っ子の新婚さんは、冷やかし甲斐もない。
忘れるという簡単なこと出来ぬ夜

小林はつ絵

うどん屋へ駆け込む雨の十二月

吉岡美房

うどんの湯気に顔を突っ込んでいる時ぐらい浮世のことは忘れよう。十二月の雨と、素うどんはよく似合う。

先輩もお歳を召してきた手つき

松本忠三

先輩はいつまでたっても先輩である。手つ

心の傷を癒やす最良の薬は「忘れる」ということであるが、忘れたい事に限ってなかなか忘れることが出来ない。それは「忘れる」という作業が自分の意志では出来ず、時の流れに委ねるしか方法がないからであらう。
ディナーショー用のお相手募集中

肥後和香子

観劇、パチンコ、ショッピング、なんでも一人で行動できる逞しい女性が増えてきたがさすがにディナーショーは一人では無理か。

ほんものの男は「どっちゃでもええ」事には口を出さない。雑魚たちの議論は枝葉末節に拘って果てしが無い。「よきにはからえ」とつぶやきながら飲むだけである。それともこの句、奥方と差し向かいの図であらうか。
棟あげて暫くこない大工さん

江原とみお

いい天気なのに棟梁は来ない。ひと仕事すませて空気を抜いているのか忙しいのか。

恩は恩 好き嫌いとは別のこと

奥田みつ子

忘恩の徒となりつつある私の胸にグサリと突き刺さった。確かに恩は恩なのである。

松茸を買って諍うもとなり

西口 いわゑ

亭主に食べさせたくて無理して買ったのに、亭主もそれぐらひは解っているのだが、ついひとこと言ってしまったのである。仲が良くつつましい夫婦の、すぐに治まる小さな諍ひ。

養虫ぶらりここに老後という姿

金村 青湖

老人と養虫、なるほど色までそっくりだ。地味な格好で縮こまっていたら若者に敬遠される。あの世で金は通用しない。遺産は兄弟不和の元である。バツと使つて不良老年に！

図に乗っていると気がつき口とじ

吉村 一風

普通の人は自分でも気がつかないうちに自慢話をしているものである。ひどい人になると話の半分以上が自慢である。自慢が一割以下という人は立派な人であり、ほとんど自慢話をしない人というのはスゴイ人である。図に乗っていると自覚できる人も数少ない。

密漁の罰金 密漁して払う

山口 高明

この句、密漁者を批判しているのではなく密漁せざるを得ない者の哀しみを詠っていると解釈しなければ味がない。川柳は伝統的に弱者の味であり、それを誇りとしてきた。

押入れがあるからボロがなくならぬ

浜本 義美

なるほどそういう理屈もあるか。整理とは不要なものを除くことである。一年間に一度も使用しなかった物はまず不要品だろう。

思い切つて捨ててしまわないと狭い家がますます狭くなる。シンブル・イズ・ベスト！

愚痴言わぬ人には愚痴をひっこめる

神夏磯 典子

誰でも無意識の内に愚痴をこぼす相手を選んでいる。愚痴をこぼしそゝになつて「アツこの人はじつと我慢して愚痴なんか言わない人だ」と気がついて愚痴をひっこめた、と言うのである。このような人間の心理の微妙な部分を的確に表現できるのは川柳だけである。

杖について地球を救う講義聞く

蘭田 猿香

地球は病んでいる。特効薬は無いし名医もいない。地球を救ふのは寄生している私達ひとりひとりが自覚して行動するしかない。

覗かない方がよかった顕微鏡

吉田 あずき

人間の体は小さな宇宙で何億もの微生物が共生している。微生物や細胞は鑑賞に耐えられるほど美しくはない。顕微鏡が望遠鏡ほど一般に普及していない原因のひとつである。

お見舞に行つて林檎の皮をむく

乾 喜与志

見舞に多弁は不要。だまつて林檎の皮をむくと林檎はいい匂いで病室を満たし病人だ人の心を満たす。静かにやさしい時が流れる。

くつまめをしたのはたしか貧乏神

渡辺 菩句

仙人とおぼしき人の佗び住まい。訪れる人も稀で「くつまめ」の音まで何やら浮世離れしている。読者や他人におもねらず、思つたままを詠う独得の句風は、良寛や一茶を彷彿とさせてくれる。外はしんと雪である。

氣の小さい男は小さい文字を書く

行天 千代

氣の小さい男に対する揶揄が面白い。氣が小さいということは用心深く几帳面でやさしい、という長所にもなるのではあるが。

混浴は老女が多く氣味悪い

井上 喜醉

女性陣から非難の合唱が聞こえるようであるが、男の身勝手な本音をズバリと言つて小氣味良い。マドンナや宮沢リエだったら写真でも拝みたいのだが。もつとも女性だつて「オジンばかりでつまらない」と思っているのだから。秀吟とは言い難いが、率直で正直で元氣の良い表理を評価したい。

水煙抄

黒川紫香選

東京都 山口 新子

静岡市 沢田 きん

出発はおぼろ月夜と決めている
恋三年玄海灘の風の夕

引越しの肩に追いつく風 向い風

立ち退く日庭の小菊のまつ盛り

ストッキングの伸びで見分ける長女次女

西宮市 牧 潤 富喜子

旅半ばわたしを戻す風深し

気に懸る輪の外にいる静かな目

励ましの言葉自分に言っている

花のある庭に小鳥の墓がある

十二月八日か夫ポツリと言っている

名古屋 藤井 高子

冬支度 老いの甲羅はやや厚め

霜柱さくさく冬の詩を踏んで

カタログ一杯積んでかばちの馬車が着く

和やかな風もカメラへ納めよう

うろたえて第一ボタンから狂う

ひた向きに夢を抱いてゆく余生
人生を変える新たな種を蒔く

新しい暦へ夢を書き入れる

近代化追いつく老いの息づかい

息抜きへ友と連れ立つ小さい旅

綾部市 藤田 芳郎

B面の話が好きな群雀

両輪の愚痴心棒が聞いてやる

父の峰越えた風なら討たれよう

菩提寺へ母のその後を聞きに行く

お嫁さんが来て動き出す村の風

砂川市 大橋 政良

ネクタイを結んでくれる妻がいる

許そうと思えば迷い深くなる

乗り越しておでんの旨い店を知り

点数をかせぐ嘘なら軽く出る

古雑巾の姿にいつかなるだろう

西宮市 岡 本 道 子

散り終えてひとり遊びがうまくなる
こんなことぬけぬけ言える年のかさ
今日からは師走と言うに茶がうまい
分別が邪魔をしているワンチャンス
最後まで勝負捨てない年の暮れ

広島市 流 奈 美 子

野よ山よ一期一会の旅の情
巻き戻すネガは緑の視野ばかり
イヤホンを磨いて温い語を拾う
正解がほしくて亡母の森へ行く
雪しんしん民話を抱いて山ねむる

熊本市 宇 野 照 代

お互いに冬が越せたね路の臺
春ですなあなたよ旅に出ませんか
横断歩道駆けて孫から叱られる
番号で呼ぶ受付の無愛想
大鍋の出番帰省の頭数

熊本県 大 川 幸 子

ストレスがたまるとヤケ喰いたくなる
忙しいなかに充実感がある
迷惑を相手遠慮と受けている
宝石を鏤めたよな星月夜
身の上ばなし夜が静かにふけてゆく

富山県 高 島 五 月

トゲのある花はきれいに咲きたがる
乙女の日 思慕を残した無人駅
束縛が嫌い息子も知っている
ご機嫌がななめと知っている蛇口
通夜の席パンチパーマの僧の経

富山市 島 ひ かる

ダム湖から鎮守が見える渴水期
針箱に仕舞い忘れたおとこ文
ひと部屋のドラマ見ている姫だるま
電話でも済むこと文で誤解され
街で逢う父と他人のふりをする

富田林市 池 森 子

冬を深く吸い込んでいる旅枕
てのひらで多情多恨が深くなる
手折られて行く日も近いバラの花
白足袋を脱いでひとりの秋になる
大きめの皿に独りが盛ってある

宝塚市 永 田 暁 風

いつか見たこの風景で別れの刻
老人の切符を奪う改札機
枕木の一つ一つを通過する
土踏まず無駄な背伸びだなど思う
煩惱や鍵束へなお鈴つけて

今治市 越智青園

戸車の軋みも初春の音であく
タライ回しうちも回しておく不況
支持率は年玉にある孫の顔
コメコメと余り過ぎて又困り
しばらくは落葉の道の万歩計

尼崎市 森安夢之助

お隣へ孫が来ている笑い声
台所へ立つ楽しみの日曜日
肩を揉み父の風向き確かめる
山の神に伺ってから返辞する
受けた恩返せぬままに老いてゆく

尼崎市 長浜澄子

古い知らぬ意欲を見せるループタイ
おっとり構え出方を待っている
土鍋ぐつぐつ二浪に熱い檄とばす
男盛りの味な話を聞く炬燵
母の涙見てから軍歌唄わない

兵庫県 円増純子

いざという時は夫婦の気を合わせ
夫婦船ときどき騙し船になる
もつと楽しめたかったと墓洗う
もう誰も騙しはしない柿の種
カルチャーへ手抜き料理をして出かけ

姫路市 丸尾はる子

喪中欠礼届き戸惑う年賀状
反省は猿が代わりにしてくれる
彩りが欲しい六十路の下り坂
味方など無いよと冷たい冬の月

摂津市 木下道子

ホットケーキ愛の形に焼き上がる
引き返す勇氣も備え登山靴
面倒臭い話は嫌い紙コップ
ポケットの奥に秘めてる起爆剤

広島市 森田文

木枯しに小枝がボキリ折れて行く
人も器も作られたもの消えてゆく
寒風よ一秒毎に葉が落ちる
おかげさまなんと謙虚な言葉だろ

芦屋市 黒田能子

ホームドラマいつも御飯を食べている
あんパンが父の土産であった頃
楽しんですますお隣の窓の花
待つ人へ窓は大きく開けておく

柏原市 大峠可動

開運は神にまかせて春の酒
不況尚続き弱者に風のうた
学歴をゆすると流れ弾になる
季節日本寡婦には寡婦の詩があり

久留米市 鶴 久 百万両

川が浅くて恋の台詞をすぐ忘れ

羽根のちぎれた魔女へ聖書を読んでやら

女郎蜘蛛のあまい呪文に縛られる

興信所の尾行へ俺も意地がある

松山市 宮 尾 みのり

脱線をするといきいきする個性

妻の視野の外で男は稚気を持ち

単細胞すぐにやる気の腕まくり

色あせて来た父の旗いとおしむ

大阪市 勢理客 トミ子

招待状とり歳弥生の胡蝶蘭

振袖のしつけを抜くと嫁にゆく

白菜が主役わが家の鍋料理

一人者同士でつつく鍋料理

尼崎市 的 場 十四郎

食へに行くカニの話で座が弾む

苦笑して法話聞いている脛の疵

素晴らしい景色が画布に塗り切れぬ

風雪の枯葉叙歎の声を聞く

尼崎市 野 瀬 昌 子

沢山のカードを持って飢えている

見覚えのない年賀状何時も来る

会えそうな予感伺いなしで行く

小うるさい人が隣でよく喋る

尼崎市 山 本 す み

気疲れを癒すベンチで雲を追う

意地張ってひとりぼっちになる誤算

久しぶりと互いの老いを見詰め合い

うれしい事あつて出かける軽い靴

尼崎市 尾 宮 弘 治

言い勝って不味いコーヒー飲んでいる

よく見れば主役が別に居るドラマ

反対をしつつ手伝う子の荷物

どの皿の馳走も骨がついている

藤井寺市 高 田 美代子

ふるい話がひよつこりと出る掘炬燵

雑草が生えてるベランダの鉢に

正月の人混みに居る迷い猫

くだおれの街でラーメン食べてます

松山市 白 石 春 嶺

こばれ陽が誘う岬のやぶ椿

身に覚えある心配に乗ってやり

寿の荷が着く部屋に陽がこぼれ

年金がやがてパンクをする不安

熊本市 岩 切 康 子

アイロンで折目をのばすりフォーム

野生馬容姿美し自由食

言い訳が長すぎるからそっぽ向く

百円以下切り捨てられぬ消費税

西宮市 亀岡哲子

喋りすぎの舌を労る旅帰り

キリンさんに帽子被せてみたい孫

みかん二つお手玉をして待つこたつ

借金に來たとは見えぬ恵比寿顔

鳥取県 土橋睦子

あしたへと今をのがしてばかりいる

筋書を並べ男は何もせぬ

一日の労をねぎらう差し向い

あの人と親しくなったりリンゴ狩り

西宮市 山本義子

豆腐屋が自転車でくる団地

落椿それなりに庭化粧して

笑い地藏もらい笑いする良いお顔

下手なうそつくの疲れあぐらかく

米子市 足立由美子

和やかな顔になるまで彫って行く

丁度よい棒を支えにして暮らす

枕元に七ツ道具を置いている

いい案を出さずじまいの肘枕

旭川市 朝倉大柏

騙されてやるいい友でいたいから

振り向くと消したい足の跡ばかり

なんとなく文句言いたい妻がいる

あの頃は心張り棒でことが足り

河内長野市 大西文次

東大を受けに行つたと言う度胸

週刊誌火のないとこに煙立て

呆れるまで続く夫婦の鬼ごっこ

人生も色々近道回り道

大阪府 川原章久

春を待つ若い二人はウフフのフ

鬼灯もおじやみも知らぬママばかり

紅葉で雑木の色に自我が出る

粗大ごみ捨てた時計に音がする

今治市 渡辺南奉

ささやかな見栄ワイシャツにしわがない

平均寿命までのシナリオ書いておく

一筆啓上オセン泣かせる無心状

鬼ならばきつと悩みを聞いてくれ

和歌山市 堀畑靖子

子を産んで落ち着きみせてきた娘

留守電に言えば無言で切る電話

後先も見ず走りだす若さあり

一夫多妻そんな夢みるのは男

静岡市 増田扶美

深呼吸して病室の友見舞う

妹と話つきない母の忌に

姉と行く川辺の道は歌となる

待合室同じ痛みの友が増え

出雲市 原 章 峰

氣難しくなっていくのがよくわかる
赤とんぼわたしを抜こうとはしない
ポーナス交渉に釣り仲間の部下がいる
不動尊に歩いてゆける菊日和

岡山県 国 米 きくゑ

何となく寒がりになり夫婦老い
あなたとの間に抜けるすき間風
回り道ばかりでした靴の裏
こたつと蜜柑 茶の間からの笑い声

藤井寺市 田 中 孝 子

紫に香る川辺の黒百合よ
高き杉かこみて遊ぶ鬼ごっこ
冬の音静かに迫る独りの身
冬日さす街をゆっくり市場籠

松江市 松 浦 登 志 子

ハンカチを小粋に結び春を呼ぶ
ひと昔前の背広が出番待つ
お年玉多い方に帰ろかな
会社でも家でも仕事似あう夫

岡山県 大 石 あすなろ

還暦を迎えてからのいい出会い
村中が善男善女になる法話
恋人が素敵な人生くれました
エンジンのかからぬままに十二月

和歌山市 森 茜

おおげさにする程もないはかりごと
気にいらぬ電話をひとつ待っている
なりゆきで相槌うつて解せぬまま
豪邸のガラスの汚れなど気づき

和歌山県 杉 山 精 子

噂にもならない人の温かみ
残り香をまだ慕われている別離
しあわせな音だけ聴いていたい耳
貝の口開くと孤独に見舞われる

兵庫県 森 脇 和 子

只今の声聞くまでの毛糸玉
花のあるわたしの部屋が静かすぎ
誰にでも親切だから少し妬け
旅土産笑いのつづく灯の温さ

酒田市 永 澤 裕 子

夢の馬車いくつになっても追い続け
北国の便りはいつも陽を探し
近寄らぬ過疎に住みつく芸術家
内職の徹夜慰む窓の月

和歌山市 田 中 み ね

福の神お待ちします大晦日
満身に火照りを思慕とふたりきり
出任せの口で新たな波紋呼び
世間の目氣にして翔んでられますか

貝塚市 池田 寿美子

生き延びて十二月八日しあわせに

笠智衆 寡黙の中に美しさ

バラ百本にもまさる艶 玉三郎

それなりに先入観を捨てて行く

姫路市 松本 一郎

漬物を買って信州旅終る

名城に名月かかり去り難し

村おこし水車が回る役場前

バランスをとって人生ヤジロベエ

鳴門市 八木 芳水

惚け防止柳誌をそばに積み上げる

郷愁が子とよみがえるわらべ歌

交際へ凡友だつて車間距離

人生の縮図を描く老いの皺

岐阜市 渡辺 杏村

パトカーがうしろについた急ぐ道

子と共に下宿さがしをしてる母

母さんのヘソクリで買うズック靴

サッカーに水あけられたプロ野球

静岡市 浅子 まつゑ

義理堅い人の財布が風邪を引く

掘り返す土にも四季の匂する

ときめきを秘めて女の物思い

口きかぬ人形にある愛らしさ

東大阪市 安永 暁子

爪弾きされぬ程度についてゆく

名文句並べた中に嘘もあり

いやな事みんな忘れて唄の夜

ケッコウな年二人の夢はダイヤ婚

枚方市 森本 節子

難聴で皆の話の外にいる

お茶漬はサラサラサラと音で食べ

一日の疲れにご苦労さんの声

効き目あるいで湯 匂は我慢する

大阪市 亀井 円女

風花も尾瀬も見ぬまま十二月

夕焼け小焼け花いちもんめの遠い日よ

素適ないい嘘つけるようになりました

いい夢でした亡母のやさしい子守唄

福岡市 井崎 ミサ子

毒舌に慣れてしまつて気にもせず

ドラマ見てつい一人言言うてまた

おしゃべりが済んで寝たのが朝だとき

おとなりの犬にもやつと顔が売れ

高槻市 芦田 静江

ノウハウの誤算が責める秋の雲

三猿に徹し一人の靴を履く

シングルで小さくなつた老母と寝る

広辞林亡夫の手垢に秋さぐる

十和田市 阿部 喜久江

同じことを考えている古希夫婦
ベレー帽よく似合いますPKO
健全な心が病吹き飛ばし

高知市 桑名 知華子

寝る場所が違い夢まで落ちつかず
忘年会 大手を振って家を出る
ばつばつと暮してゐるまにはや師走

尼崎市 吉永 伊三郎

人見する鳩がベンチを選っている
孫の絵に夢二も知らぬ夢がある
いつも乗る瞳に逢えずバス発車

尼崎市 湊 修水

元旦の讃歌は五色の雲にのり
老骨もよし踏台になれるなら
車いす押すボランテИА嬉しそう

尼崎市 中澤 向西

読書三昧月が窓から覗き込む
腹の中さぐり合つてゐるコップ酒
孫が来て一とき和む奥座敷

和歌山市 岩本 美智子

風に乗り箒からかう落ち葉たち
日曜の雨に泣いてゐる共稼ぎ
年金へ背伸びの暮らしつけが来る

和歌山県 藤井 春子

水面下動き出してるあの噂
優しさもきびしさもあり峠道
言い訳を自分に聞かすひとり言

寝屋川市 宮崎 菜月

あなたとは目には見えない紐があり
貯えてみても年度で消える金
ぬいぐるみ着たい冬の日本海

松山市 丹下 美津子

湯煙が誘う北から南から
落ちそうな崖に立つのも秘書の役
札束を積まれ人間弱いもの

熊本市 黒田 緑

靴下の右と左の履き心地
善悪のわけへだてなく自動ドア
清らかな善意でつつむボランテИА

熊本市 北川 一進

渋滞が長くなつてゐる十二月
まだ未練残す議席の座り方
町内もまだうす暗い初参り

東大阪市 指宿 千枝子

おふくろの味を男兄弟恋しがり
お向いも隣の席もガム噛んで
気だてよし姿もよしでいき遅れ

明石市 小川 醉 月

玄関で妻は背中をポンと打ち
妻やんでスーパ一の籠持ち歩き
針千本孫と約束して別れ

寝屋川市 籠 島 恵 子

ため息をとがめられたりとがめたり
説教をしたがる癖で逃げられる
電話代払わないのがよく使い

鳥取県 岩 崎 みさ江

音沙汰が無いから安堵しています
小春日に喉かされた露の臺
忘れたい恨みことと豆を煮る

高槻市 守 先 伸 子

嫁った娘が婚家を名乗った電話口
どんぐりを拾う子めつきり減ってきた
母逝って里のうわさが届かない

京都市 小 林 英 子

家裁出て鍋焼二つ注文し
ばあちゃんも猫もゆっくり春を待つ
激安の文字が疲れているチラシ

京都市 高 沢 栄

帯封のまま札束動く政財界
二条城影絵のような冬の月
退院の朝ありがとう千羽鶴

和歌山市 榎 原 公 子

来た道を振り返る旅遍路笠
しあわせは子がまだあてにしてくれる
世間体気にする無駄を知っている

出雲市 岸 桂 子

天国があると信じて善を積む
受話器から峰打ちに似た言葉来る
珍しいものに群がる癖がある

西宮市 菊 池 トミエ

受けた恩まだ返せなく写経する
同窓会恩師の癖をなつかしみ
飛び立って心残すか渡り鳥

兵庫県 酒 井 靖 子

一言を控えてバカにされちゃった
ああ美味し旅の疲れを取る茶漬
事終り事がはじまる日記帳

島根県 小 林 延 子

お隣の落葉掃いてる十二月
ニッキ水売るおばちゃんに陽があたる
消火器がうまく使えた模擬火災

吹田市 西 岡 豊

少しだけちよつとだけよといける口
見合いからデートデートで真っ盛り
飲み候酔って候戯れ候

寝屋川市 瀧 本 八十八

三番叟鈴のリズムで舞い納む

人生の距離に躡く二度童子

絵日記で孫が乗つてる宇宙船

静岡市 小 木 久 子

解説者多弁がよいと限らない

逢えないで帰った辛き胃に溜り

下手な言い訳聞いている耳がこそばゆい

今治市 和 田 宏

窓ぎわの椅子で乾いた街にらむ

ときどきは脱線もして雪月花

吸殻へ水かけてから留守にする

寝屋川市 北 岡 波留吉

コネつけてそつと握らすはなぐすり

新しい母とはしゃいでハイキング

憂さ晴らしに一人旅する恐妻家

鳥取県 権 代 康 女

はたて貝北の国からとどけられ

精神を統一すれば亡母の顔

絵の中に私を入れる構図ねる

奈良市 米 田 芳 子

紅葉を愛でていただく寺の膳

ほの暗き茶室にしとど雨すだれ

さりげなく言った言葉が命とり

八尾市 平 川 幸 枝

先を行く母の小さな影を追う

一日の夫の小言を数えてる

バラ一輪やる気になった朝に咲く

岡山市 中 嶋 千恵子

さりげない助言で腹をさぐられる

メモ帖の伏字の謎がとけぬまま

美しい波紋は乱れなど知らず

芦屋市 根 来 敬

及び腰が強がりと言うから困る

入れ知恵があるのであろう理屈きく

爪楊枝が女の噂聞きたがる

岡山市 山 磨 行 子

助言より大きな母の手に抱かれ

嫁ぐ娘の笑い袋に助言そえ

老い二人枕ならべてつがい箱

鳥取県 奥 谷 彩 子

病む老母に快気を願う鯛を買う

ダム出来て伝説の村一つ呑む

口車に乗って本音をつい漏らす

羽曳野市 芦 田 絢 子

まだドラマ追いかけている十二月

見えすいた嘘きかされた肩の凝り

イベントのうちだろ夕陽燃えている

十和田市 小笠原 敏 夫

息の根を止めぬ深さで針を刺す
故あって次男の家族と暮して
師走にも計報舞込む淋しさよ

静岡市 永 倉 柳 華

満ち足りた朝へ狙よく喋る
お似合いと言われ値切らず見栄で買う
馴れなれしく話して旅の知らぬ人

静岡市 片 平 静 代

コスモスが優しく揺れる失意の日
身勝手な事を言うからきらわれる
目分量母の態度は狂わない

香川県 田 中 スミエ

障害の足も翔びたい秋日和
待っていたかのように出る欠伸
検査とは言うけど入院の日が重い

香川県 田 中 ふ み

丸い身体こそ取り組めるバネがある(カミさん)
目立ちたい人がバッチリ光ってる
年の暮れ空しさ募る曲り角

香川県 辻 上 よしみ

何しても貴方の視角に居る私
堅物の頑固親爺も女好き
土壇場に立てば度胸も座るもの

富山市 酒 井 輝

内申書袖の下ほど嘘を混ぜ
前衛の筆の掠れが文字らしい
大正の愛はキスせずとも分かる

和歌山市 木 村 親 路

乱世の父に貰った道しるべ
ヒントなど要らぬ真剣勝負です
好きでない男の方に情がある

藤井寺市 川 端 たかし

懲りもせず五年連記の日記帳
一席を設けた腹を探られる
長老の座に飾られる祭り好き

岡山県 土 居 ひでの

村長が出雲の神を買って出る
とって置ききの切り札一枚ある無口
合掌の小さな手なら信じよう

岡山県 福 原 悦 子

抜き差しのならぬ返事に妥協する
点滴の針にいのちの音を聞く
吊し柿 恵み受けている北の風

松江市 浦 辺 静 江

いい便り舞込んでからよく眠る
腹の立つ話になるとそっぽ向く
凝り性は思いついたら一息で

大阪市 尾崎 黄紅

真つ白い皿に想いを載せている
健やかに老妻が叱っていてくれる
紫の女が醸すサスベンス

寝屋川市 土井 英明

引越しの楽しみがあるワンルーム
添乗に妻への土産聞いている
これという話はないが顔見たい

川西市 田中 喜俊

庭に下り一句ほしくて枯葉ふみ
月と星独居の窓に語りかけ
南天が真つ赤にみのり春を待つ

島根県 菅田 かつ子

干柿にずらり並んで見送られ
音調を合わせきれいな二重唱
人見知りバイバイだけは上手です

島根県 三代 朝子

丹精が実った冬の野菜畑
野仏はいつも穏やかいいお顔
年老いてなお童顔の友に逢う

豊中市 小林 一夫

耳鳴りの闇にも慣れてきたピエロ
かわりなき毒舌うれし秋の頃
とろとろと眠り薬の白さかな

今治市 村上 久美子

心では解けた答えを風に問う
目が合つて卑屈な犬が背なを向け
男の子産めば嫁にも箔がつき

柏市 上鈴木 春枝

片思い対角線に君の顔
お早うへ返事が来ない反抗期
泣き声へハンカチ渡したい受話器

豊中市 田中 道胤

停年の妻が力を溜めている
止り木で誰も知らない待ちぼうけ
旅に出る読みたい本の二三冊

今治市 白石 サグ子

忘年会こなして唄がうまくなり
耳朵が男のお世辞真に受ける
暖かい言葉が木枯し包み込む

佐賀市 江口 万亀子

菜を刻む音からあける母の朝
くどくどと呪文のようなことと聞く
過ぎた日を古新聞が物語る

和歌山市 山田 博章

窓の灯が妥協を迫る椅子の位置
腹立つわ腹が立つわと縄のれん
友達でいましょうという捨て台詞

河内長野市 柏本靖子

読書する時間をくれた午後の雨
農を継ぐ兄の背中に手を合わす
負けそうになると方言出てしまふ

宇部市 中村三良

風呂に浮いて明日の行く末考える
得意のポーズ猫が見ていて照れ臭い
充電を忘れて息が切れて冬

姫路市 福本好花

履物で日和を決めた幼い日
ばあちゃんは入院したと触れ回る
かずのこがあればと祖父は上機嫌

兵庫県 西井つや子

病室を燃やす夕日へ掌を合わす
落葉舞い人の一生ふと思ふ
思いつき走り走って見たい試歩の杖

八尾市 秦正子

お隣の梅がほころびこちら向く
用足しに隣の猫がうちの庭
タイミング悪いくしゃみで座が白け

相生市 中塚礎石

まわれ右してから長い舌を出し
本当の友は握手を待っていた
美しい言葉集めて路地の風

広島県 森川拔智

蟹の足夢中でせせり飲み忘れ
国民を忘れ会議が空転し
この奥に何か居そうな森の中

鳥取県 武田照女

良心の怒りに霧が晴れてくる
名水の手桶に今日も人の列
いそいそと行つて疲れる参観日

鳥取県 小西五十鈴

信仰と別に神社詣する
今置いた眼鏡が見えず大騒ぎ
団欒の炬燵へ何時も置くみかん

高槻市 執行稲子

吉野路を辿るおだまき想夫恋
ろう人形 背中合わせのタイアナ妃
粥炊いてくれる嫁とのハーモニー

静岡市 宇佐美寿美

深呼吸心のトゲになやまされ
拭き直す姉の鏡に問うてみる
姉妹都市結ぶ桜が温く咲く

熊本県 高野宵草

釘の音急かせ冬至の陽が沈む
雑草の芽が一番先にシヤシヤり出る
もう飽いた忘年会が断われず

唐津市 山門 幸夫
手をとって信号を待つ古い二人

磯庭園降灰払う術もなく
陽が昇るあゝ桜島桜島

尼崎市 向井 末貞一

老いてなお幻を追う白昼夢

語り合うテーブル囲む三世代
雄弁に困り果ててのなま欠伸

新潟県 高野 不二

パチンコでやつぱりもうける人がいる

カレンダー一枚になってから勝負

肩書で話す時むつかしい

寝屋川市 太田 とし子

追伸に時候の挨拶書いてある

こっそりと寢床で開く預金帳

窓叩く風と落葉がもつれ合う

寝屋川市 後藤 黎之助

同窓会 肩書きついた友上座

洗ってもおちない垢と四十年

戦列を離れひっそり趣味の人

岡山県 江口 有一朗

階段が老化防止と住む二階

何か一つ忘れて帰る兄も古い

九歳の演じる薪能に酔う

米子市 小塩 智加恵
女たち一人暮しが楽しくて

男には一人暮しが淋しゅうて

お年玉 一筆添える祖母の愚痴

鳥取市 植田 一京

生きていてよかった夕日美しい

寄せる波返す波あり恋満ちる

赤飯にどう笑顔の温かさ

静岡市 青柳 金吾

何事も無かったように初日の出

小春日に温い布団の陽の匂い

過疎の村たわわに熟し次郎柿

岡山県 牧野 秀香

コトコトとたく真夜中風の声

一言が胸にさからう風見鶏

枕元重ねた本が添寝する

寝屋川市 井上 すみれ

娘に婿に孫と温みの中に居る

孫娘口紅替えて今朝出かけ

それぞれの生きざま綴り川柳塔

大阪市 乾 哲静

金婚の夫婦にもある喜怒哀楽

ビールのあてに妻のカラオケ聞かされる

定年後何か足りない十二月

鹿児島県 大山 舞鳥影

とんぼがえりバブルはじけて旅費が減り
グイヤより小粒の真珠似合う娘に
病院の待合室で高笑い

今治市 渡邊 伊津志

幸せを逃がしてならぬ障子張る
かいつぶりふいと潜って何もなし
水軍の血筋が海を捨てさせぬ

福岡県 本田 忠男

寒鰯を貰い料理に汗をかく
晩学の趣味が暇など与えない
一度の嘘が家の敷居を高くする

寝屋川市 坂上 高栄

松茸も贈れば粗品になる運命
税金で遊んでその上空出張
靴の紐しっかり結ぶ二度の職

米子市 服部 朗子

軒下でささやく鳩が太りすぎ
一喝の雄鶏声に張りがある
床飾り二羽の小鳥がむつまじく

島根県 福岡 博利

吊るし柿日ごとに黒くなる甘さ
心まで読んでくれるかうちの大
セーターを時々妻ととりちがえ

兵庫県 奥野 テル

内緒金 利子を気に病む程もなし
八十路まだ女でいたい帯の彩
末席へ姿の悪い鯛がくる

兵庫県 北川 とみ子

いい夢もたまに見てくる旅の空
ライバルに毒舌も出る勇み足
又一つ重なる嘘に蓋をする

大阪府 小糸 昭子

猫の子が粗品をつけて貰われる
コスモスが稲の代りにゆらいでる
なぎ倒すほどに風切る才女の目

和歌山県 谷口 義男

正論を吐いた男の孤独感
天敵でバランス取って居る地球
星屑の中から拾い出すスター

鳥取県 山本 正光

限界に来てる弁解まだしてる
騙すより騙されておく明日がある
言いたくはないがと言ってよく喋る

藤井寺市 楠 昭子

慈母観音車窓から老母手を合わせ
黙ってはおれぬとペンが走り出す
地下足袋のままで悔いなく終えた父

東京都 小寺 九
負けてやるはずの相撲の子の強さ
道半ば走り過ぎたり転んだり

安来市 木村 まさ子

朝毎に仏と語る花鉢

身綺麗に七十歳のパートです

佐賀市 古川 かずのり

美しき競った花も実をなさず

一病同士ぬくめ合いたいクラス会

鳥取県 山内 芳江

出まかせを言って自由の履き違い

肩書きが取れて自由が物足りぬ

熊本県 増田 一乗

元総理の証言 闇魔メモを取り

水増しの出張がばれた悪だくみ

熊本市 遠山 夏生

着る人が着れば木綿も洒落て見え

分かつてはいるが姑の知恵を借る

兵庫県 倉垣 恵美

イライラがときにはガラス拭き清め

おんぶした孫のぬくみがうれしくて

枚方市 海老池 洋

乗り越した上に忘れた棚のもの

占い師 株で大損したらしい

川柳に凝って人間臭くなる
基敵の笑顔のなんと憎らしい

枚方市 濱田 良知
泉南市 問屋 啓二郎

暗算で解ける範囲の人生観

ペランダにレベルの違い干してあり

吹田市 岩鼻 啓三

迷子札みたい名刺を入れておく

遠会釈して短日の駅を出る

島根県 松本 聖子

禁煙をさせられ父さん淋しそう

小銭入れも逆さに振られる十二月

広島市 元林 光子

子供より親が汗かく学芸会

年賀状ああこの人も無事だった

松江市 佐野木 みえ

清張の点と線を読みかえす

虚勢張って生きてる事に疲れました

岡山市 伏見 すみれ

マンガ読む机にしては立派すぎ

言い勝って心すっきり日本晴れ

姫路市 福島 姫女

蟹食べに行きたい車が雪で駄目

自画像を若く描くのは願望よ

鳥取県	伊吹富恵	親切を貰ってあげて又貰い 私は蝶花から花への余生旅
島根県	児玉幸子	吊橋で孫とるんるん手をつなぎ 大根を干して山里冬仕度
広島市	中村要	老人会愚痴につられてつい愚痴る 冷蔵庫なかには買い得品ばかり
兵庫県	玉田三重	吊り橋にしがみついてる柿落ち葉 地図になく小島に人の住む灯
岡山県	富坂志重	鯛やきを気に止めながら立話 泣きにゆくにも服をあれこれ迷い
池田市	木村一笛	鍋の湯気燗酒上がり箸がでる 落ちてある一円玉に目もくれず
鳥取県	橋谷静江	孫達の出かけた後の寝正月 フルムーン勧める子供居てくれる
大阪府	今西静子	久しぶり南座で逢う三姉妹 手の届くところの幸は逃すまい

静岡市	中西雅	姉妹らし同じドレスのお祝い日 ひこばえの命かぎりに背のびして
泉佐野市	大工静子	片思い四年過した卒業日（孫の事） 院号の話でお布施忘れてた
兵庫県	中野とよ子	ストレスが溜り電話かけてみる 待つほどに不安が交差寒い風
鳥取市	岩田浩岳	立春といってもこたつからは出ぬ 青い空のもっと遠くを見つめてる
泉南市	坂根流水	山茶花を散らし師走の風はすぎ 忘れっぽい癖に昔の夢をみる
東大阪市	松山隆	道草の好きな山茶花冬飾り 性格を丸出しにしたハナグスリ
和歌山市	西村和成	不死身だと言われ痛いとは言えず 日溜まりで知能指数をゼロにする
岡山県	福原辰江	見送りのホームへ母が点となり ささやきの愛をじやまする傘の音

冬眠の耳が雑音聞きたがる
玄関へ鍋の匂が出迎える

堺市 桜井 莊次

神を信じ人を信じて旅つづく
洗い髪明日の戦い引き締めて

岡山県 後安 江山

威勢いい返事飛び交う魚市場
用足しに出掛け隣で小半日

静岡市 大村 正雄

ビニールのハウスに匂が埋もれる
ノンフィクションつくる作家の腕の冴え

神戸市 岩田 信義

いい夢がさめて醜い世相みる
庭蓍休めて愛の文を読む

藤井寺市 菊地 繁男

婦唱夫随かけ込み寺がほしくなる
悲しみをくれる子供に育てたよ

鳥取県 美浦 美代子

只今と言いつつ灯つけ歩く
入園テスト早起きしてるママとパパ

大阪市 清水 絹子

注射器を持てば女医とは思われず
美女才女魔女らが寄って男責め

富田林市 山原 昭水

霧の中馬蹄の響き追って来た

松江市 安食 友子

ねんねこと鉄路へ行って引き返す

羽曳野市 徳山 みつこ

痛みやわらぎ人にあいたくなるベッド
何やかや言うて寄せ鍋家族の輪

羽曳野市 山本 たけし

落葉踏み秋ならではの散歩道
電話口哭いて告げてる訃の師走

米子市 鹿島 松子

怒らねばならぬ処で泣けてくる
渡り鳥保護されて国境フリーパス

和歌山県 上岡 正直

ストレスも流してしまふ赤提灯
葉を落ししっかり跡目が春を待つ

米子市 木村 春枝

イヤリング可愛い耳に重たそう
世の中に遅れないようまた歩く

静岡市 三浦 つね

流行に遅れ特価の札がつき
出世には遠く過労死などしない

鳥取県 丸山 希久代

病む足で尋ねてくれる友がいる
捨てられた意地があるから生きられる

静岡県 柳 沢 た ま

羽曳野市 福田 悦 子

雨の中酒屋に走る急な客
髪染めてみても深皺隠せない

お年玉師走に年金二ヶ月分
ふるさとの自慢雑煮を食べてから

和歌山県 吉 田 武 治

鳥取市 近 藤 秋 星

鉛筆をなめなめ夜長もて余し

キャベツにはあらず私は葉ボタンよ

刺のある言葉かくして趣味の会

嫁の主張が通って二人目産むらしい

吹田市 馬 淵 光 子

鳥取市 田 賀 八 千 代

夢托す新幹線の塾通い

生きると決めて急に枯木が繁りだす

ブランドにこだわらず過ぎて火の車

老人の合わす両手は信じよう

鳥根県 武 島 ち よ え

米子市 服 部 朗 子

白い肌あらわに大根吊られてる

美容院電話を掛けて夫も待つ

へそくりへ動員かける年の暮れ

詩日記老母が毎日書いて居た

東大阪市 大 平 太 一 郎

鳥取市 谷 口 侑 里

楽あれば苦あり気が付く終電車

毛利さん宇宙の夢をありがとう

再起期し人の情けにほぞ固め

不信心だが仏の花は絶やすまい

鳥取県 中 西 智 恵 子

寝屋川市 豊 福 路 子

幸せは古希を迎えた初詣

甘えてはいないつもりのマイペース

わたくしも財布も疲れ旅終る

許せないと筆がつぶやく怠惰性

和歌山県 村 中 悦 男

橿原市 西 本 保 夫

苦勞越え畑のみかんに陽はまぶし

かな文字の書道に万葉集生きている

強情を理論家づらで通す友

聞きたくて他人の中にもぐり込む

唐津市 野 田 旭 恒

箕面市 木 村 天 弘

眠るのは天が与えた贅沢だ

門札はローンも知らず胸を張り

働いて限りある身の力試す

楽天家の陰で奥様気を使い

鳥取県 橋 本 孝 由
冬休み慣れない家事に手をやかす
二枚舌使いピントが少しずれ

島根県 岩 田 三 和

語ろうよ今日はわた雪ふりつもる
出雲弁笑う東京いま不況

岡山県 杉 本 伊久栄

ストレスの解消愚痴もはいて見る
お歳暮が気になる師走の風が吹く

島根県 今 川 三津江

若作りしてもよいしよで齡が知れ
楽しい話などして森もお正月

姫路市 服 部 一 典

里帰り寝たら幸せ逃げるよう
入退院くり返し懸命今日を生き

大阪府 平 井 露 芳

ジャンボくじ当るか神にもわからない
もみじ狩箕面は天ぶらまで食わせ

唐津市 福 島 紀 一

向き合っていれば言うこと無い夫婦
橋の上昔のひととすれ違い

唐津市 入 江 喜久亭

酔い覚めに人の噂が耳に付き
歩道橋思い出したよ忘れ物

唐津市 浜 本 治 幸
日めくりも師走は急に早くなり
将来を見据えて孫を大事がり

唐津市 江 川 青 琴

年上の妻でうっかり老けられぬ
天罰か二度の放火で足がつき

唐津市 木 内 ミチ子

方便が人のこころを和らげる
心からにじむ笑顔は心打つ

唐津市 山 口 ふさ子

食べることに楽しみになり病癒え
留守しても植木生きいき出迎える

◆ジュニアの部

香川県 小五 田 中 菜実子

食べられる？ おいしいのかな菊の花
三角形見るとエジプト行ってみた

▼お願い

年末年始の郵便事情もあり、今月号に
限り遅延分および前月号分も掲載しましたが、今後は
本誌の定期発送を維持するため、本欄はじめすべ
ての投句と原稿の締切日を厳守したいと存じます。
また、投句は必ず「川柳塔用箋」を使用下さるよう
お願い申し上げます。

(編集部)

路郎賞 候補作品中間発表

川柳塔賞

平成四年九月号〜十二月号

路郎賞候補作品

西田 柳宏子

公約をきつちり果す茄子の花
海紅豆燃えて還らぬ舟を待つ
この人も一人ぐらしがよく喋る
かけ違ひとつを抱いて秋
雲みんな休みか今日は日本晴
待つ人がまだいてくれる途中下車

奥山美智子
吉田あずき
岩津ようじ
西出 楓楽
高野 律子
平田 実男
北山 好笑
故郷はどの子もあてにして居らず
松下たつみ

黒川 紫香

ふる里の遠さは空の広さだな
花みんな咲いて私は一人きり
あつちへと言う方に押す乳母車
おぼろ月 内緒内緒をしてくれる
油蟬 告別式は午後一時
耳そうじ好きな夫ですぐ眠り
肩書を知って女は攻めてくる
耳の垢こそと取れて捨てられず
同性にもてる奴なら信じよう
マンガ読むセビロの顔を見てしまふ

奥山美智子
森川まさお
岩本 笑子
木村 明人
小池しげお
西出 楓楽
玉置 重人
神夏磯典子
永田俊子
阿部 進
督促状 記念切手が悲しそう
ああ余生つるべ落しに日が暮れる
鼻ぐすり効く上役で頼りない

阿 萬 萬 的

ポチポチとメツキがはげて夫婦です

どっちでもいいけど妻の記憶力
温室の花で背丈が揃い過ぎ
型をとる入れ歯老いたらこんな顔
バーコード付きで好物供えられ
逆転打ばかり見ていた肩が凝り
ビル連立地球の墓標かと思ひ
合鍵を妻も大事にしなくなり
万遍なく色を塗りおえ人嫌い
掃除してしまえば元の会議室
白糸で縫うものがあり手を洗つ
茄子の花思い違いもあるだろう
深追いをすると傷つくのは自分
角のある石にも使い道がある
苛めても泣かぬ女で物足らず
橋 高 薫 風
牛歩するとても無邪気な顔をして
実印を押すと話の種が切れ
わたくしを少し削りに波の音
恋心四十にして白湯飲む夜
島崎富志子
小池しげお
小野 克枝
武田帆雀
竹内 紫鏑
松川 芳子
天正 千梢
片上 明水
田中 輝子
神夏磯典子
古川寛然坊
吉川 寿美
堀端 三男
三宅 保州
松本 文子

ハードルを跳ぶ娘に秋が澄んでくる

小島 蘭幸

気まぐれに買って被らぬベレー帽
ためになる本を立ち読みしています

浅野房子
西口いわゑ

日本の花で埋めたい父の日よ
愛されてからセクハラはもう言わず
田口 虹汀

平田 実男

世の中で金がいちばん化け上手
味噌汁の蜆をさせるのが得意
神夏磯典子
盆提灯風化しきれぬもの一つ
新家 完司
水飲みに行った男がもどらない
時末 一灯
点滴に私も懺悔しています
吉岡きみえ
向日葵があちこち向いて留守居役
阪口 公子

長谷川春蘭

何もでけへん人やと女うれしそ
海が見え川も優しい顔になり
玉置重人
刺客かな差出人のない手紙
石垣 花子
野中 御前

野村 太茂津

宵を待つ愛とはこんなものなのか
振り向けばなお黒髪の烈しさよ
土橋 螢
忘れたことが多くて花活ける
松原 寿子
困ったもんで他人の重荷を持ちたがる
西出 楓葉

吉村 一風

ジェラシーを愛の証と思うまい
疊替え父上様になり給う
細川 稚代

仁部 四郎

燃え切れぬ薔薇の叫びが落ちている

吉岡 美房

路台に私の明日が置いてある
研ぎへった鎌で余生を刈りこもつ
西山 幸
水涸れの井戸の心に似て耐える
寺田裕美
肩を落とすと追い打ちを掛けてくる
川島諷云児

林野 魁光

あれくれと言えば妻すぐあれを出す

春木圭一郎

まかされて迂闊に權があつかえぬ

寺沢みど里

スベアキー誰かが持っているつもり

牛尾 緑良

真ん中に立つて出口を見失う

松村迷観子

川柳塔賞候補作品

宮口 笛生

遊ぶ子と地蔵が同じ顔してる
相談をしやすい家の灯がまるい
森田 文
ついついと自分に甘い匙加減
牧渕富喜子
くつろぎのポーズで大の字になろう
川崎ひかり

奥の手があつた女の表向き
遠ざかる過去は少うし水色に
倉垣 恵美
命まで付合うなんてお断り
大峠 可動
愛情に疑いはない豆を煮る
鹿島 松子
口下手の善意に風が和みだす
宮尾みのり
一滴の半命に似て光り
藤井 高子
諦めたわけではないが陽が落ちる
黒田 緑

幸せな女の顔を米を研ぐ
五百羅漢のやさしい風に逢いにゆく
高田美代子
森脇 和子
ふるさとが昔むかしとしゃべり出す
島 ひかる
大川 幸子

切なさを沈めて秋の水溜り
池 森子

小出 智子

病室の窓から雲にのつてみる
他人にはおばあちゃんと言わせない
鹿島 松子

主のない鎌の楔を抜いてやる
男子厨房に立ち荒刻み
黒田 能子
どちらでもいいのに線が引いてある
原 章峰
高野 宵草

アルバムに白黒があり原爆忌
象さんの鼻より長い夏休み
高田美代子
ドイツへのプランは胸で熟してる
大山舞鳥影
蜂の巣をつついて子らの夏休み
森本節子
ひまわりが高く咲いてるよその家
田中 みね
まな板にごとんと硬し冷凍魚
山口新子
逆縁の年を数える彼岸花
小林 一夫
指切りで時々絆確かめる
岡本 道子
人嫌い人恋しさが同居する
奥谷 彩子
畦道を走るわたしはまだ少女
松本 一郎
森田 文

玉置 重人

うれしくてあちらこちらに飛び火する
毎日日曜と言う刑にあう
森 茜
特ダネをたくさん持つてるおばあちゃん
大西 文次
肩書きの程でないなと下足番
越智 青園
立ち読みのひけ目時々本を買う
都 狂四郎
大川 幸子

どちらでもいいのに線が引いてある

高田美代子

生きている証かこみがよく溜まる

丸尾はる子

なるほどと思う寿司屋の魚偏

渡辺 南奉

雑談でさぐりを入れてくる視線

池 森子

だから怒ってだから笑って生きてます

流 奈美子

人当りよくてストレス溜めている

長浜澄子

茜雲さあこれからが正念場

玉置 当代

おでんぐつぐつ一つの家の味になる

牧瀬富喜子

死ぬなら百歳喪主に詫状書き添えて

大峠 可動

遊び下手の蟻へ助太刀してやろう

鶴久百万画

煩惱が断ち切れなくて鈴を振る

松本 一郎

偽善者が善人である白い部屋

山口 新子

だから怒ってだから笑って生きてます

流 奈美子

この世から消えたわたしの青りんご

島 ひかる

したたかに生きる女の返し縫い

児玉 歌子

会釈するだけの愛にも深きもの

田中 孝子

幻想といくたび母の子守唄

大峠 可動

諦めたわけではないが陽が落ちる

高田美代子

いつか効く錯釘にある父の自負

朝倉 大柏

露ほどの邪心もないかかすみ草

山田 葉子

夜叉の面捨てておかめの面かぶる

岸 桂子

毎日が日曜と言う刑にあう

大西 文次

華やいで淋しい影をカバーする

山口三千子

女性上位二階へ上がったまま女

宮尾みのり

切なさを沈めて秋の水溜り

池 森子

三日目にどつと疲れが出るパート

高 杉 鬼 遊

貧乏神肩を落とすと寄ってくる

福田 悦子

失せ物へ紙屑籠が疑われ

沢田 きん

一坪菜園麦藁帽子買って来る

山本 すみ

太陽にいじわるばかりしてる雲

大橋 政良

露ほどの邪心もないかかすみ草

岸 桂子

別れて赤くも赤し冬の花

山田 葉子

手ぬきしたわけではないが冷や奴

小林 一夫

遮断機の向う静かに秋の蝶

大石あすなろ

かたつむり少し冒険してみたら

田中 孝子

酒に罪着せるは酒に失礼な

木下 道子

なぜ逢えぬ汽車も電車も走ってる

村上久美子

砂浜を駆けて来たのは未来だな

菊池トミエ

無人駅草ものびのび生きている

倉垣 恵美

したたかに生きる女の返し縫い

小寺 九

したたかに生きる女の返し縫い

児玉 歌子

新家完司川柳集（二）

平成五年

A 5 判 120頁

頒価 1000円（送料 310円）

〒689-23 鳥取県東伯郡東伯町徳万597 新家完司

郵便振替 松江0-9685（赤碕川柳会句集刊行係）

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 一月号から

青 枝 鉄 治

捨て犬の目と目が合つて帰れない

宇 野 照 代

作者の人柄が伝わってくる。この犬は、人間の身勝手さを作者に訴えようとしている。盃を干して話に艶が出る

大 橋 政 良

ほどほどに干してこそ話に艶が出ようというもの。度を過ぐすと「酒は人を呑む」ことになりかねない。

挑戦の準備始めたコンバクト

桜 井 莊 次

挑戦の目標は社のグラフを伸ばすためか、それとも異性をハントするためか。徐々に闘う貌に変わってゆく。

酒くせも知ってる人事課のデータ

白 石 春 嶺

ブライベートの侵害は、ある程度止むを得ない宮仕えの宿命。だから「酒くせが先に着

いてた左遷の地」ということも。
佐渡おけさ出ると夫は酔うている

亀 井 円 女

本人は桃源の境をさ迷っているのかも知れないが、聞かされる方は少々迷惑。どれ、味噌桶の蓋でするか。

命賭けの愛とは知らぬ倦怠期

秦 正 子

愛の嘘積み重なって倦怠期

上 鈴 木 春 枝

なければ結構だが、多くの人が味わう人生のトンネル。それは倦怠期。「あばたも笑くぼ」だったのが、「笑くぼもあばた」に見えるから厄介。誓詞読むときは嘘つく顔でなかったのに…。

和らぎのみなもとだった母の膝

堀 畑 靖 子

古い引用で恐縮だが、戦場で死の直前、兵が口にしたのは必ずと言ってよいほど、「お母さん」の一言だった。母は優しくして強し。

金賞を付けて哀れな菊枯れる

永 倉 柳 華

叙勲された直後、重い肩の荷を降ろすように他界してゆく人間を想像する。過去を振り返って、人生とは結局なんだったんだろうと思うことがある。

ソプラノで笑いアルトで泣く女

木 下 道 子

ソプラノとアルトの対比が妙。こういうタイプの女こそ生活力が旺盛なのかも知れぬ。老人が老人を押す車椅子

山 田 博 章

まことにお寒い現在の老人福祉を風刺している。私利私欲に走っている為政者に、せめてもの紙つぶてを投げつけたい。

相槌を打つてた人が敵になり

辻 上 よ し み

きれいごとが罷り通るこの世ではない。黒い金に撫でられたのかも。俗に「下駄を穿くまでは分からぬ」と言うじやありませんか。捨てて神あつて拾えば大物で

森 茜

人を観る目を持った拾う神の勝利。捨てた神はさぞかし残念がっていることだろう。

継がれた民話のしみる吊し鍋

海 老 池 洋

耳ものないしよが温い七五三

土 居 ひ での

◇

十七音字でリズム感があり、平易な表現で一読明快、しかも余韻の残る句：を物差しに鑑賞させていただいた。

銀河系

河内天笑選

藤井寺市 高田 美代子

和歌山市 福本 英子

今日のことも今日に忘れて生き上手
あの人が吹く笛の音に酔っている

悪友が一人も居ない不倖せ
試着室店員さんも根気よい

堺市 山本 半銭

鳥取県 鈴木 公弘

一徹に生きた見事なデスマスク

あまりにも美人で眠くなってきた
歳末のポスト洗濯しておこう

告別の読経と孫の不協和音

大阪府 板東 倫子

鳥取県 新家 完司

わたしにも妻にも好きな人がいる

愛想よい別嬪さんで刑事さん
政治家のかけこみ寺になる病院

留守番に飽いたと妻が言い出した

堺市 神原 文

兵庫県 遠山 可住

寝屋川市 江口 度

青葉台緑が丘と森が消え

母さんの時計が止まるお正月
爪を切る安心しきった妻の背な

教育が商売怖いことを言う

鳥取県 江原 とみお

おもうない客に日曜つぶされる

包まずに申し上げますお月さん
どなた様も追っかけごっこして果てた

海南市 三宅 保州

高知県 赤川 菊野

禁煙の駅でタバコを売っている

旧暦を頑固に守る千枚田
勝っても負けてもパチンコ虚しくて

枚方市 森 本節子

宝塚市 永田 暁風

持ち駒に救われるとは限らない

女には見せぬ切ない貌がある
失うた牙豊かさが恐ろしい

宝塚市 永田 暁風

鳥取県 西原 艶子

酔ったかなみんな美人に見えてきた

返品がきけば今頃他人です
少し欲出したばかりにけつまずき

ぎこちなく外人さんと握手する

哀しみを隠す絵日傘持っている
面舵が効かなくなった別れです

電気釜孤独な音で炊き上がり

恋心を先ずもひとりの俺が責め
白い眼で介抱される二日酔い

セツかな冬が落葉を追いかける

岡山県 井上 柳五郎

よんどころなく泥水で手を洗う

寒風に小さな受験戦士たち
終章に近く荷物を軽くする

その傘を二度とひろげることはない

お手柄のように病歴かぞえ立て
七癖の一つも書いてない釣書

尼崎 春城 年代

羽曳野市 芦田 絢子

振り向いて見る時でさえ走ってる

血の絆濃い薄いのとりにまぜて

和歌山市 池 永一 匍

忘れずに今も大志を抱いている
風呂の窓祝辞も湯気も洩れている

寝屋川市 平 松 かすみ

引き金の錆そのままにして平和
寝ころんで見てますエーゲ海の夕陽

倉吉市 野 田 節 子

袴を脱げばやさしいパパだけど

ごめんとは言わずにそつと手に触れる

香川県 木 村 明 人

無理をして買って粗品と書いて出し

奥さんの意のままになる旅プラン

鳥取市 美 田 旋 風

独身の長寿社会がやがて来る

握手しただけでは本音喋れない

倉吉市 野 中 御 前

柚子の香が小指に匂うすまし汁

雪男一緒に飲むう出ておいで

羽曳野市 徳 山 みつこ

領土問題北のゲストは来たがらず

更衣室会議のあとでする会議

和歌山市 古久保 和 子

スケジュールさもあるように見る手帳

暖房が効き過ぎ緊張感がない

鳥取県 さえき や え

地図に残る仕事を子等に見せておく

百姓に名刺なんぞはいりませぬ

川西市 松 本 ただし

竜頭蛇尾不退転とはその場だけ

逐鹿戦コップの中の砂嵐

和歌山市 青 枝 鉄 治

税務署の手紙ひらくに身構える

肩書きが付いて吠えない犬となり

和歌山市 細 川 稚 代

さみしさを隠す饒舌まだつづく

和歌山県 杉 山 精 子

背中から漂う愛に満たされる

寝屋川市 堀 江 光 子

雑踏へいつか合わせている歩幅

豊中市 辻 川 慶 子

好きだから互いにルール守ってる

西宮市 西 口 いわゑ

宴果てて帽子ぼつんと残される

堺市 高 杉 千 万 子

おしゃべりの出っ歯をかくす手がせわし

吹田市 山 本 希 久 子

振り向きもしない背中にある言葉

八尾市 高 杉 千 歩

頼まれもせぬ綻びが放つとけず

和歌山市 森 口 恵 子

後つぎが道草くつて帰らない

富田林市 藤 田 泰 子

頼りない私を頼っている夫

倉吉市 奥 谷 弘 朗

女房が帰ったらしい音がする

羽曳野市 吉 川 寿 美

一病と鶴折りなれた薬包紙

西宮市 奥 田 みつ子

正ちゃん帽大きな夢を見るがいい

和歌山市 田 中 輝 子

あつさりと許す見事な演技派だ

兵庫県 北 川 とみ子

豊かさに溺れて迷うおもちゃ箱

熊本市 遠 山 夏 生

目の保養だけで疲れる春の街

倉吉市 最 上 和 枝

虫食った野菜の方が売れている

倉敷市 小 野 克 枝

軽い方持たされ負けたなと思う

広島市 流 奈 美 子

硬い椅子だから安心して座る

米子市 新 正 子

散りぎわを気づかぬふりをする情け

今治市 矢 野 佳 雲

叱らずに置こうやる気の勇み足

鳥根県 小 林 延 子

預かった隣の歳暮振ってみる

静岡市 沢 田 きん

口下手を補うペンを走らせる

砂川市 大 橋 政 良

割り切れてしまったゼロが物足りぬ

出雲市 竹 治 ちかし

あの世行く時の名前に金が必要

八尾市 片 上 英 一

占いの店は繁盛寒い街

負けて勝つそこまでわたし偉くない
米子市 木村 春枝

他人とは思えぬ友が多くなり
香川県 池内 かおり

手八丁口八丁義母献体す
姫路市 福島 姫女

公害を口にしながら無頓着
米子市 鹿島 松子

ヘクトパスカル天気予報が学者ぶり
枚方市 海老池 洋

B面で日本の恥部を晒け出す
鳥取市 西村 黙光

遺影でも亡夫はいつまでも味方
岸和田市 古野 ひで

ざまあみろと少年に笑われる
鳥取県 土橋 螢

悲しみの瞳ブラックホールかも
和歌山市 西村 和成

冷汗をかいて邪心を見抜かれる
八尾市 山下 美津留

ブレザーが素敵と敵に褒められる
豊中市 田中正坊

進め進めママは引くこと教えない
今治市 渡辺 南奉

恐い顔している時も僕の妻
和泉市 中川 楓

体重計に定年を乗せてみる
鳥取県 土橋 はるお

一番と二番はこんなにも違い
鳥取県 上田 俊路

強妻に怯えマザコン加速する
八尾市 秦 正子

愚かさをわたしの影が嗤ってる
出雲市 島 祥庵

伝来の家屋立ち退くやるせなさ
香川県 成重 放任

腰の曲り他人の亭主と見くらべる
静岡市 青柳 金吾

覗き見たショックは言わぬ事にする
鳥取市 植田 一京

幸せを見させてる 私欠伸出る
米子市 小塩 智加恵

ばあさんになっても妻の長電話
笠岡市 松本 忠三

冬眠の蛙起こした落葉掻き
熊本県 増田 一乗

わたくしの恋は燻るだけでした
和歌山市 宮口 克子

尺取りが意地を張ってる枝の先
鳥根県 加本 義良

開発を阻んだ古代史のロマン
藤井寺市 川端 たかし

梵鐘へ素足の僧の有難し
今治市 月原 宵明

割り切れる若さ家計簿気にしない
大阪市 町田 達子

新米の旨さヘルスメーターの怖さ
守口市 結城 君子

信じ切るあなたをいつも鵜呑みする
鳥取県 石谷 美恵子

世界中夫婦げんかが知れ渡り
大阪市 松尾 柳右子

女房とは入りたくない露天風呂
黒石市 相馬 一花

国民が甘えん坊にした自民
鳥取県 谷口 次男

耐えてきた母の笑顔に励まされ
岡山県 富坂 志重

ライバルの知恵を借りたい時もある
東大阪市 今岡 貞人

耕せば土太陽と握手する
今治市 越智 一水

母ちゃんも出来へんかった逆上がり
豊中市 安藤 寿美子

念仏の時間を読んでいるお布施
松原市 小池 しげお

土遊びする子そのまま育つてよ
静岡県 蘭田 獏杳

差し迫ったわけではないかと迫られる
吹田市 栗谷 春子

ゆとりある余生念じる作業服
大阪市 津守 柳伸

別離百態さよならの風地に溜まる
米子市 小西 雄々

和泉市 西岡 洛醉
流れ雲今をまかせたい姿

岡山県 江口 有一朗
死生一如本当にそうか仏様

西条市 片上 明水
体調で世話役選ぶ老いの旅

和歌山市 田中 みね
同性の目にも素敵な恋敵

池田市 岡本 吉太郎
醒めた目で世間眺めて老いたのし

倉敷市 田辺 炎六
強がりを黙って妻は聞いてくれ

奈良市 米田 恭昌
五時からの男頑張るバスツアー

和歌山市 内芝 登志代
子の作戦とてもきれいなママを描く

静岡市 小木 久子
バツイチと離婚も軽いギャグにされ

静岡市 三浦 つね
反骨の傘寿に似合う服を選ぶ

鳥取県 西川 和子
微笑みの面でお店がよく流行り

和歌山市 堀畑 靖子
人さまの目には歪んでみえる愛

岡山県 土居 ひでの
スタンスを少しひろげて深呼吸

鳥取県 権代 康女
姑の顔がこわばる嫁の案

鳥取市 田賀 八千代
一言が言えず人生遠まわり

大阪市 大福 留吉
集印帖埋めて亡妻への約はたし

大阪市 中西 兼治郎
豊作を小包にする母心

大阪市 榎本 落児
金貯めて閻魔に賄賂贈る気か

広島市 中村 要
正論も離れて聴けば多面体

米子市 田中 亜弥
春の机は真剣勝負するところ

弘前市 村田 善保
励ましの言葉の一つ温める

羽曳野市 福田 悦子
鬼なんて居ないと思う節分会

福岡県 横地 正好
障害児の未来案じた母の鬼

鹿児島県 大山 舞鳥影
エイズ禍で性のモラルがもち直す

河内長野市 植村 喜代
どうしても許せない日は祈ります

唐津市 山口 高明
哀しみの果てで魂浄化する

兵庫県 奥野 テル
花の宴 母のなやみは伏せてある

岸和田市 島崎 富志子
お若いと言われ鏡に笑われる

吹田市 吉川 渉
奥底の澄んでる人は騙せない

倉吉市 米田 幸子
おけき節越後は深い深い雪

京都市 松川 杜的
なあ妻よ結論出さぬ方がよい

和歌山市 榎原 公子
乱れ飛ぶ噂へ向ける盾がない

町田市 竹内 紫鏑
退院の妻は電話に飢えていた

兵庫県 酒井 靖子
ライバルに笑顔で心探られる

大阪市 渡部 さと美
勝手にせい言うてしもうて父孤独

柏市 上鈴木 春枝
多数決シナリオ通り数えられ

広島県 田村 新造
たこ漁が終って瀬戸は冬に入り

唐津市 田口 虹汀
ピント上々閻魔の前に出す写真

米子市 足立 由美子
逆立ちも取り入れているグイエット

香川県 辻上 よしみ
懐かしい顔で賑わう村祭

寝屋川市 籠島 恵子
核家族四分の一のカボチャ買っ

出雲市 久谷 まこと
もうすぐに一人立ちする脇芽摘む

荀香のむ

小出 智子 選

ブランコを揺すって見えてきた自由

ことごと煮る大根は母の時間

落し穴に落ちてゆっくり考える

足音が近づいてくる本を読む

小春日をつつむてのひらから弾む

言霊のゆくえを追っている冬日

巡る季節を老母と確かめあっている

母が死んで好きになれない桃の花

眩暈している間に誰も居なくなる

分別が諦めさせる耐えさせる

紅落とすかりそめの朱の一日の

しっかりと境界線を把握する

すこしの朱を大切に暮れなすむ

わたしに合った椅子を探しているのだが

矯めつ眇めつ姑と言う字を書きなれる

度の合わせ眼鏡ゆっくり世を渡る

グループに太陽系が独り居る

南座の辺り女の十二月

枯花摘む ふたたびの日を約し

富田林市 片岡智恵子

大阪市 渡部さと美

米子市 澤田 千春

大阪市 北川 弘子

和歌山市 後藤 正子

島根県 松本 文子

和泉市 中川 楓

和歌山市 西山 幸

大阪市 津守 柳伸

東京都 山口 新子

貝塚市 池田寿美子

八尾市 高橋 夕花

和歌山市 田中 輝子

羽曳野市 吉川 寿美

宝塚市 丸山よし津

岡山県 矢内寿恵子

堺市 小西 小雪

寝屋川市 宮崎 菜月

晩秋に未練があつて振り向かぬ
あざやかな彩の血圧降下剤

ばあさんが忘れた事にして丸く
柿落葉パレットにない色を出し

亡母の夢見せてはくれぬ羽根枕
考えを変えると歩幅楽になる

山茶花の白純潔を買い被る

大輪の菊私の部屋に似合わない
不信感言葉を選びすぎている

来る来ない来る来ない椿落つ
きつちりと夫が帰って来る不満

冬を越すには口紅程の朱が要る
満ち足りぬ心を抱いて身を飾る

人形の眼が良心を衝いてくる
出口まだ見つからぬまま 冬に

季語のない花を咲かせて書く手紙
とてもやさしい足音でした母だった

打つ面のどれも母に似てしまふ
縄の目が解けず戸惑うことばかり

シクラメンお前も少しつかれ気味
風花がちらちら 過去を連れて来る

ひんやりと背骨に響くかなかな
幸せ度のもさし他人から貰う

鉛筆とメモ傍らに安らぎぬ
今日は草津明日は別府の湯の加減

堺市 神原 文

和歌山市 桜井 千秀

岡山県 富坂 志重

和歌山市 岩本美智子

米子市 光井 玲子

倉敷市 小野 克枝

出雲市 園山多賀子

大阪市 本間満津子

寝屋川市 柴田英壬子

八尾市 宮西 弥生

大阪市 板東 倫子

米子市 政岡日枝子

西宮市 奥田みつ子

松山市 竹田さやか

和歌山市 木本 朱夏

弘前市 佐治千加子

米子市 茂理 高代

米子市 新 正子

米子市 林 瑞枝

八尾市 高杉 千歩

名古屋 藤井 高子

米子市 金山 夕子

大阪市 稲本 凡子

大阪市 西出 楓楽

寝屋川市 岸野あやめ

こつそりとしめし合わせる落し文
 空想のとっても好きな深い椅子
 手が先に意志を表現して困る
 飯の世の飯の住み家を磨かんか
 冬木立の潔さを見習おう
 三歳のまだかけ引きのない笑顔
 余熱すこし残る間に絵を画こう
 北風に押して貰っている強さ
 七十歳今日から回れ右をする
 冷えきらぬほのかな便り握りしめ
 満足な彩に紅葉が描けない
 また今年の止めを刺しに来た師走
 清姫の魔性に心傾く日
 冬の陽の中へたしかな絵を描こう
 老梅の先を急がず除夜の鐘
 逃げ道を少し残しておく情け
 偽りの平和なぞっている絵筆
 くだり坂で拾うてくれた神に会い
 霧のなか鬼ごっこしてみんなおい
 女なら傘寿といえど着飾って
 三猿を守り今年も暮れて行く
 図鑑繰る間はいてほしい庭の鳥
 歯車のひとつ離れたがついて
 お父さんが疲れて帰る十二月
 おもいきり叱ってくれる温い目で

寝屋川市 坂上 高栄
 西宮市 西口いわゑ
 鳥取市 西原 艶子
 尼崎市 春城 年代
 富田林市 藤田 泰子
 寝屋川市 平松かすみ
 西宮市 門谷たず子
 八尾市 秦 正子
 米子市 鹿島 松子
 兵庫県 中野とよ子
 米子市 寺沢みどり
 岡山県 山本 玉恵
 寝屋川市 堀江 光子
 和歌山市 福井 桂香
 大阪府 上江洲勝子
 熊本市 永田 俊子
 和歌山市 堀畑 靖子
 米子市 石垣 花子
 米子市 白根 ふみ
 姫路市 福島 姫女
 寝屋川市 井上すみれ
 和歌山市 福本 英子
 吹田市 栗谷 春子
 藤井寺市 高田美代子
 和歌山市 細川 稚代

さりげない会話で釘を打ちにくる
 ほおほい知らん振りする鴉の群れ
 口紅をひいて女にもどる時
 木枯しといっしょに駆けている夕べ
 鋭角に削り取られて泣く山よ
 ながいものにまかれ身動きとれぬ葦
 万歩計小鳥の声を聞きわけ
 どこまでが本音かときに考える
 慈母観音母の姿を重ね見る
 今の世を見せたい亡母偲ぶ
 思い出のひとつとき軒のつるし柿
 病窓に顔を並べて夕日みる
 土壇場に立つと女は強くなる
 野路菊よ岩場の土は住みよいか
 ノーメイクだから素直に返事する

有田市 生馬美英子
 出雲市 石倉英佐子
 松江市 松浦登志子
 和歌山市 森 茜
 香川県 川崎ひかり
 和歌山市 松崎 幸子
 鳥取県 権代 康女
 大阪府 樋口シマ子
 大阪府 中塚 遊峰
 姫路市 丁坪サワ子
 大阪市 鈴木 節子
 米子市 服部 朗子
 香川県 辻川よしみ
 松江市 安食 友子
 羽曳野市 芦田 絢子

投句先 下544 大阪市生野区勝山南1-18-10 小出智子

ゴシックの一句目―安定した美しさをもち、女性でなければの表現を
 されている。心を開かせてくれるブランドであれば時々揺すってみる
 もよし。人生はまだこれからのだから。二句目―大根を煮るところには
 は今までもあるが、母としての時間であると言っているところには
 きりとした作者の存在があり、澄んだ心がある。三句目―長い人生には
 色々なことがあるけれど、考えようでどんな羽目になったとしてもブラ
 スに考えてゆけるものだということを知る。この句の「考える」は常套
 的ではない。軽い表現ながら思いは深い。四句目―作者の心の屈折を赤
 裸々に書かれた句で、意地悪なまでに自分を押し包んでいる様が「本を
 読む」になった。まさしくこの句は女である。

綿

春城年代選



純綿と米が光った頃もあり
綿入れの形見に母の愛を嗅ぐ
コットンと表示変ればシャレた柄
綿を着て外人の日本趣味
綿の花昔は遠くなりにつけり
綿を売る国の笑顔を見て帰る
綿入れに包み込まれている孤独
ねんねこの綿が聖樹の雪になり
木枯しにふるえツリーの綿の雪
綿畑消えた枯野に炎を探す
純綿の響きによぎる戦後の日
綿帽子やがて初心は忘れられ
幸せを飾り尽せぬ綿帽子
じゃじゃ馬の手綱をとった綿帽子
やがて角出すことだろう綿帽子
この家の土になる気の綿ぼうし
今はもう何も言うまい綿帽子
時差ぼけへ木綿布団と味噌汁と
綿はじけ亡母の面影糸車
河内木綿民話の残る土地に住む
綿の木に真つ赤な恋の花も咲き
先代の木綿耕の粋な柄

やすお 綿入れにくるまり姿婆の風を避け
俊路 綿で首しめられている愛もある
宵草 退屈な耳 綿棒でいじくられ
たつみ 綿の実のははけて人手待つばかり
しげお 河内木綿は頑固な心持ちつづけ
水煙 昔むかし祖母から聞いた紡ぎ唄
芙美子 綿つみの黒人霊歌地をゆする
俊子 綿パンでひらりのような女の子
よし津 佳
雄々 木綿糸の強さも母だなどと思つ
敏 脚光の影を歩いた木綿糸
希久子 なんとなく綿雪温いなどと思つ
可住 綿車里のばあやの話し好き
恭昌 綿棒の下で素直に目を瞑り
鉄治 人
玉恵 綿車倉に眠っている哀話
富喜子 地
南奉 蜜月の布団の綿は雲に似て
とよ子 天
隆 タンポポの綿毛荒れ地の覇者となる
繁男 軸
智加恵 綿の実のははけて母は十萬億土

納豆

田辺灸六選



納豆の絆断ち切る社の人事
納豆に負けぬ夫の粘り勝ち
おみやげは甘納豆で足りる父
納豆も嫁に合わせて好きになり
納豆に古人の知恵を噛みしめる
糖尿で唾をのみこむ甘納豆
納豆もお国自慢という梅里
北国の情けが熱い納豆汁
上京の娘納豆ノイローゼ
墨衣包んで耐えた納豆汁
年とつて納豆みたいな夫婦です
満たされぬ朝を納豆掻き回す
納豆と相性悪い祖父の髭
ビタミンの講義に納豆顔を出す
スタミナを信じる父で納豆好き
納豆嫌いの嫁で息子が可哀そう
納豆も食べる外人だから好き
注文は水戸納豆ときめた老父
脱皮した長女納豆食べはじめ
納豆の粘り八起きの意地だらう
腐っても鯛納豆も似たものか
病人の鼻へ納豆突き当たり

白峰 納豆
虹汀 納豆
正敏 納豆
隆 納豆
あずき 納豆
狸村 納豆
アサ 納豆
あやめ 納豆
杏村 納豆
ひでの 納豆
タミ 納豆
和枝 納豆
御前 納豆
有一郎 納豆
雀踊子 納豆
宵草 納豆
保州 納豆
柳五郎 納豆
雄々 納豆
大柏 納豆
佳雲 納豆
愛論 納豆

昨日の恋に納豆が糸を引く

納豆の粘りがほしい子の育ち

亡き母の味は寒夜の納豆汁

納豆を食べて働く顔になる

納豆の味で覚えた粘り腰

納豆も相撲も好きな日本通

納豆の折り「元氣な子に育て」

納豆のほか好き嫌いありません

納豆は何時も夫が買って来る

未練などないのに納豆糸をひく

食べず嫌いとは納豆に相すまぬ

納豆で育つ粘りの東北児

留学生納豆好きで箸が付き

栄転の舌に納豆なじまない

納豆が自棄にもつれる朝の膳

佳

納豆のねばりに負けたなと思つ

わだかまり消えず納豆かきまぜる

窓際に粘らぬ納豆しがみつ

納豆のねばりを箸がもてあます

納豆を今日も他人の顔でみる

人

納豆の糸に朝からからまれる

地

納豆が踏み絵となるか親日家

天

納豆へ大阪弁を見直され

軸

納豆の妻にここまで支えられ

螢

寿恵子

倫子

京子

哲静

正坊

和成

良江

杜的

延子

玉恵

朴竜

舞鳥影

重人

多賀子

美智子

延子

一花

諷云児

旋風

（働）みつこ

舞鳥影

遠山可住

軸

納豆

納豆

納豆

納豆

納豆

投げる

神保拓生選



雪投げに興する父と子の絆

石投げて私の心に問うてみる

投げキッスまだくちづけはしていない

変化球投げて嫁の出方待つ

投げられた言葉をバネにする野心

御仏がやさしい笑みを投げかける

千匹の鬼が礫を投げてくる

石投げて留守確かめている空巢

小石でも投げたくて来た政治

投稿を生甲斐にしたい老いのペン

不用意に投げた言葉が跳ね返る

小石投げ波紋広がる胸さわぎ

投げ技へ師匠は弾みそうに立ち

投げ捨てに罰金をとる自衛策

投げられる石にも石の意地がある

佳

変化球覚えて少し疲くなる

本人は投げたつもり始球式

又けんかお隣物を投げる音

ライバルに投げるボールを選っている

投げ出した弱気を叱る仏間の灯

人

男なら投げられた餌は拾わない

倦怠期たまにカーブを投げてみる

花束を投げるのと海の喪があける

天

大関を投げた背中が嬉しそう

軸

勝美

白光子

杜的

しげお

サワ子

俊子

美智子

あやめ

通彦

雄々

白峰

遊峰

愛論

杏村

諷云児

帆雀

宵明

兼治郎

狸村

希久子

正坊

宵草

椎江清芳

軸

納豆

納豆

納豆

納豆

納豆

納豆

初歩教室

題——評判

吉岡美房

本欄を担当することになって、丁度一年が過ぎました。その間、色々と川柳の形について申し上げて来ましたが、それらは又、折りを見て勉強して行きたいと思ひます。

川柳は人間を詠むものとも言われ、そこには作者の心が表現されているべきです。例えば、それが情景描写であつても、句の中に作者が存在しなければなりません。いわゆる説明の句に終らないためには、表現したいもののすべてが作者の心のフィルターを通して作られ、読む人の心の琴線に触れるような句にまとめられていたいものです。

これからも引続きよろしく願ひします。

それでは添削句から発表します。

野次馬になつてみたくなる評判 恵子

(野次馬になつて評判確かめる)

評判のあの娘とうとうお嫁入り 治江

(評判の娘が嫁入つて雪となる)

評判になると八百屋も素っ気ない 杏村

(評判の店で驕りが見えて来る)

評判が良くなりやその分敵が増え 幸雄

(評判が良くてその分敵が増え)

評判の足を引っぱる上り坂 忠治

(評判が良すぎて足を引っぱられ)

評判に因果ふくめてお手のもの 太一郎

(評判になれと出荷に祈り込め)

評判の映画観ながら愛告げる 彩子

(評判の映画に誘う下心)

三面記事あの神童が大見出し 舞鳥影

(神童の末路三面記事に見る)

評判の孝行息子嫁がない 高栄

(孝行の評判良すぎ嫁がない)

評判が看板通りの味走り 隆

(評判に古いのれんが支えられ)

評判の通り汚職がばれてくる 侑里

(評判の程に汚職が見えて来る)

肩書きのわりに評判悪い人 よしみ

(評判の悪さ肩書き振りまわし)

聞き合わせ評判いい娘でしか言わす 眞幸子

(聞き合わせ評判良すぎ物足らず)

評判がひとり歩きの裏通り 延子

(評判のひとり歩きに引きずられ)

評判を聞いてなるほど飲んで効く 関幸子

(評判の薬色々飲んでみる)

評判の頑固じいさんまだ九十 ふさ子

(評判の頑固貫きまだ卒寿)

評判のわるさ息子が親しい 君江

(評判のわるが一番親しい)

母の愛悪評高い子にそそぐ 渉

(悪評の息子を母は信じ切る)

評判の裏に陰口つきまとう 好花

(評判が良くて陰口ついて来る)

評判が悪くていつも午前様 美寿子

(評判を一度で下げた午前様)

口こみの評判開業医よくはやり 一乗

(評判の名医に命賭けてみる)

ロングラン夢を見る客一度三度 美智子

(評判へ夢を見に行くロングラン)

前評判連れ立って行くかぶりつき タミ

(評判へ連れ立って行くかぶりつき)

ヒーローとヒロイン評判の話題くれ 保夫

(評判を重荷としない貴とりえ)

貴りえが高評判で婚約す 孝由

(評判に負けぬ幸せ貴とりえ)

評判が高い男をキープする 春枝

(評判の人氣力士をキープする)

付き合えば評判ほどに悪くない ますみ

(補歴言うほど悪い奴じゃない)

前評判が良すぎるのにも畏がある 敬

(評判が良すぎて裏を勘ぐられ)

パーマ屋の踊るカットが評判です 幸枝
 (評判の髪形ばかりはめられる)
 評判になる程後家と仲が好い 美男
 (評判は美人の寡婦を放つとかず)
 レースでは評判倒れになった穴 晋
 (大穴の評判倒れ狙つてゐる)
 評判の良い後継ぎに世をまかす マサエ
 (評判の良い後継ぎにある不安)
 値上げせず頑固親父でよく流行る 君枝
 (評判の頑固おやじでもつ屋台)
 前評判過ぎて美事に落選し 幸夫
 (評判が良すぎ選挙は上滑り)
 評判のタイ焼き買いに車出す 嘉子
 (評判の鯛焼き外車買つて行き)
 評判の噂善女を偽装する 金吾
 (評判の善女の面が外せない)
 幸せは噂に負けず添つた仲 きぬ
 (評判になって本気になった仲)
 気むずかしい夫社内でのいい評判 栄
 (評判は内と外とで大違い)
 評判の店で主人のおもてなし 芳水
 (評判の店で夫は奢らされ)
 評判の娘で肩が風を切る とし子
 (評判の悪さが嫁に行く不思議)
 変り者と言う評判に耐える意地 正子
 (変り者と言う評判に意地がある)

評判がよすぎて無職寡婦とお茶 三重
 (評判のよすぎる寡婦が一人住む)
 評判を鶴呑みしました買った 円女
 (評判を鶴呑みにしない買い上手)
 評判の店の良し悪し誰が決める 姫女
 (評判の店の良し悪し客が決める)
 評判へ切符買ひ足す市場籠 芳郎
 (評判の味行列の人となる)
 有りそうだけの評判また聞こえ 正夫
 (評判は悪いが金は持っている)
 評判が生れる団地の昼下り 啓二郎
 (評判をつくる団地の昼下り)
 評判の後からゆっくり新任地 黎之助
 (評判が先に行つた新任地)
 評判がひとり歩きをして困る 九
 (評判がひとり歩きをして困る)
 評判の安さ身動きできぬまま 哲子
 (評判に並ぶ安心貰うため)
 前評判蓋をあけたらただの人 辰男
 (評判も蓋をあけたらただの人)
 評判へとつとつ空っぽにした九十九 公子
 (評判の儲け話に見た地獄)
 評判の鉢植のぞく垣根越し 方子
 (評判の富豪と我が家庭つづき)
 悪評に負けておられぬ命がけ 有一朗
 (悪評に負けぬ女の意地がある)

やぶ医者と言われ乍らも食べている 隆雄
 (やぶ医者という評判で親しまれ)
 着想・表現ともに立派な句
 評判の才媛 俺の趣味じゃない
 評判になって世間が狭くなり
 前評判ほどでなかった観光地
 評判に負けぬ演技の名子役
 遠回り評判ほどの味でない
 評判の働き者でいる辛さ
 下馬評に外れがあつて面白い
 評判は気にせず毬が弾み出す
 評判のナースに脈が早くなり
 口コミで並ぶ頑固な味の店
 評判の名医へ電車乗り継いで
 評判の嫁が家風になじまない
 評判の悪さに猫も及び腰
 評判が重荷ストレス溜めてます
 評判の列の長さにある屋台

絢子 忠治 富士子 侑里 美智子 よしみ 幸雄 静子 節子 和子 和子 忠男 章子 絢子 みつこ

私の句

評判の娘獲つた憎い奴
 評判の塾でいびつな子をつくり
 悪評も親ほど娘気にしてす



題「進む」—2月15日締切(4月号発表)
 宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

本社 一月句会

一月七日(金)午後五時半

メンスファッションセンター

表彰行事のため、締切りを十分間早め、午後六時二十分から九十四名出席の初句会が開会された。

平成四年度月間賞杯の小池しげお氏、本社句会皆出席者三十四名代表の堀端三男氏、銀河系賞の藤田泰子さん、茴香の花賞の田中輝子さんの順で西尾某主幹の手から賞状・カップ・色紙などが授与された。新年の挨拶、受賞者への「おめでとう」が交錯し、花束が彩を添え、交換の短冊が往来する華々しい句会となった。

「おはなし」は理事長の橘高薫氏。日本川柳協会が社団法人となり、組織の整った川柳で、ギスギスした政治、不景気の世の中を円滑にしたいとの今年の抱負にはじまる。また、本誌が来年一月号で八百号を迎えるにあたり、大々的に自祝をしたいので、アイディアを出して欲しいとの依頼があり、本題に入る。路郎の句や古川柳から例をひいた『内在

律』の説明があり、これからもよりいっそう川柳の質を高めるよう勉強したい、との結びに一同、謙虚に反省させられた。

初出席の西村哲夫氏(東大阪市)は路郎先生の孫にあたり、千葉雷音氏(寝屋川市)、岩本美智子さん(和歌山市)と共に歓迎の拍手で迎えた。

月間賞は岩内外吉氏(大阪市)が獲得。

(司会)天笑 (受付)いわゑ・千歩
(清記)楓葉 (記録)タン吉・月子

席題「拝む」 藤田泰子選

嬉しい日誰彼なしに拝みたい
どなたさんにも拝みたいほど倅せよ
柏手の音が澄んでるよい年だ
拝むことはいつでも一つ初詣
百度石拝む歩幅が春を待つ
お陽さまを毎日拝むお人柄
お陽さまを毎日拝むお人柄
拝むことだんだん多くなる余生
拝むことちゃんとしてる子の無心
マンマンチャンアン婆ちゃんに教えられ
白米を拝んで食べた日も遙か
拝むこと多すぎてなお初日の出
天守閣拝む今年も翔べそう
拝んだらなおりますよと布教され
つますいた石を拝めと説く法話
拝まれてだらしくまた顔ゆるむ
拝むばかりで拝まれた事がない
念願が叶うと拝んだこと忘れ

保州 天笑 月子 憲太郎 杜英子 杜的 杜来 笛生 みつ子 柳弘 太茂津 頂留子 年代 三男 昭子

今やつと亡姑のわだちへ手を合わせる
冬母 七たび母の忌が廻る
組板の鯉もやつぱり拝んでる
仏拝む母はなんにもほしがらず
奥さんの陰でときどき手を合わせる
仏さんの次に奥さん拝んでます
お地藏さんにとまって蝶々拝まれる
足る事を知らぬ女の神だのみ
金拝む時の女は美しい
拝まれても困る私もオケラです
太陽を拝む両手にある傷心
完走の誇りで拝むゴールイン
銀行に拝まれてるボーナス日
生命保険に入ってくれと拝まれる

八起き目は首を洗ってから拝む
水掛け不動いくさは遠い幻か
拝んでもあんたに金は貸せません
石を積む拝むかたちに石を積む
青年の両手が拝む明日の天

人 住 佳 八起き目は首を洗ってから拝む
水掛け不動いくさは遠い幻か
拝んでもあんたに金は貸せません
石を積む拝むかたちに石を積む
青年の両手が拝む明日の天

病みぬけた命の重さ掌を合わす
拝み足ることはあるまい父母の墓

天 軸 明と暗 無心に拝む命乞い

はだか木も拝む姿になっている
幸 泰子

はつ絵 たず子 智恵子 悦郎 鬼遊 杜的 萬的 智恵子 歌子 美代子 岳人 太茂津 鬼遊 文秋 しげお 薫 月子 幸 美幸 寿美 楓楽 幸 泰子

兼題「そろそろ」

木本朱夏選

三寒四温そろそろ芽ぶく路の臺
よく稼ぐ女房そろそろ他人めく
根回しの酒がそろそろ効いてくる

稚代
宣司
諷云児

そろそろと渡る吊り橋肩を借り
そろそろと気配伺い本音出す
恥部かくすそろそろ父も意識する

美智子
しげお
透太

声美人そろそろ顔が見たくなる
余生そろそろあとを濁さず飛ぶつもり
諦めてそろそろ幕を引く準備

年代
射月芳
庸佑

そろそろと距離を伸ばした試歩の杖
病みあがりそろそろと竹踏んでみる
そろそろと休まず行けと亀が言う

智恵子
三男
佳秋

合鍵にそろそろ飽いた年が明け
カルテにはもうそろそろと書いてある
助け舟がそろそろ欲しい意地っ張り

外吉
美代子
月子

飯病ではないがそろそろ食べている
潤滑油そろそろ欲しい夫婦独楽
定年がそろそろ迫る寒い首

透太
諷云児
たず子

親はなれそろそろスーアさめてくる
花が散るそろそろ自分みつねねば
掌の螢そろそろ放ち恋進む

楓楽
美幸
満州

そろそろと自然に戻す髪の色
四日すぎそろそろ書けぬ日記帳
ポケットにそろそろ溜まる冬の鬱

雷音
満州
雷音

ポケットにそろそろ本音打ち明ける
そして春そろそろ本音打ち明ける
手さぐりで森の深さを踏み迷う

文子
寿美
憲太郎

ライバルがそろそろ弾丸の尽きる頃

憲太郎

小豆粥そろそろ出稼ぎ旅仕度

章久

還暦の声でそろそろ炎えはじめ

吐来

水子たちがそろそろ攻めて来る頃だ
入試駿馬そろそろ神は選りはじめ

天笑
武庫坊

住

男五十歳そろそろ墓を考える
強がりな鬼もそろそろ紙おむつ
お伽噺そろそろこわい声待つ

山久
隆一

妻や子がそろそろ遺書を書けと言う
よい返事そろそろ米そうポスト拭く

保州
友照

人

もうそろそろ本音で生けるボールペン
ポケットにニトロそろそろ生きている

みつ子
道胤

地

深刻になるなそろそろ枯れる根だ
軸

宣司

天

母の忌が巡りそろそろ水温む

朱夏

兼題「有名」

三宅保州選

有名になると勲章はしくなる
有名なお医者さんです聞き上手

雀踊子
稚代

有名になったか返事も来ない
有名な女意外な顔を見せ

文子
庸佑

評判の美人にあった付けばくろ
それほど有名だとは知らぬ母

敬
はつ総

有名な名所のトイレ借りてくる
有名になれと隕石屋根に落ち

小鹿
信義

町内の放送局で名が売れる

諷云児

有名になって対話のない家庭

半蔵門

観光バスこれから目黒にも止まる

外吉

皇民党 有名にしたため殺し

憲太郎

離婚して有名になる三枚目

武庫坊

わんぱくで有名だった子も父に
有名になって反省つく猿

英子
緑良

有名になって算盤強くなり
有名へ一日死んだふりをする

太茂津

仮面いろいろ有名税が高過ぎる
有名になってペレーをはなさない

弥生
幸

有名な子をもつてから親の闇
知らずとも同年だった名士の計

朱夏

有名名人 知っているのを鼻にかけ
有名になって淋しい肩の線

吐来
正坊

有名になって女を過去とする
有名になって聖書を汚さない

美房
しげお

有名になりせんべいに名を遺す
家出した子が有名にする故郷

鬼遊
信義

有名でないが絵馬堂信じよう
女はいい裸になれば名が売れる

悦郎
路児

ひっそりと有名人が死ぬ寒さ
有名になって物指し狂い出す

紫香
楓楽

有名名人だろごろ付いている
住

ダン吉

名物に本家元祖とややこしい
有名になって昔が裁かれる

宣司
千秀

おもしろい名前みんなに憶えられ
ユトリロもベートーヴェンもいる酒場

月子
いわゑ

盗作をされてますます名が売れる

文秋

人

有名になると通じぬ糸電話

地

エッセイに書かれて蕎麦の味が落ち

天

近すぎてそない有名とは知らず

軸

有名になったら困る過去がある

兼題「進化」

田中正坊選

進化論さむい話が多すぎる

竹べらが進化の謎を解き明かす

世界はひとつエイスが進化するらしい

空想がまた現実となる進化

かたつむり進化論から遠くいる

進化して何か大事なことを忘れ

進化いま進み冷え愛が枯れ

進化論ルーツは問わぬ事にする

ダーウィンこの世は進歩しましたか

メンデルの法則破る試験管

老兵は去れと言つてニューメデア

フラスコで万物進化する怖さ

進化した猿は人間臭くなる

進化のツケ腰痛抱いて生きている

進化せぬ男と女にある闇夜

腰痛に進化の無理を責められる

男たちいるから進化した下着

ハイテクで育つた四季の無い野菜

楓 楽

朱 夏

天 笑

保 州

稚 代

信 義

庸 佑

い わ ゑ

み つ 子

雅 文

房 子

み つ 子

射 月 芳

三 男

悟 郎

飄 云 児

智 恵 子

朱 夏

萬 楽

楓 楽

し げ お

笛 生

進化する女ますます強くなる

片減りの靴に進化の跡がある

頭だけ大きくなってゆく進化

柿落し女の園が進化する

ああ進化だんだん足がなえてゆく

進化した女 男を越えたがる

進化論 土の匂いのない野菜

まだ進化続けています僕の脳

もう猿は聞き飽いている進化論

パンツをはいた猿が戦旗を振りたがる

進化ではないと奇形魚怒ってる

地球では住めなくなった進化論

皇室の進化に素晴らしいニュース

進化する森から消えてゆくドラマ

若者が戻って村は進化する

進化論 化石の中にあるドラマ

核兵器減らす進化を見守ろう

地球から逃げる進化を考える

地 球

人間に進化をさせて神は悔い

天 球

進化論あなたはきつと蝶だった

ダーウィンをびっくりさせているパイオ

軸

兼題「混む」 小出智子選

スーパーの混んでる方へ足が向く

昭 子

幸 子

泰 久

章 久

度 子

路 児

透 太

月 子

保 州

朱 夏

透 太

雀 踊 子

外 吉

千 秀

紫 香

勝 美

は つ 絵

月 子

文 秋

千 歩

正 坊

薫

またボタンちぎられてきたえっさん

駅前うどんやが混む俄か雨

ブームとか秘湯はどこも混んで居る

怠けるのと泡立ち草が混んでくる

手の混んだ芝居でやっとなを越し

混んでます押すな押すの老いの坂

不景気というのに空港混んでいる

エリートを目指す列車が混んでくる

神様が遠く混み合う絵馬の数

人混みに押されて酔ふと思つ

極楽も地獄も混んでいるという

譲られた席に行けないほどに混み

生々流転 今日電車は混んでいる

待たされる方のラーメン屋で食べる

すし詰めのバスに我慢を試される

混雑の中で頭を整理する

案じてたわりに帰省の混み具合

日本人ばかりで混んでいるハワイ

銭湯が混んでる寒い寒い冬

負け犬で混むバチンコの順を待ち

少々は混もうが母が待つている

はすかいに客が立って混む串かつ屋

混み具合 聞いて晦日の散髪に

ばあちゃんは混んだお医者を選つて行く

檜山も混んでますよと鳴くカラス

スカートを穿くさむらいて混む酒場

人混みは承知の上の初詣

もつと混めもつとおいでと恵比寿さん

外 吉

た ず 子

路 児

東 雲

路 児

章 久

泰 子

典 子

輝 子

は つ 絵

文 子

紫 香

幸 子

美 代 子

飄 云 児

月 子

小 路

鬼 遊

雀 踊 子

一 風

典 子

鬼 遊

年 代

楓 楽

杜 的

正 子

二 南

美 津 留

紅白が済み銭湯の混み具合

ゴルフ場が混んでいびつな浮世だな

佳

混む中で席を譲ってくださった

混む方へ私も並ぶタコ焼き屋

ナイターが済んだと分かる混み具合

戎さんに覚えてほしい人で混み

かけまくも人の混み合う初詣

人

渋滞を一夜で消したお元日

地

郷里近くなつて渋滞きつくなる

天

網棚が混むおとこの荷おんなの荷

軸

木枯しの自転車置場混んでいる

兼題「空 氣」

西尾

栞選

空気入れ替え女ひとりの灯を守る

ロケ進む空気美味しい港町

スーパで空気売り出す日が怖い

紅一点呑む霧開気にしてくれる

澄んでいる空気を破る寒修行

空気入れ過ぎ北浜でバンクする

気に入らぬ人が帰りでマド開ける

産声は空気に会えた喜びか

湯豆腐へ空気が白い京の朝

重くする空気が 我が家に受験生

この人が座ると和みだす空気が

柳伸

天笑

はつ絵

信正子

信義

萬的

隆

薫

弥生

幸

智子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

子

空気までそのうち地球から消える

白梅も紅梅も吸っている空気が

平成の空気が 奔放過ぎないか

石一つ投げて空気を二分する

否応無しに同じ空気を吸っている

ふるりの空気を吸うてきた元氣

末席でみな空気を読んでる

この夫婦 空気の洩れる音がする

雪降って空気が和む母の郷

咳払い一つで重くなる空気が

大阪に空気が戻った三ヶ日

逆転の空気が差して秋女

哀しみは空気が淀む通夜の席

金婚へ空気がのようにまだなれぬ

風船の空気が洩れていた不覚

あやしげな空気になって座をはずし

反対の空気察して出さぬ案

オリオン星座 冬の空気がなっている

損得を言うと空気が濁ります

その場の空気が覚れぬ方がいて困る

根回しに馴れて溺んでいる空気が

佳

空気よみすぎてさもしくなる笑い

温室の外の空気が本物だ

三ヶ日これが空気というものか

紙コップ重い空気を軽くする

異議ありの声で一転した空気が

妻という薄い空気に耐えながら

佳秋

岳人

雅文

千秀

冬葉

月子

月子

美幸

螢

信義

眉水

悦郎

恭昌

寿美

抜智

信義

道胤

鬼遊

敬

薫

子

子

子

子

子

子

子

子

着飾った女が空気混ぜに来る

天

その人が来ると空気に色がつく

外吉

病室の空気を語る苦勞性

軸

一路賞・各地柳壇

賞選考委員決まる

考委員は大矢十郎・永

田俊子・春城武庫坊、同各地柳壇賞の選考委

員は本田恵二朗・林はつ絵・田中正坊の各氏

に決定、4月号に受賞者が発表される。

柳界展望

編集部

一椀の重さを風の中に立
つ 島本 泰

信じ合う終点までの手をつなぎ 佐藤三幸堂

こっそりと父の畑を歩いてみる 門脇かずお

網棚の傘は情けに飢えて いる 番野多賀子

★「川柳大阪」(大阪市交通局川柳部)六〇〇号記念句会が旧冬12月13日午前11時から地下鉄天王寺駅会議室で開かれ、同午後1時からアポビル12Fの「いもたこなんきん」で懇親宴を開催、橋高薫風理事長が祝辞を述べた。

★第28回川柳塔きやらぼく忘年句会は林瑞枝句集『傘の浜』出版記念を兼ねて旧冬12月6日、170名が出席して開かれた。当日の各題秀句は次のとおり。

霧晴れて道美しくのびている 山根しげる

夫婦別姓わが家に舵は二つある 渡辺 独歩

考える輩は届かぬ闇を彫る 久保田元紀

はたる棲む川から拾うははのもの 林 荒介

雪国の雪の深さを測る棒 新家 完司

ひらがなで包んでしまふ雪だより 森中恵美子

わたくしの枕の上に雨が漏る 新家 完司



★鳥取県西伯郡名和町・山香荘の子供広場に林瑞枝さん(本社理事・きやらぼく川柳会副会長)の句碑が建立され、12月27日、除幕式と記念大会が挙行された。

句碑は瑞枝さんがかつて勤務していた庄内小学校の教え子たちが句集『傘の浜』

発行を祝って建立したもので、55×70cmの白御影石に「追憶の視野いっばいに野菊咲く 瑞枝」と自筆が刻まれており、地元の新聞・テレビでも大きく報道された。

★朝日新聞大阪版掲載「朝日なにお柳壇」の今年の十秀が12月31日付で発表された。最優秀句は次のとおりだが、本社関係では吉川寿美・森川まさお・藤井正雄の3氏が選ばれ、寿美さんは薫風・つとむ選の両方に入っている。

〈橋高薫風選〉
軽く手を挙げて雲間に消えた友 佐藤 崇

〈片岡つとむ選〉
母探す写真一枚摩り切れる 古本 修六

★西宮北口川柳会は平成4年の年間賞を決定、1月11日の新年句会で表彰した。最優秀賞は小池しげお氏、優秀賞(得点賞)は①墨作二郎②阿萬萬的・西口いわる④奥田みつ子⑤中川ヒサ子の5氏。

★いずも川柳会は1月17日の新春句会で平成4年度のいずも賞・同友賞の表彰を

行った。受賞者次のとおり
いずも大賞

老残や火宅の過去は問うまじく 伊藤 寿美

いずも賞
年寄りを主役にした九月の絵 小玉 満江

〈同友大賞〉
恐妻の居なくなる日がお怖い 銭山 昌枝

〈同友賞〉
笑わねば傷口深くなるばかり 稲村 三代

なお、両賞の奨励賞は加本義良・今若あき子両氏。

★高槻川柳サークル卯の花は1月22日の新年句会で平成4年の年間優秀賞の表彰を行った。受賞者は①墨作二郎②川島風云児③山本磔

④田中正坊⑤黒川紫香各氏

★NHK学園創立30周年記念川柳大会で奥田みつ子さんの次の句が特選となった

三部経 母は今でも生きてます

★竹原川柳会の第15回だけ

はら年度賞・最優秀作は次のとおりで、優秀作一席に脇本政己、同一席に山内房

子、また、学生の部最優秀作に渡辺剛(小5)の各氏を決定した。

精一杯生きた枯葉に風が問う 森井 一枝

★弓削川柳社は「紋土」1月号に二賞作品を発表。

〈紋土賞〉

子に譲る幾度も修羅を越えた椅子 岡田 敏子

〈弓削川柳社賞〉

芽の出ない靴を磨いている内助 菊池 七穂

★第14回川柳せめんだる誌上大会で次の3氏と三木亜句人・高全ふさの・柴崎昭雄氏が特選句に選ばれた。

世紀末神のシナリオまで狂う 山県 双葉

華やかなドレスあなたもさびしいか 大村美千子

★川柳みどり会は第6回川柳倶楽部の作品を募集している。課題は「風」と「雑詠」で選者は前回第1席の吉田三千子ほか4氏。参加料1口につき千円、締切は1月31日、出句先は愛知県知多郡東浦町森岡字下池569渡辺方・川柳みどり会★澤車楽追悼川柳大会は2月7日午前10時からJR米子駅前米吾で開かれる。宿題と選者は、足・野沢大漁▽送る▽中原諷人▽門金▽送る▽小林由多香▽杖▽本庄快哉▽はがき▽森中恵美子で各題2句、締切正午会費3500円。

★第5回「女の一生」川柳大会は課題「初雛(はつひいな)」「セーラー服」「つけまつげ」「裕足」「衣紋(えもん)」、3月3日締切で募集している。投句は各題2句を縦封筒寸法に書き別に投句の中から一句を自選し、住所・氏名・年齢・所属吟社・柳歴を記入、投句料千円を添え、〒839-01久留米市安武町安武1718-15 的場俊子方ちくこ川柳倶楽部へ。

★第2回朝日中部川柳大会は3月20日午後1時から朝日新聞名古屋本社朝日ホールで開かれる。初めに岩井三窓氏の「川柳の葉緑素」と題する講演があり、続いて「春」「心」「雑詠」を課題とする句会が行われる。

★番傘川柳本社では任期満了に伴い、誌友近詠選者を3月号より亀山恭太氏から岩井三窓氏に交替する。

★川柳研究社は渡邊蓮夫叙熱祝賀会を4月11日午後1時から東京都千代田区の半蔵門会館で開く。会費1万円(祝宴・記念品)で申込締切は2月末日。宿題は重い・春・進む(各題2句)▽出版△

■新家完司川柳集(2)「平成五年」(自費出版・A5判126頁・1000円)先に刊行した「平成元年」以降の364句を収録して1月15日刊行。

■迫口矢城川柳句集「農耕の詩」(川柳噴煙吟社刊・B6判96頁・800円・吉岡龍城序文・270句)

■日下部逸蝶編「上質川柳」堂々と教科書に推す三百句(自費出版・文庫判320頁)希望者は二百円切手三枚を同封、神戸市須磨区北落合5-12-8編者へ▽同人消息△

■島祥庵氏(同人・出雲市)は第25回島根県芸術文化祭文芸部門で金賞を受賞した。重い日も軽い日もある飯茶碗 島 祥庵

▼計報▲

■松永すすむ氏(本名進・本社同人)1月4日、光彩腫瘍のため死去、86歳。告別式は同5日、大阪北斎場で行われた。法名・松寿院 釈進徳居士

▽芳志△

■植山武助氏のご遺族から供養として金一封を拝受いたしました。 川柳塔社

▼訂正▲

■11月号P80上段の10句目「ふる里の…」の作者名「敏路」↓「俊路」

■12月号P84下段16行目「贖罪の最後は弥陀の手に逃げる」↓「…膝に逃げ」

■句集紹介

合同句集『たなばた』

奥田 みつ子

このような、兄弟姉妹、義理の仲も含めて八人の合同句集は滅多にないと思います。

最年長八十一歳の広島県の森川抜智・トシ夫妻から、吹田市の栗谷春子さん、守口市の森川まさお・春子夫妻、枚方市の森本節子さん、そして末子の守口市の結城敏夫・君子夫妻まで、川柳との関わりの深さによるのでしようか、一人一六〇句から五句まで、計八二四句が、青磁色表紙のA5判一八〇頁に一頁五句組みで収められています。

「あとがき」に「句集などおこがましい沙汰ですが、私達も高齢になりました。この辺で何か形にしたいと思ったのです。本の表題は、きょうだい一同と、その家族が集まる、たなばた会から借りました。たなばた会は今年で三十周年を迎えます。会誌もこの夏で二十三号を発行しました。私達は川柳と『たなばた会』をこの後も長く楽しみたいと念

願しています(後略)」と記されています。

八人のうち、若い頃に川柳に少し手を染められた方もあるそうですが、ほとんどの方は昭和五十七年頃から朝日新聞などに柳壇、川柳ねやがわ句会、『川柳塔』誌、翠洋会などで作句を続けてこられたようです。

橘高薫風理事長が、「お祝いのことば」を書いておられます。「森川さんご一族の親睦誌

「たなばた」を頂くようになって久しい。(中略)その本を読むとき、私はいつも遊園地を思うのです。遊園地には回転木馬が回り、瞰覧車があり、ジェットコースターが走る。そして、花園があり、見落とすような処に時計があつたりする。それと同じように、随想、SF小説、川柳など文芸作品をはじめ、写真、絵画作品を撮った写真、クロスワードや、なぞなぞもあれば、漫画のサービスが出る。お年寄りから幼児に至るまでの個性が、一つの舞台で思い切りエンターテナーぶりを示したのしさを振り撒いている(後略)」

皆さんが集まって、写真を貼ったり、手書きした紙を折ったり、糊づけしたり、一冊一冊心をこめて会誌を作ると伺っています。

長姉の栗谷春子さんの平成二年度路郎賞準優秀句「雲に来てひばりはやつと巢を想う」を巻頭に、八人八様の句の味を見せて下さい

ます。

吉祥天のかすかな紅のはなやいで (奥春子)

冷蔵庫にのびのびと桃がひとつある

木曾五木すべて恵みの雨の中

残して逝った薬捨てられるでしようか

鶴と亀年も知らずに生きています (抜智)

万歩計バンドにつけたまま昼寝

よく効いた風邪の薬は酒でした

絵のけいこお世辞言われて喜ばず (トシ)

肌寒くミモザの黄色だけが春

タラの芽の一皿うれし木曾の雨

この時間みどりと犬と私だけ

出生は大阪ですとやや力む (敏夫)

フルムーン渋皮むけた顔と顔

肩車孫と満員バビリオン

椿道どんつきにある土饅頭 (まさお)

奥さんの絵が掛けてある台所

父の日も父が支払うレストラン

なんの話あるのか姉妹よく喋り (奥春子)

皆去った部屋の広さにお茶啜る

鉢植も話しかけると長く咲き

句を作るたのしみだけはあつた (君子)

心齋橋こんな齢になりました

退院の妻まっすぐに台所

大正は藍の浴衣に落着けり

老姉妹どちらにも詫びず仲直り

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

〃

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、い、ろ

(26)

橘 高 薫 風

この号に「誌友制を設く」の広告あり。

「川柳雑誌も満五年を迎え益々読者の増加してゆく事は欣快の至りです。今回誌友制を設け、川柳雑誌半ヶ年誌代前金壹円八十銭以上拂込読者を誌友となし、本社との関係をより密接に致したいと存じ、その芳名をここに掲載する事に致します。何卒新読者をこの際御勧誘下さる様お願い致します。」

とあり、新誌友名に前田伍健氏はじめ十四名が発表になっている。

川柳塔（同人作品欄）への出句者34名
きびだんごこれも生きとし生きる道

矢田冷刀

シューマイの上に梅蘭芳の額
笑わせて去んだ心を知らずして
竹馬を屋根へ凭せて芋の味
外套を腕にかかえし反逆児

住田乱耽

よく動く眼を持つている賢夫人
帰る日か見渡す限り青い空

長崎柳秀

の句に注目する。近作柳樽（誌友作品欄）は
百名近い投句者あり、緑之助・東洋鬼・豆秋

言也・太路・萬楽ら、後に高名の作者名あるも、感銘を与える句は少ない。

光耀抄（女性の作品欄）は8名の出句。

闇の中夜具のうつろを引っ張り 井上信子
アンテナをはずしつつましやかに住み

麻生霞乃

の句がある。

路郎先生は、2月10日から道後二泊の旅をされた。松山支部発会記念句会に出席のためで、橋本二柳子・岩本素人両氏が随行する。

句会も宴会も盛會裡に終り、三人は翌12日今治港から別府へ足を伸ばす。別府支部を表敬訪問のためである。

13日別府からの帰途、菓丸でアキシデント

あり。先生一行に隣していた青年が大分港を出て間もなく投身自殺をする。岩本素人氏が「先生でなくてよかった」と言う。船内しばらくはその話題で持ちきりであったのは当然であろう。上陸近くなったところで二柳子氏の靴が変っているのに気付く。大きさも色もそっくりなのだが、靴紐の手触りで分かった

のである。取調べたところ、自殺した青年の靴と変ったらしい。青年の靴は遺留品として今治警察署へ届けたという。それが二柳子氏の靴であるのだ。それで二柳子氏は家まで幽霊の靴を履いて帰られた。

松山・別府への旅での路郎先生の句は、

道後にて 二句

漱石に子規に道後の湯はあつし

丹前は坊っちゃん団子のぞきこみ

緑丸にて別府に向う

船を忘れるほど人妻の帯赤く

旅 愁

遠く来てあらしの窓に子を思い

地獄廻り

亀の井はまたも楽土へ引きもどし

松山支部句会での軸吟（年頃）

年頃は桜の咲いた様に生き

別府支部句会での軸吟（風）

よく考えることにして寝る風の夜

この月、旅吟だけではなく左の二句を詠む

路郎なのであった。

ロンドンを懐う（二句）

三周忌今はつかわぬ硯石

ロンドンが帰って来るか身重也

逆縁の悲嘆は薄らぐこともないようで、親子の至情を引きずりながら路郎の旅は続く。

老地神壇

原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月25日締切・30句以内厳守。所定の原
稿用紙に清記をお願いします。 編集部

岸和田川柳会

岩佐タン吉報

肩書の恩恵今にして思い
バナナ一本とても幸せだった頃
山形の顔は可愛いさくらんぼ
泣かれては決意にもぶる別れ駅
みかん狩り土産だんだん重くなり
がっちりの基礎へ三代目のゆるみ
年頭の決意実らぬまま暮れる
日本はいい故郷の柿すだれ
重大な決意へ一番鶏が鳴く
きんさんきんさん戀意な人が多くなる
結婚と決めた二十歳のあやふやさ
一点をみつめ決意の靴をはく
果物の艶と妻の手見比べる
お隣へおかずあげたりもらったり
墓石の基礎はしっかりしておこ
戀意でも二の足を踏む保証印
海に沈む夕陽へ男決意する

白光子
ダン吉
こう
ひで
甚一
富士子
康介
愿
勝晴
浪速子
すみえ
一弥
二南
月子
惠空
通彦
萬的

棟梁の流石年季のかんな屑
さも戀意らしくセールス寄ってくる
また三日坊主と決意笑われる
矢面に立てば戀意な顔でなし
基礎になる話は固いことばかり

川柳クラブわたの花

片上

英一報

玉入れの最後の数は空へ投げ
暴力の反対デモへすごい数
猿山はボス争いで数が割れ
よちよちも貝数のうち祝い膳
母の齡数えて惚べ花手桶
竹踏みで二百数える風呂呂上り
歳きけば指で数えている三つ
数の子の数黄金に縁起よし
当てもなくマンションを出る万歩計
おしやべりが口数減って酔いつぶれ
嫁入りに古い着物の数にうち
マイホーム家族の数に部屋足りぬ
あたまた数そろいましたかぎいんさん
多数決 誠心誠意やぶれたり
やる気満々怖いものなし向い風
やる気出せ六十路の恋は胸の内
もみじ狩り雨で海遊館を見る
老楓は萬葉に朝日受けあかく
お釈迦様天上天下もみじの手
すんなりとはめた言葉で甦る
叱るより一言褒める母の愛
やんわりと褒めて女の齡を聞く

文時
さよ子
柳宏子
真柳
狸村
シマ子
美津留
龍襄
剛治
正子
道子
明子
トシエ
ますの
みき子
俊子
しのぶ
喜美子
英一
弘直
隆
その
友甫
一風
初子
君江

展覧会ほめられた絵に人集まり
豆鉄砲当たつたように褒められる
控え目な人が責めくる月あかり
控え目に咲いてたわわに稲の花
皿の数いちまい足りぬお菊井戸

川柳後楽吟社

從野

健一報

空きカンの身の上話を聞いてやる
神様も眠り転げる終電車
燃えつきた父表彰が額で生き
ていねいに二十四時間きょうも生き
中宮寺の彌勒自分の座を見つめ
残されたメモ帳などついている哀れ
苦肉の策裏目と出てから狂い出す
もう泣かぬ渴いた涙に決意みせ
妻描く円周内で飲んでいる
句のものが提げこ機嫌を取りに行く
機関車が松茸を売る駅の秋
残業が無くて賑やか兎小屋
色恋も枯れて悪夢の風ばかり
霧囲気が好きウーロン茶で乾杯
旅一人ラジオと一日仲好しで

川柳塔おっぱこ吟社

木村

明人報

千枝子
曉子
幸枝
春子
章
鬼遊
草風
拓治
哲郎
柳五郎
博友
美智子
桃風
青銅
正秀
たけ志
道博
金吾
吟平
佐加恵
照路
迷親子
ひかり
マサエ
よしみ

菊が好き亡母の声する花畠

ふる里の山河は今も生きてゐる
今年こそ今年こそはの菊花展

活け作り鯛の目こちら睨んでる

退職をして靴の紐ゆるく締め

指名受けシルバー出勤趣味と欲

出品の間近過保護の菊が枯れ

ありのまま捉えて嘘のない鏡

我が身体いとは煙の草はのび

また毛布出して着て寝る寒気団

雨の音耳に入ればホラ一句

日本へ金をばかけて密航す

川柳化粧櫓

植村客遊子報

肩書きが無いから名刺用がない

脚線美見とれ思わす立ち止まる

すがりつく程の美人の妻でなし

敬神の額は律義な亡父の筆

くすぶりが隅へ隅へと寄ってくる

振り向けば間違ひだらけ過去を悔い

逆境へ日銭稼いで糧とする

川柳の字を忘れての祭にて

赤提灯愚痴も拾って終電車

望みだけ高く持って颯爽と

すぐそこの煙草屋までも自家用車

赤い飯祝うて女になりました

ミニスカートへ度たび目線バスの中

丹精に報いて菊花秋飾る

女だから泣くなど叱る若い母

いさむ

正雪

放任

明人

白柳子

ふみ

吟笑

伽名子

チカエ

スミエ

小葉実子

迷貫

岳詩

葉香

悲雀

雨雀

奮水

遊峰

治夢

はる女

嘉

美代

好花

春蘭

姫女

はる子

一典

どうしても勝つ気六法全書繰る

東大阪川柳会

森下

愛論報

手話の指一本ずつに神宿る

道祖神さびしきときもうつむかず

満ち足りて眠る枕が二つある

よく眠れました朝から嘘をつく

あの本を読んで働く気になった

土に生きた土の句のまま果てん

豊作の太鼓に父の音がある

赤い羽根案山子も付けて秋実る

阿吽の真ん中へんにある絆

いただいたものをかえてして行く絆

ふるさに残る民話の橋がない

母知らず子守歌だけ残る耳

白い船あしたの海図しかと持つ

若い夢乗せて船出の過疎の島

妻の船ひょうたん島へ行きたがる

一人旅ドン キホーテを懐に

独学がみんな良書にしてしまふ

神様のいけず妹先に嫁く

久世川柳クラブ

二宗

吟平報

割りかんの一人前は飲んだ酒

咲く花も散る花もあり秋深む

野仏に何を話すか赤トンボ

夕焼けにとける夢なら忘れよう

電話代気にせぬ娘の長電話

松茸も減って秋山ない魅力

客遊子

欣之

作二郎

壯之助

幸子

外吉

湖風

美幸

愛論

みえ子

美千子

砂輝守

醉虎

久子

武庫坊

天笑

度

隆

雄次郎

半仙

よこしまも欲も許さぬ仁王の瞳

要人の警護瞳ですぐわかり

嘘のない証 瞳が澄んでいる

乳房やる母と子の瞳に神を見る

燃えている瞳に映る影法師

老人も夜の団樂の輪になごみ

寝たきりを家庭看護で温め合い

本当の美人素顔のまま出かけ

岩美川柳会

羽津川公乃報

いそいそと帰り支度をしてる奴

万歩計つけいそいそと朝歩き

縄のれんいそいそ潜る恵比須顔

いそいそと天国行きの切符選る

いそいそと天国行きの切符選る

佳句地十選 (1月号から)

浅野房

スベアキー渡し眠れぬ夜となる

ひげ刺つて夜の誘惑買ひに出る

松茸を食べた食べたとかやかしい

首の皮一枚残しまだやる気

本気だと言えずじまいの遠い人

あなたでも突然死ぬと惜しまれる

おだてればおだてにのつてくる女

善人の仮面が税務署で落ちる

誘惑と気付かぬ振りて歩を合わす

ブラン練る楽しみがある時刻表

甫正

美恵子

すみれ

秀香

恒心

吟平

邦人

賛平

たけし

喜与志

嘉津江

八千代

正坊

正一

透太

度

凡子

完司

しげお

美磯

年代

風云児

いそいそと旨いラーメン食べに行く
いそいそと行つて疲れる参観日
根まわしの金いそいそと撒いている

いそいそと誘惑される秋の女
銭湯の手桶いそいそ客を待つ

仲人がいそいそと来る吉報だ
いそいそと出かけた先に異がある

いそいそと男が化粧する怖さ
寄付話だすといそいそ帰る人

俸せがいそいそこつち向いて来る

三幸川柳教室

三宅

保州報

近所まで宅配便の来た期待

熨斗袋虚勢張り合う隣組

目と鼻の先で縁づき知らなんだ

近所から椅子も出てくる日向ぼこ

天高く隣の人も肥えている

ことの外木屋匂う近所の計

忘れてた味覚が騒ぐ快復期

タイエツト味覚の秋へおはれそう

追込みの孫に届ける秋の味

早生みかん甘さで勝負するつもり

味覚にもついてしまった懐古癖

添うて三年妻の味覚に慣らされる

味覚だけひとり住む身の薄化粧

秋茄子の味覚にひたる嫁姑

出勤の靴へ一言かける癖

一言を託びず平行線でゆく

一言が潮時となる腹を決め

公乃
照女
芳江
螢

善幸

美恵子

美代子

忠良

大漁

單車

和子

由梨

かなめ

道子

和貴

茜

百合子

(幸)子

幸子

芙美子

靖子

みね

親路

鉄治

公子

昭枝

ひと言が生命を救うこともある
一言の愚痴を疊んで円く住む
一言で足りる男の受け答え
一言の呪縛をほどく秋の海

不況風もろに受けてる父の靴

秋暮れる風の便りもないままに

穴開きのジバンはいて風を切る

男なら風に逆らう矢を放つ

脳天に風穴欲しいどん詰り

波風が消えた渚の老夫婦

風の私語噂ばかりで明け暮れる

平穏は近所の色に合わせとく

東大生も暴走族も居る近所

南大阪川柳会

金井

文秋報

大欲小欲つづらの角が剥けている

ライバルの死角で面をつけかえる

息継ぎをしながら嫁と歩を合わす

多彩なる暮しへ白はまぶし過ぎ

四つ角できつちり盲導犬とまる

秋は多彩にして私を誘い出しにくる

自画像はせめて多彩に塗り上げる

鮮やかな紅だと思ふ仲直り

気の合った妻のタクトに身を委せ

意識して嫁と姑が気を合わせ

仲違いすぐに忘れる友ばかり

少しだけ赤字になって幹事埋め

過労死になれば差引きえらい損

実年の恋差し引きを考える

桂香
さち子
高夫
朱夏

孝子

正雄

よし子

保州

章子

恵美

千秀

博章

町子

作二郎

凡子

楓楽

千里

萬的

智子

寿美

重人

柳宏子

友美

潔

直子

文秋

柳伸

凡人の背中合わせに善と悪
長い目で見て差引きに手を打とう
仲直り男の面子邪魔になる
潮時を考えている仲直り

多彩さの中に自分の色をみつけよう

出演者多彩で芸の幅が無い

差引けば損をするから別れない

たくさんさんの彩で私の秋とする

直角に曲がる几帳面さが怖い

顔ぶれが多彩会議がまとまらず

おせんべい二つに分けて仲直り

おごる義理ないときつちり差引かれ

仲直りやつと心のしこりとけ

貴方には差引き借りが出来ました

年輪を重ね言葉の角がとれ

恋をして多彩な服を着こなそう

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

初春の門出を祝う狐かぶり

湯の花で温泉巡り三ヶ日

馬齢また重なるだけの餅を食べ

足元を固めて喜寿の坂登る

柳友の賀状が好きかな傘寿かな

カレンダーしり顔して付いてくる

酉年の初鳴きを聞き初詣

秋刀魚焼く匂が溜る路地の暮れ

借金が肩にくい込む歳の暮れ

暮れの街別れた妻と鉢合わせ

孤児が見た母国の暮れは冷えていた

勝美
恒明
悟郎
いくの

凡九郎

眉水

トミ子

文子

庸佑

公一

文江

頂留子

シマ子

智久

シメ子

久子

十四郎

弘治

定人

いわお

向西

キク子

尚利

紫香

夢之助

石舟

鹿太

日暮れには子供の声の響く街
木枯しが出不精にする年の暮れ

はたる川柳同好会

井上

直次郎

検査して何処も悪ない肥り過ぎ
父さんは甲種合格自慢をし
母見舞う窓に熟れゆく柿の色
頂点に立つて噂の人となる
長くても次の事件が起こるまで
定年という人生の秋深む
言い訳も付け加えてから噂にし

夢を盛る皿にはお金惜しまない
早にお経お布施が不足かもしれぬ
金離れの好さに釣られて落し穴
金次第そうはさせぬと世論沸く
立ち入って聞けばお金の要る話
残業カットやりくり上手な妻がいる
立ち読みで星回りみる初暦
初ごよみ女の旅のすぐきまり
カレンダー事なく過ぎてあと一枚
カレンダー捨ててに惜しい表紙の絵
暦にも未練が残る大晦日
夫用妻用とありカレンダー

明光
博史
眞郎
馬洗
直次
早苗
敵子
澄江
久江
方郎
宣司
薫風

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

青い瞳も同じいで湯宿浴衣
にこり湯に女がかくす嘘一つ
露天風呂一人つかっている夜更け
幼顔残したままのあの別れ
幼友同級生の妻つれて
ガキ仲間昔も今も俺お前
少年の頃の想い出おさげ髪
どの党もやかましいだけサル年の
騒がしいホームに友を待つ孤独
一円貨誰も拾わぬ梅田地下
清姫の魔性に心かたむく日
魔女熱望幼き頃の夢でした
園のバス声から先に降りてくる
言い訳の嘘があまりに下手すぎる
人寄せのゲストをひとり呼んである
血しぶきを浴びぬ外野がやかましい
やかましいと怒鳴って男負けている

達子
千鶴子
春子
昌子
紳一郎
忠雄
与呂志
清芳
あずき
弘直
能子
慶子
英洋
曉子
千枝子
留吉
光子
香住
とよ子
シマ子
欣史子
田実子
宣司

包装紙省エネですと節約す
丁寧包んでノルマからはずれ
思いやり包み弱者で耐えている
包容力ゆたかな彼に娘を託す
よろしくと包みがそつと囁いた
消毒の移り香包む退院日
旅で拾った宝を包み持ち帰る
すきな人の思いを胸に包み込む
我儘を包んでやればこぼれ出す
子を包む思い出だけがあかかと
包まれて包んで温い輪ができた
酒瓶を粹に包むは難しい
やんわりと包んで武器と気付かせぬ
常識で本音包んで生きている
ふるさとの包みが秋の亡母を抱く

はびきの市民川柳会

榎本

吐来報

検査した日から秒針定まらず
掃き寄せた落葉輪廻の春を待つ
うす化粧しても噂になる田舎
ここだけの噂を壁が聞いている
噂とぶ頃の私は花だった
口をへに眉間縦縞検査官
検査室慣れてしまえば恐くない
検査室訝えぬ白衣が気にかかる
暮らし向き検査はいらぬマイペース
隠しごと尾ひれをつけて飛んで行く
気にせぬと決めた噂が気にかかり

愛子
綾子
瑞穂
アサ
和子
正義
幸子
保子
英子
正直
悦男

川柳塔きやらぼく
政岡日枝子報
病床上にたまる葉の包み紙

花子

医者も飲む風邪薬には玉子酒
ヨガつつけ長生きの糸のはして
天抜けて秋締め括る柿ひとつ
青春の絵を長鳴が取りもどす
古傷も見せて叙歎がご挨拶
酒好きは親ゆすりだと太い顔
酒好きな父がわかつてきた娘
幾山河越えて今宵もうまい酒
一本の晩酌わけてのむ夫婦
吸殻をつんで作家はさまになり
吸殻も税金タツブリついてます
父親の肩書借りている釣書

保子
亜弥
夕子
玲子
正子
てい子
千春
のりこ
高代
日枝子
荒介
恵子
千代
松子
瑞枝
岩信
キミ子
たけし
悦子
隆
りつえ
吐来
みつこ
晋
夏秋
敏
利武

釣書がたらい回しでやってくる

肩書を並べて釣書背伸びする

カタログのように釣書がどつと来る

高望みする釣書でまた戻り

釣書には小姑一人消えている

釣書に書いた重さへ減量中

アメリカで大阪弁のショッピン

髪を染め青い目玉とタイトする

アメリカへ一寸行きますバスボート

追い越されそうでアメリカへそを曲げ

四つ角の信号待ちで知るニュース

四つ角で一寸思案の赤とんぼ

四つ角を無言で捌く信号機

四つ角に募金を立たす福祉国

四つ角で山車が揉み合う秋祭

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

寝てる間に長崎でした深夜バス

バスアーケーキ祖母は赤飯炊いている

手造りのケーキに身の上話盛る

恋よりもケーキ作りに無我夢中

国ぐるみケーキを食べて祝うイブ

ギャル指定ヘルシーケーキは野菜入り

マスコミに踊るケーキの整理券

ありがとつみんな心配してくれる

老婆心また鼻先で笑われる

心配をかけたと父の追伸に

美浜原発安全だとは思つても

昭平

昇

美代子

昭子

志津江

泰子

繁男

さいち

敦子

シマ子

たかし

伴子

絢子

かつみ

希代司

志洋

柳宏子

シマ子

憲太郎

夕花

隆

宏子

柳伸

三男

覚然坊

美幸

春子

心配の種がひろがる子の育ち

心配はうっかり花を切り落す

飢餓の列心配してる肥えた蟻

土俵ぎわ人柄だけのこつてる

人柄が良すぎて今も平のまま

人柄を互いに抱いて逢わず居る

望郷へ並ぶ切符の徹夜組

望郷の思いそぞろによせる波

望郷の想いのつるあかね雲

郷愁をそそる屋台の串だんご

望郷の糸をたぐると母の詩

望郷に駆られ泣きたい冬銀河

望郷の岬に風が鳴るばかり

望郷の声やわらかにてまり唄

寝返りの闇に故郷が見えてくる

川柳さやま社

遠山

もう誰も騙しはしない柿の種

手抜きせず夫の帰りを湯気が待つ

旅支度もはや一つの旅疲れ

どよめきへ静かにたたむ舞扇

一枚の葉書に楽しさ盛つてある

あゝ人間楽と言つ名にあこがれる

灯を消してそれから旅の語が弾む

楽しさせず定退を待つ村の役

ライバルの弱味握っているゆとり

手鏡に笑顔が響く今日の幸

長持目出度い酒によつ響き

海峡へ孤児の叫びはおさまらず

和子

一風

美津留

年人

恭昌

悦郎

勝美

弘直

朝子

頂留子

洋

正子

作二郎

欣之

度

可住報

純子

とよ子

恵美

貞子

つや子

靖子

とみ子

百合子

テル

和子

ヒサ子

富美

寂しさは落葉の中へ埋めておく

一円貨落ちて勇氣を試される

愛さめて深ふかと掘る落し穴

疑問ふとりんごが一つ落ちてから

尼崎いくしま川柳会 春城年代報

本人は夢だと言つが実は欲

夢いっぱい盛つて育てた子が背く

絵日記に子供の夢が弾けそう

少年の夢真直ぐな線を引く

そば枕まだまだ長い夢つづく

夢話す時のアンタを信じよう

胎動へ母となる日の毛糸玉

胎動に免じて俺が米を研ぐ

風の哭く夜はおんなの火が動く

能舞台足袋の白さがよく動く

おいお茶動かぬ夫と半世紀

水鳥が来てよみがえる冬の川

秒針の動きに生きたる音がする

寒梅の試練に堪えて春動く

リモコンで僕を動かす妻の指

宇宙服青い地球を見て戻り

地球儀の赤道を這う冬の蠅

国境の網の目細くなる地球

地球儀の裏側にある偏頭痛

フロンガス溜めて地球も病んでいる

逆立ちをしたら地球が持てるかな

地球儀のバランス崩す酸性雨

吉太郎

園歩

武庫坊

英子

萬的

栄

石舟

勇次郎

正治

年代

行隆

尚利

正一

鹿太

芳子

凡九郎

真柳

薰

すみ

昌一

福一

可住

文平

芳郎

市三

持病なら仲良くつき合おう末長く
天に星町にビーポー聞いて寝る
六十の手習い三日坊主が危ぶまれ
喪のハガキ出して馬券を買いに行く
一葉忌文学少女老いにけり
反古にするカレンダーもある年の暮れ
本当のことしか言わぬ話下手

川柳はまでら

井上

喜辭報

盃の中で揺れてるブレッシヤー
血圧が上っているかもブレッシヤー
野良犬にかりすぎたかブレッシヤー
良心が痛む心へブレッシヤー
ブレッシヤー掛けられて出る会議室
肩書へ付いてる邪魔なブレッシヤー
ブレッシヤーあるので野党もにぶりがち
張り切ると肩へ冷たいブレッシヤー
背伸びする心の奥にブレッシヤー

静岡川柳塔

永倉

僕川報

偶然に出逢い握った手の温み
除雪車を笑うが如く雪が降る
はるかなる旅へ後悔などしない
うな井の匂いで急に腹が減り
不揃いの芋も仲良く抱かれてる
団欒の鍋へビーポー鳴って来る
着飾ってたこ焼を食う娘と出会う
夫癒えて我が家に春が訪れる
パブル以後ポーナス薄く肌寒い

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

アルバムのはほ笑む父が語りかけ
釣り人を橋の上から見る呑気
病いへ持ったマイクに弾み付き
はらみ猫五匹生れて軽くなる
軽い子と思えど世間では社長
年金の軽さに耐える妻の知恵
隧道をぬけると芋を焼く匂い
通帳が溜息をつく年の暮れ
十二月雑用ばかり追って来る
出雲路で神話の風と巡り合う
羽ばたきの西の神話をのぞかせる
縋る目に誠意で返す聴診器
りえチャンの引いたカードは日本一
内緒事テレホンカード知っている
二次会の上司のカードあてにする
翔んでいる女の指のカードキー
銭落ちる音は聞かないテレカード
愛情に報いてくれた蘭の花

京都塔の会

松川

杜的報

数々の祈りをひょうたん絵馬競う
夫々の命の色で舞う落葉
後白河の史実しるのて寺の句座
後白河の野望果てなく紅葉燃ゆ
京の味人の温みと共にある
品定めしながら食べる普茶料理
戦国の大黒さまもよろい着る

戦争の空しさ耳塚血天井

英子

百度石女は巡る何時の世も

英子

慈悲のお顔で楽しい食事なめられ

英子

ご免ねと阿弥陀に詫びてする食事

英子

お精進よばれ仏とさしむかい

英子

日だまりにゆつたり座る法住寺

英子

晩秋の風へ耳塚何を聞く

英子

乙女チックな封書舞い込む秋なかば

英子

バブル砕けてビルに封する秋の風

英子

虫封じ親子で泣いたその昔

英子

曲げた手に師匠の扇子飛ぶ舞台

英子

信念は曲げずどたん場切り抜ける

英子

正常に曲げるハンドル父が持つ

英子

実印は少し曲げて押しておく

英子

少し迷って少し曲った線を引く

英子

地下街を曲って謎がまだ解けぬ

英子

着丈には娘に負けてます晴着縫う

英子

寸法がちがう夫婦で仲がよい

英子

寸法は鯨だけしか知らぬ老母

英子

小便僧の寸法とってる冬仕度

英子

身勝手な願いもまじる絵馬の数

英子

寸法通り付けたつもりの棚が落ち

英子

裾一寸縮めようかと母笑う

英子

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

生かじり問い詰められて泥を吐き
生かじりいきがって食うふくの肝
生かじりそのうちメッキが剥けそう
病む友を励ます嘘です赦される

ちよえ
はるみ
歳栄
智重子

あの人の遺髪私のマスコット
生かじりフランス料理へ手も出せぬ
生かじりばかりで本論に入れない
恋に気をとられ充電置き忘れ
喋りたいような目をするマスコット
マスコット共投げ出された車事故
充電をしましたじっとしておれぬ

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

裏切りを責める哀しい目のいろだ
父が敷くレールの継ぎ目に愛がある
線路つく噂で地価に羽がはえ
さざれ石集めて巖にした男

好きだから嘘は責めない事にする
北の果て流水みたくなる線路
飽食の果ては肥満に責められる
線路づたい亡父の温みに逢いにゆく

吐いた唾吞めと貴方に責められる
線路など呑と無からと恋列車
子が嫁き線路を大きく引きかえる
ふり向くな責めは私が引き受ける

寝返りをうち良心に責められる
そのときは一人で責めを負う覚悟
人生の重さを知っている線路
よく遊ぶ妻だと責める影法師

前責めも後責めもある愛の機微
あの時の自分を責める日記帳
責めもせず握る父の手大きくて
責められる覚悟で男意地通す

三男 光代 紀久子 金魚 好笑 和成 結実 登志代 政一 佳代子 武雄 加代子 翠子 正博 輝子 吞天 忠 信子 信秋 栄美子 克子報

打吹川柳会

奥谷 弘朗報

底なしの沼へつながる川がある
間違いを責めると溝が深くなる
大根の芽が出て少しだけ豊か
鮮やかに自分史描きたい筆もつれ

ほどほどの目盛りを外す古希の酒
ナホトカの歌が臍にまだ刺さる
念仏の風おだやかに秋深し
お休みがふえた分だけ昇給し

日々好日小なき罪を抱いたまま
人が寝たころ起きる悪いくせ
馬の耳に念仏姑の処世術
事故現場守り袋が落ちている

誓う愛親の頑固が仲を裂き
將軍の陰で知恵者が金集め
酒の座になると主役が入れ替わる
招かない老いが足からやって来た

赤飯のわけは近所が知っている
三千代 千寿子 三枝子 豊太 愿 稚代 白光子 紀美女 紫香 克子 弘朗報

城北川柳会

吐田 公一報

古女房残り毛糸のちゃんちゃんこ
もくせいこの香に誘われたよき旅路
紅葉にふと箸止る京料理
おでん屋の灯り流転の話し声

下戸の夫に浮気の苦勞つきまとい
下戸一家祖父は手酌で孤独感
もつれる毛糸をほくす母の膝
血圧が沸騰しそう永田町

PKOちよつとてれてるベレー帽
年の暮れ粗品程度を持ち歩く
芋粥に秋の胃の腑が満ち足りる
取り柄ない女で粗品のように扱われ

血圧が気になり箸がすすまない
秋深し老後を友と語りつつ
血圧を忘れ手の出る旬の味
幸子 きみ子 玲坊 勝見 良二 正雄 よしえ 信子 松盛 野草 小生 弘朗

あい子 八重子 だし 倫子 登美子 昭子 史風 純子 政子 千世子 春蘭 行子 寿美礼 秀夫

カレンターの印今年の医者通い
一筋の毛糸で夢を編んでいる
真に受けた粗品が生んだある誤算
お天気に触れて本筋言いそびれ
粗品でも心のこもったプレセント
輪の中で群れているのは雑魚ばかり
深入りをしすぎて出口見失い
りんご赤く熟れて夢見る年になり
恋人の手が柔らかい水たまり
下戸なりに明日を信じる猪口を乾す

翠洋会

井上

照子報

佐津乃 満津子 達子 典子 久留美 白峰 頂留子 柳影 静子 公一

いい思いした後やがて裏が来る
酔わされてやがて本音がぼつぼつと
抱持ちやがて真打芸の虫
窓際はやがて俺にも順がくる
やがて春孫が待っているランドセル
バイク熱やがて大人に脱皮する
やがて山に帰す子ぐまを慈しむ
やがてはひとりどちが先やら老いの膳
ゴミの山やがて不幸が訪れる

高槻川柳サークル卯の花 辻白漢子報

拓生 登志子 絹子 正雄 恭昌 宏子 さと美 千歩 鬼遊

もつと風吹けふけ土手の親子風
嫁が来て同居別居で揺れている
相談へお好み焼きが焦げている
赤ちゃんに可愛い指紋出来ている
銘水で京の豆腐の味をまし
平凡に生き指紋など気にかげず
ポケットに他人となつた鍵の音
誕生日もつと飲むかと聞いてくれ

豊中もくせい川柳会

田中

茶の子 瀧小 薫 栄 真柳 石舟 諷云児 白漢子 正坊報

注意して入歯がたべる雑煮餅
要注意妻が鼻歌唄ってる
注意書小さくあつた落し穴
注意無視風船男消えたまま
注意して家を出たのにまた不安
終着駅あかの他人を揺り起こす
あわび獲り不漁の伝馬の櫓がきしむ
廃校のきしむ廊下も夢の跡
鍵っ子にブランコきしむ夕灯り
きしまないスローテンポの生活です
屋台骨バブルのついで軋みだす
てっぺんの椅子きしまだす不況風
ベビーベッド誰に似たのか美人です
断わったわけは美人過ぎるから
美人薄命やはり美人と言われたい
娘はやがて嫁ぐとわかっていたけれど
いつの日か笑って話す日もあろう

兼治郎 楓 楽 綾子 佳秋 叔子 ひろ子 東雲 友美 希久子 蛙 石舟 正坊 みつ子 宣司 光子 久峰 英一

一日一善こぼれた情け拾てくる
わだかまりあつて聞き耳たてている
落葉焚き疎水運河に秋くれる
伝言板もつとくわしい字が欲しい
花嫁の父が一番浮かぬ顔
嫁だとは思っていないうちの嫁
公園の夏嫁がクリーム買ってくる
川柳を嫁がときどき批判する
プラタナスの街で拾った夜の詩
一粒の米も拾うて明治です
嫁さんが何時も話題になるベンチ
ぎんなんを拾うと温い街の秋
猫舌が妻の里へも知れ渡り
磨り減った指紋かがやく文化賞
もつとつと励んで生きて来たカラス
実印に勝る効果の有る指紋
ちよつとした間違いですと岩田帯
辛いとも言わず指紋が消える職

スミ子 節子 静江 稲子 恵美子 正坊 春風 紫香 萬的 杜的 芳子 英子 しげお 武庫坊 年代 二南 波留吉 冬葉

私なら此処に居ります咳払い
一生を黒衣で終る芸の虫
還暦へこころ貧しく黒人靈歌
雪焼けの顔が並んでいる初出
濃い墨が意地とがんこを盛っている
黒すぎる髪でカツラを見破られ
寒い日の冬彦君はよく転ぶ
マネキンが転がっている不況風
通帳に父の転んだ跡がある
即席の二人三脚よく転ぶ
赤ん坊の知恵は転んだまま遊ぶ
法律はどうあろうともPKO
悪知恵を育てる法律だってある
法律でさばかれ被告罷がのび
法律は考えないで葱作る
法律で攻めると弱い公務員
責めないでおこ夜警のあくび癖
グループで肩のこらない酒がよい
寸刻も手休めならぬ砂時計

杜的 芳子 薫 石舟 武庫坊 明光 路児 きく子 田実子 国公 紫香 慶子 ただし 白漢子 英子 正坊 しげお 福一 悟郎

ご破算を知らずカードで破産する
顔見世に行く約束は五年ごし

週刊誌先に動いて離婚沙汰

気ぜわしく師走模様が駆けて行く
ありがたう口ぐせになり母老いる
駄洒落など通じぬ不況の十二月

川柳塔まつえ吟社

恒松

ああ師走八十路の母の糸車

師走ですイルミネーション見るゆとり

お隣の落葉はいてる師走の日

気持ちだけ先に走っている師走

しなかつた事を悔んでみる師走

声かけたままで別れて行く師走

箸袋男の計算聞いている

お隣のボーナスまでも計算し

割り切れる計算通りでない世間

目の前で計算ばかり女達

計算の下手な女を憎めない

お隣の計算ばかりして嘆き

農に生き農終身に果つる土

ローン終えやつと我が家の城となる

花道のないまま終る父の肩

仕事終えまっすぐ帰る家がある

木の実落つ音の孤独に秋終る

気がつけば終る申年あとわずか

ささやかな夢がだんだん実を結ぶ

病む姑がだんだん小さくなって

だんだんと姑の苦勞が判つてき

早苗 博史 吉太郎 一笛 富子 萬的 米子 邦代 延子 一葉 ちかし たつみ 祥庵 茂美 きみえ 満江 秀子 幾子 芳子 義良 登志子 清志 静恵 桂子 芳枝

だんだんと里の便りも遠ざかる
だんだんと妻のペースにならされる
出世してだんだんふえた酒の量

凝るもよし女房忘れた山頭火

凝り性な男でどこか抜けている

凝り性はその道だけで勝負する

凝り性が鍋をまぜて小半日

凝り性の薄着が風邪をひいている

凝り性の上に頑固で一直線

川柳藤井寺

高田美代子報

お喋りのくせにオシッコが言えず
愚痴一つ胃のまん中に停止する
キツチンと名を替えてから嫁がやり
好きな娘がいるので続くアルバイト
こんな町こんな所に銀座の名
同じ月眺めて母と長電話
杖の要る齡が貰った万歩計
真似してる訳ではないが母に似る
真似しても出来ない母のにぎりめし
マネキンを真似た衣裳で落ちつけず
真似をしてみたが財布と思案する
京訛り甘い言葉の下心
泥の舟承知で乗った下心
はいはいと妙に素直な下心
下心なくて議員になれますか
下心あるから化粧念を入れ
豊作へ霜も一役かっている
お互いに霜下りる頃許し合おう

みえ 太泡 静江 長三 鶴丸 友子 与根一 叮紅 修六 たかし 志洋 淑子 トミ子 晋 昭子 キミ子 吸江 柳太 三郎 和夫 射月芳 美房 利武 作秀 寿美子

盆栽を仕舞い忘れた今朝の霜
霜の朝ひと掃きごとに冬の音
霜柱ざくざく踏んで往く別離
霜柱とけて伝わる地の歡喜
霜柱立たぬ都会の曲り角
風の日も霜の日もあり花時計
少し乾いた霜が月曜日の朝に
霜月の柿もおんなも熟れている
霜ふんであすは他人となる二人
キラリ陽を返して無言霜の道
濡れ落葉驕りを霜に裁かれる
父だとも母とも思ふ霜除けの薦

庭いじり午後のタイムの早い秋
退社時間俄然男は燃えてくる
披露宴出たら戸惑う午後三時
長くなる影に追われる農繁期
切れそうな絆をつなぐ糸電話
にきびボツ鏡と対話しながら
脇役になつてしまつた玉子焼
仲直り傷付け合つた後始末
どうしても描いてもらえぬ父の顔
針千本孫に吞まされ解く財布
ままことの約束忘れ嫁に行く
安樂死今約束をしておこう
約束の小指が炎える初デート
山男山の高さに満たされる
子育てへ最後の山が高すぎる

川柳高知

川竹

松風報

智久 与呂志 宗一 政代 悦子 一屯 公輔 透太 紅月 美代子 三夫 森子 竹萌 千鳥 圭風 菊坊 朱野 春枝 千恵子 さち 幸泉 功 快風 幸 かず子 佳風 京子

ストレスを溶かす笑顔で君が来る
ストレスを捨てる大きな窓がない
疑いのストレスを胃に溜めている

川柳たけはら

森井

青居報

夢見てる私ホワイトクリスマス
木枯らしが吹くよ私の心にも
小児病棟みんな上手に鶴を折る

小史 千枝
中史 子

息子もはた不思議ではない五十肩
二歳児がビタミン剤を飲めと言っ

愛子

幼馴染生きてたのしい久し振り
小遣いをやると手の鳴る方に来る

清水

減塩をかこつベッドのしじみ汁
野仏にすくと秋の陽が沈む

栄恵

裏がわも見せて男のよい器量
雑兵に徹してみよう窓の際

静佳

一日のストレス捨ててる仏間の灯
そのことは又にしようとはつとかれ

喜久恵

年金の支給日は目がまいそう
クレーター起こしてみたいうつの日よ

浪子

さよならと言ってるように枯葉舞う
ふるさとを壊してゴルフ場がくる

房枝

コスモスはきつと無口でがんばり屋
街角の花に笑顔をもらう旅

白狐

人気力士が真近に見える秋日和
マドロスの足から先に老いてゆき

比呂子

風冷えて来たから消化剤を買っ
針千本の指切り孫が念を押す

夏喜

若いなあ夜コーヒーを飲んでいる

美佐雄

一京
艶子
螢

神の山神の焚く炎かななまかまど

不朽

秋の部屋へんに落ち着く広辞林

静風

逃げた魚は夏の日のこと柿をむく

静雨

結局は女房と二人仏と二人

政己

雨の日の一日紙魚になるもよし

千年枝

弥陀まかせいい気なもののよ罪の日々

正朗

むらくも川柳句会

秀子

続柄書いてめでたい返事待つ

義良

いいことが続き心を引きしめる

雀踊子

老いて尚明日へ続く夕陽抱く

はる代

漁火が続く生甲斐海にある

百代

笑い顔つづけて米寿越すつもり

ヤス子

息をのむところで続きまたあした

幸夫

格式を守り続けて過疎に老い

久仁

早食いの胃腸につけが回って来

島子

年忘れ笑顔が揃う句座楽し

美恵女

もう一度続きがみたい夢を見る

朝子

ふる里へ燃える夕陽が続いてる

延子

続編に嬉しい事もある人生

芳子

停滞の車がつづく帰省客

明朗

川柳大阪

高須賀金太報

姿より香りで生きる花もあり

哲流

泳ぎ下手末席で居る箸枕

亮太

定年後妻のいびきが怖くなる

希久志

終止符をうたれそれから弱くなる

しげお

松茸が一切れほどで秋終る

比呂志

若者の文字アに濁点打ってあり

川童

折れた矢の捨て所なく縄のれん

雅巢

孫の顔先す母が折れ父が折れ

本蔭棒

骨折った甲斐がおいしい酒にする

美津留

泰宏

鉄心

与呂志

重人

我勝

一步

笑風

洛醉

金太

逆転の笑顔太陽へ双手

冷え込んで日本酒ぐんと味を増し

金太

▼おことわり▲ 紙数の都合で各地柳壇の

一部を次号送りにさせていただきますので

ご諒承ください。

(編集部)



松永すすむさんを悼む

米田 恭昌

松永すすむさんの死去の報には、この人を知る方は皆おどろかれたと思う。八十路も半ばを過ぎて頑健そのものの方であつたから。私も丁度地元の柳誌に「長寿に挑戦」と題して、『斗酒なお辞せず、両切りピース一日四十本、お洒落でかくしゃく、さすが観世流の能楽師』と小文を草した矢先だつた。

ところが昨年十月末、白内障手術のため入院されたところ、転移性腫瘍が発見され、片眼失明、半身不随、脳にも腫瘍があることが判つた。当時、ご本人はまだ食欲もあり、見舞いに訪れた私を喫煙ロビーへ連れて行き、話しながら一服を楽しみ、看護婦さんに叱られたこともあつた。そんな豪気なすすむさんも日に日に弱られ、ベッドで煙草もないのに指で吸う仕草を見るのが私には哀しかった。

すすむさんと私の出会いは、昭和六十一年春NHK川柳教室に入門した時で、親子ほど歳は違つても同期生であり、柳友として家族

ぐるみで親しくして頂いた。教室が終ると皆で食事、そして喫茶といういつものコース。氏はコーヒ―に砂糖、ミルクを三、四人分もドバツと入れて飲んでいたことを思い出す。当初、物おしする私を句会へ引つ張って行き、ご自身も本社句会で皆出席賞を取られたこともある。句会では自分は全没でも、私の句が抜けると「よかつたね。おめでと〜」と心から喜んでくださるすすむさんだつた。

翠洋会にも一緒に入会し、いつも隣に座つて二人でブアカと煙草を吹かしていた。ある日、柳友仲間との話の中で、「川柳をやつて何が一番よかつたか」が話題に上つた時、すすむさんは「女の人たちから幼友達のように。すすむさん」と呼ばれるのが嬉しい。それが楽しみで句会へ来るんや」と話しておられたのを思い出す。

お酒も好きで、ずいぶん一緒に飲みにも行き、「もう十年早く君と出会っていたら、も

つと楽しかつたのに」とも言われていたが、ご家庭では盃を手に煙草をくゆらせながら、シャンソンを歌う奥さんを優しい目で眺めておられた。ご夫婦仲は別として、ある事情で家族には恵まれなかつたらしく、今、合同句集『すいよう』を繙いてみると、陽気な中にも寂しい心の奥底が垣間見られ、ジーンとくるものがある。

消そうにも消えてくれない過去の罪
白魚の小さい黒い目がかなし
恥多き事のみなりし我が生涯

しかし、川柳を始めて足掛け八年間が、氏にとつては最も充実した晩年ではなかつたかと思ふ。とりわけ最後の一年は、夫人同伴で何回も旅行を楽しまれたそうだ。そして昨年夏、奥さんが乳癌を手術され、退院間なしの十月、ご自身の入院で奥さんに看護されることとなつた。それでもお心遣いからか、三か月間の入院中は何一つ無理を言わず、正月三日日を過ぎた四日午前六時十五分、静かに息を引き取られたのであつた。

のび縮みしながら生きて来た夫婦

大阪文化祭川柳大会で受賞した一句にも、夫婦愛が偲ばれる。あらためてすすむさんのご冥福を心からお祈り申し上げます。合掌
缶ピース四五本残し行つたまま

恭昌

■各地句会だより

いずも川柳会

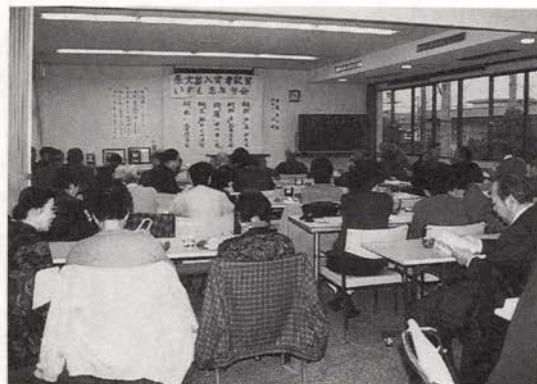
久 家 代 仕 男

いずも川柳会は大正十五年十月、尾添雷相・尼緑之助氏らによって川柳たかせ会の結成に始まり、麻生路郎師の川柳雑誌の新鮮な句風に魅せられ、路郎師の知遇を得て昭和二年、川柳雑誌簸川支部となりました。昭和六十三年、尼会長ご他界に至るまで六十一年間、柳界に君臨され、松江番傘社とともに中断のない古い歴史と伝統を会の誇りとして今日に及んでおります。

昭和六十三年の尼会長のご他界は、大きな衝撃でした。いずも川柳会の在歴が古いということで後を引継ぎましたものの、先哲の存在が余りにも偉大であつただけに戸惑うことばかりでしたが、本社の西尾葉先生はじめ諸先生の温情、お励ましとご支援に加えて鳥取の小林由多香・小西雄々の両氏、まつえの恒

松町紅、むらくもの藤井明朗、堀江正朗・芳子ご夫妻、石見の中川幸一の各氏の甚大なご声援に支えられ、その歩みを続けて参りました。

発足の手始めとして、会則付則を作成し、組織化に努め、編集と事務局を金村青湖、会計を板垣草丘の担当、婦人部の要に吉岡きみえ・園山多賀子・松本文子らを当て、各地域に代表役員を置き、長老の原独仙氏を顧問に



毎年、新年句会の午前中を同人総会とし、意志の疎通を計っております。現在では会の運営も円滑に進み、役員各自が持ち場で積極的に活動され、和やかな楽しい例会を開かれるところまで漕ぎつけて参りました。

会の目標として女性進出と高齢化の進む中であつて、気どらず驕らず楽しく、参加者には温かく親切にをモットーに、川柳を学ぶことにより人間探究と浄化に心掛けるようを合言葉に、全員取り組んでおります。柳誌も例会も隔月を原則とし、例会のない月に勉強会を開いております。

また、傘下の会として尼会長の遺産である塩治・高松の公民館川柳、老人養護施設の小山園の川柳会、富山川柳会の指導のほか、塩治小学校の川柳指導に久谷まこと・島祥庵の地元の人々が当り、活躍に見るべきものがあります。ほか、現在、公民館川柳に手を染めたばかりの会が二か所あり、底辺の掘り起こしに努めております。

現在、同人・準同人九十五名、会員二百二十名と大世帯になりました。来る五月二十三日には日御碕において尼先生の句碑建立二十周年記念大会を企画しておりますので、観光がてら本社同人・誌友諸氏のご来臨を賜りますよう、お待ち申し上げております。

2 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	1日(月)午後1時から 書く・変化・凄い・頭	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	5日(金)午後1時から バイク・つむじ・不安・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
西宮北口 川 柳 会	8日(月)午後1時から 青・聞く・科学・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ
八尾市民 川 柳 会	10日(水)午後6時から 高い・豆・座る・悪友	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
南 海 川 柳 会	12日(金)午後6時から 教師・思想・相談・自由	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川 柳 塔 ま つ え	13日(土)午後1時半から 冗 談 ・ 赤 ・ 強 が り	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	14日(日)午後1時から 焚 火 ・ 足 袋 ・ 立 つ	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
もくせい 川 柳 会	15日(月)午後1時から 西・献立・持つ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯 の 花	18日(木) 正午から 時計・盛る・裏町・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
富 柳 会	18日(木)午後1時から 化石・逃げる・倒えば	富田林中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
京 都 会 塔 の 会	19日(金)午後1時から 綿・垂れる・粗 末	京都府南労働センター 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的
南 大 阪 川 柳 会	19日(金)午後6時から 冷える・身分・威力・立派	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
川 柳 ねやがわ	21日(日) 正午から 広告・日記・ペット・自由吟	秦公民館 京阪寝屋川市駅からバス 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岸 和 田 川 柳 会	25日(木)午後6時から サラリ・好・せこせこ・掃除	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地理村
川 柳 東 大 阪	27日(土)午後6時から 酒・拾う・コラム・雪	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	28日(日)午後1時から 仇・端・クラブ・(和解)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡ください。

編集後記

三名は爆薬に点火した破壊筒を携えて突入、鉄条網とともに木葉微塵となった。

★「如月や江下北川作江たち」―毎年二月になると私はこの句を思い出す。本誌の昭和五十七年二月号に掲載された高杉鬼遊氏の作品で、同氏の代表作の一つではないかと勝手に決めている。この句を読んですぐにピンとくる人も少なくなっ

たのではないかと思うが、へ廟行鎮の敵の陣：ではじまる当時、一世を風靡した『爆弾三勇士の歌』の主人公がこの江下武二・北川丞・作江伊之助の三名である。★時は昭和七年二月二十一日午前五時、敵の十九路軍との戦闘で突撃路開設の命を受けた工兵部隊は急造破壊筒による攻撃を行うべく煙幕下に出発したが、猛烈な砲火に目的を果たせず、最後の手段として第一組の

★軍部はこの惨劇を最大限に戦意高揚の宣伝材料に活用すべく、楽譜を作った。

与謝野寛作詞・陸軍戸山学校軍楽隊作曲『爆弾三勇士の歌』、出版元は大阪毎日新聞社であった。本来は、爆破作業の拙劣さから尊い三人の生命を失ったのは作戦としても下の下であり、

「こんなにまで虚偽に満ちていかかわしい歌詞を名乗る詩人が書いていたのか」と團伊久磨も嘆いている。★当時、小学生であった私の頭にも焼き付くほど、強烈かつ執拗なプロパガンタであったが、この思想が後に特攻機や人間魚雷にまで発展し、私までが梱包爆雷を背負って戦車に体当たりする自滅の演習に青春を空費する羽目となった。(正)

○妻たちが翔んで 平和という構図 文子 事業の手伝いなどを仰せつかり、窓がだんだん大きくなってきた。もとより好きな道のこと、お役に立つならとうれしくお受けしている。○好きなことをして、家族に心配や迷惑をかけ、「川柳やめえ」と言われないよう、予防線を張っているわけである。世の亭主族よ、家庭内の平和を願うなら、女房族に好きなことをさせておくべし。(ふ)

ひとこと

日本一の顔

頼冠りの中に日本一の顔。水府道頓堀中座東、うどん屋今井前の右の句碑が、私を川柳に引きずり込むきっかけとなった。水府という名は、川柳に無関心だった頃にも既に私の耳目に触れてはいたが、幼い時分から芝居が身近にあった私は、初代鴈治郎の花道の治兵衛を、こんなにも完璧に捉えた川柳の魔力に魅せられたのであつた。 揚幕をつかうかとなる成駒屋 田中 薫

た。その死に、号外まで出たという。鴈治郎を、当時二歳の私が、直接、目にしたはずもないが…… 毎夜毎夜の死覚悟。玉しるぬけととぼけうかうか身を焦がす。大阪人がこよなく愛した初代鴈治郎の治兵衛を、前掲の水府の句は見事に定着しているのである。

○妻たちが翔んで

平和という構図 文子

事業主婦の私にとって、

主婦業に専念してさえいれ

ばいいのだが、それだけで

は少々物足りない。夫や子供達を通じて、自分の眼で

社会を見る。窓が欲しい。

○その目的からすれば、川

柳に出会えたのはとても幸

せだったと喜んでいる。と

ばいそいそ片付け、時間の

捻出をする。夜の句会に出る日、家族の夕食は普段よ

り二馳走が並ぶ。時間制限のある清記は夜更しになるが、「しんどい」などとはゆめ言わず、あくびを噛み殺し、元氣印を装う。

○好きなことをして、家族に心配や迷惑をかけ、「川柳やめえ」と言われないよう、予防線を張っているわけである。世の亭主族よ、家庭内の平和を願うなら、女房族に好きなことをさせておくべし。(ふ)

作品募集

初歩教室「進む」(3句) 吉岡美房担当

課題吟
(3句)
「街角」
「林」
「弱い」

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
水煙抄 (10句) 黒川 紫 選
銀河系 (3句) 内川 天 選
茴香の花 (3句) 小智 子 選
「弱い」 野中 御前 選
「街角」 岡本 清水 選
「林」 岡智恵子 選

4月号発表 (2月15日締切)

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

5月号 課題吟「熱」「練る」「雑誌」
初歩教室「姿勢」

本社2月句会

日時 2月6日(土) 午後5時半
会場 メンズファッションセンター3階
中央区内本町1-11 電話06-941-1918
地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角

兼題 おはなし
「たくさん」
「上役」
「甘い」
「回る」
「指」

席題 1 題 当日発表 各題2句以内
会費 500円
投句料 310円(62円切手5枚)同封のこと

柳箋(4cm×19cm) 1葉に1句を書き、
橋高 薫風 選
塩満 敏 選
小池 しげお 選
安藤 寿美子 選
宮崎 シマ子 選
板尾 岳 人 選

本社3月句会 8日(月)

兼題 「どきどき」「からだ」「押す」「痛い」「芽」

夜市川柳募集

第9回「声」 田中 好啓選
ハガキに3句 2月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「好き」 橋高 薫風 選
ハガキに3句 2月10日締切
投句先 〒540 大阪市中央区馬場町3-43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表 2月28日(日) ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「送る」 森中恵美子 選
ハガキに3句 2月15日締切
投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

定価 六百元(送料51円)

半年分 三千八百円(送料共)

平成五年 一月二十五日印刷
平成五年 二月一日発行

編集兼 西尾 童心 蔵
発行人 藤原 童心 蔵
印刷所 ウエムラ第2ビル202号室

〒545 大阪市阿倍野区三好町二〇一六
大坂市阿倍野区三好町二〇一六

発行所 川柳塔社

電話 (06)六六一六九一四番
振替口座大阪81-333六八番

■ 自分史・句集自費出版

■ 小・中・高・大学の教科書

■ 各種本の製作・出版

いろいろな

本 製作専門!

◇ 句集・詩集・自費出版等のご相談に応じます。

- 部数の少ない本も取り扱っています。

書籍・図書・印刷・電算

ミヤケ プランニング

MIYAKE
planning

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8

電話 06-659-5514

FAX 06-652-2928

図書出版・ジェイパブリッシュ

電話 06-658-8741

元湯
八尾天然温泉
ジパング日本海

ホテル・温泉・健康ランド

美人になるお湯 元気になるお湯
宴会に 研修会に 宿泊にどうぞ

● お問合せ・ご予約は… 〒581 大阪府八尾市八尾木北5丁目101番地
TEL (0729)94-3591(代) FAX (0729)92-0621